

書心

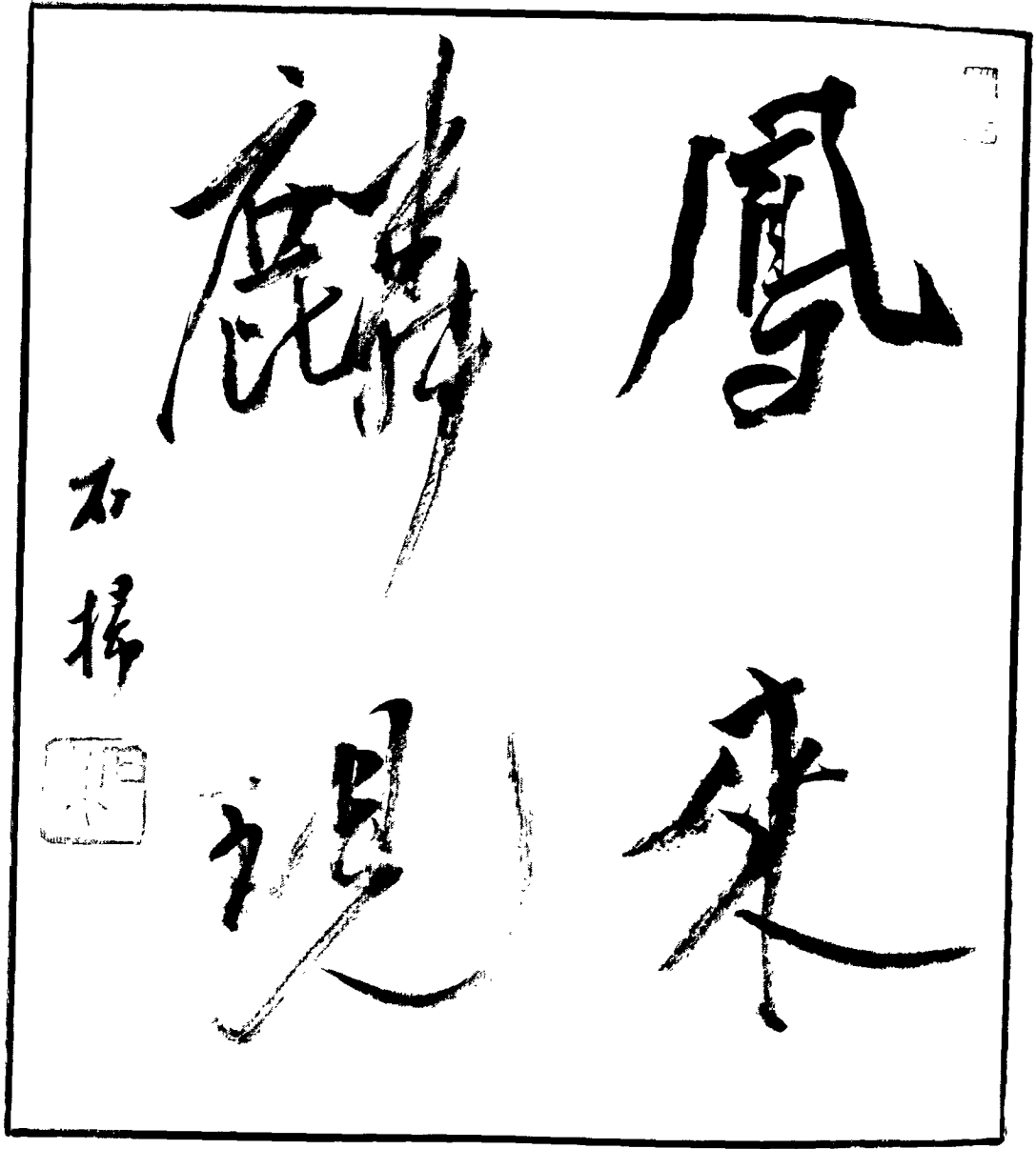
荒鷺

25

書道部創立 周年記念

書心13号・荒鷺26号

福岡大学学術文化部会書道部・書心会



書道部講師 赤木石掃先生書

言 頭 卷

絵でも書でも上り  
に書こうたのんて  
とんでもたのんて  
一能谷守一  
へたも絵のうちより



荒鷲のあゆみ

# 目 次

赤木石掃先生書	1
卷 頭 言	2
目 次	4
序	6
特 別 寄 稿	
揆 揆	8
書道部創立二十五周年に寄せて	9
二十五周年を祝う	9
御 揆 揆	10
福大書道部創立二十五周年を迎えて	10
古き良き伝統を継承して	11
最初の漢字・甲骨文字	11
伝 統	12
創立二十五周年記念書道展作品	15
軌跡―道標	33
O B 自由投稿	
書道部バンザイ	42
思う 事	42
豊田商事事件と先人の教え	43
よろこび	44
記史朗展に寄せて	44
心 如 花	45
いじめと教育	45
八年前を思い出せ	46
練習に燃えた三年間	47
福岡大学長	伊東 正則
学 生 部 長	林 基
書 道 部 長	小西 高弘
書 心 会 会 長	柴田 一夫
名 誉 教 授	古田 龍夫
常任幹事会幹事長	野崎 浩司
人文学部助教授	佐々木 猛
書道部講師	赤木 石掃
四十六年度卒	小野 善廣
五十年度卒	押越 和利
四十三年度卒	平井 晴彦
五十七年度卒	森田 富美
五十八年度卒	中村 純一郎
四十三年度卒	松本 直人
五十六年度卒	徳久 政機
五十三年度卒	十代田 雄治郎
五十五年度卒	堤 寛
	桜井 典

あゝ天竺	.....	五十一年度卒	荒尾記史朗	48
ある夏の日	.....	五十六年度卒	鶴田定司	49
新たな旅立ちへ	.....	五十二年度卒	永野雄二	50
なすびのへた	.....	四十四年度卒	前崎鼎之	51
書道部机上辞典	.....	五十一年度卒	山村昌次	52
自由投稿				
輝いていたとき	.....	人文学部 一年	財部知子	56
星空の楽しみ方	.....	法学部 三年	照本英治	56
日本一周、一万kmの旅	.....	法学部 三年	原浩志	57
僕の朝だよ〜ん	.....	商学部 一年	後藤元彰	58
秋日	.....	人文学部 二年	石川憲喜	59
時空を越えて	.....	法学部 四年	藤代裕之	59
最近思うこと	.....	人文学部 二年	真角寛子	60
私の書道感	.....	法学部 三年	平田聖子	60
書感	.....	商学部 三年	山本順一	61
部員の一言	.....	.....	.....	62
書道部データ・バンク	.....	.....	.....	64
書道研究	.....	.....	.....	66
福岡大学学術文化部会書道部規約	.....	.....	.....	90
福岡大学書心会規約	.....	.....	.....	93
書心会会員名簿	.....	.....	.....	95
書道部部員名簿	.....	.....	.....	110
昭和六十年 福岡大学書道部役員名簿	.....	.....	.....	113
昭和五十九・六十年 福岡大学書心会役員名簿	.....	.....	.....	114
表彰者	.....	.....	.....	115
創立二十五周年記念実行委員会組織表	.....	.....	.....	116
福岡大学書道部二十五年度史	.....	.....	.....	117
編集後記	.....	.....	.....	123

## 序

ここに福岡大学書道部機関誌「書心・志鷲」が創立二十五周年記念誌として発刊できますことは、私共書道部にとりまして誠に慶びにたえません。

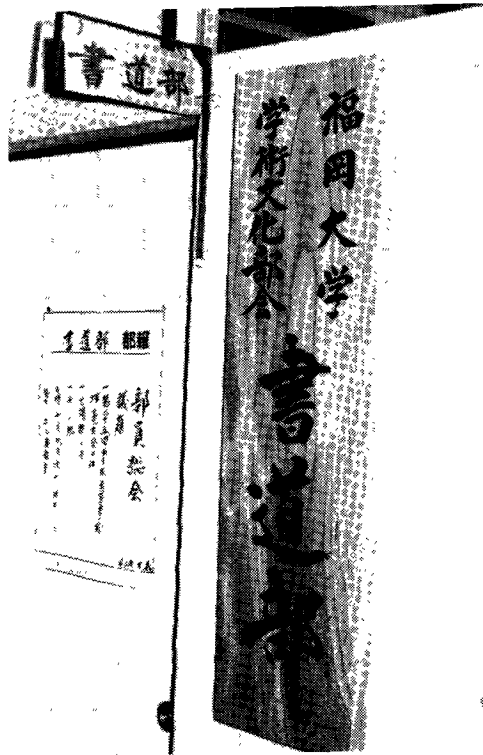
創立二十五周年を迎えに我が部は伝統的にみても素晴らしいサークルに成っております。諸先輩方の絶まない努力により築いてこられた伝統を踏み締めるというの伝統を継承し、二十五年を経た現在、我々は今、更に何をすべきかとの使命を考え、日々の活動に励み、学生らしい自主的で創造的な活動により深く追求し、一歩一歩、堅実に歩んで行きたいと思っております。

最後に、創立二十五周年記念誌の発刊にあたり、御尽力頂きました諸先輩方並びに関係者各位に深く謝意を表します。

第二五代幹事

尾崎光義

学而会館二階にある部室



部室には卒業生の名札が並んでいる



# 挨拶

福岡大学長 伊東 正則

このたび福岡大学書道部創立二十五周年記念機関誌『書心・荒鷲』の発刊にあたり、一言ご挨拶申し上げます。

書については、今さらここで述べるまでもありませんが、文明の根源である文字を芸術と云う分野に確立させ、人間の道標になし得たことは、東洋人の優れた知恵であると思います。書は人なりといえます。時に禅の高僧の書などに接しますと、雄渾にして闊達自在、それについて微動だにせぬ静寂に根づいており、まことに人間存在の深奥をかいまみる感があります。

ところで現代の学生諸君の行動をみますとその内容は多種多様にわたり、一つのことには没頭することかないように見受けられます。つまり一つの高い目標に向けて十分に時間をかけ、じっくりやり遂げて行くこうとすることが欠けてきているように思われます。自分が定めた目標に向ってその奥儀を極めんと飽く無き努力を積み、あるいはその極意に触れんと日々修練に励む、その過程こそが学友会活動の意義であり、目的であります。その結果として必然的に人間性、あるいは、人格の形成がなされるのであります。

書道部は学術文化部会での主要なサークルとして、その目的達成に日々努力しております。書の道は無限です。部員諸君が益々精進せられ、書道部が永遠に充実発展しますよう祈念してやまない次第です。

書道部創立二十五周年に寄せて

福岡大学学生部長 萩基

福岡大学書道部では、夙年で部創立二十五周年という歴史の大きな節目を迎え、これを記念して同部及びOB会機関誌の合併号で書心・志業の刊行されることになりました。ここに同慶に存ずるところです。これも偏に、歴代部員の書道に対する情熱の集積の現れであると思えます。

さて同部は、昭和三十四年六月に、書道・ペン習字の同好会として発足し翌年十一月に、その活動が認められて、早くも部に昇格しました。その後、昭和三十六年に本学書道部の主催で、第一回「西日本高等学校揮毫大会」を開催し、現在に至るまで毎年継続して開催されておられ、西日本の各高等学校から常に高く評価を受けております。また同じ昭和三十六年には、本学バリーゲーションととり、福岡学生書道連盟を組織し、常に中心的役割を演じておられます。更に本学書道部のにやまざる活動の混発つておすものと、これらも高く評価致してまいります。

今後々の発展を期すためには、部員の日常の修煉をもとより、各部員がより真摯に己こまで自己の人間性の高揚を成し得るかのいうことが大切にならねばと思えます。

部創立二十五周年を期に、新たな気持ちのスタートラインを以て、今まで築いてきた伝統を守り、常に高邁な精神の涵養と新しい創造を目標として努力していき、更に部の発展を成るを信じます。

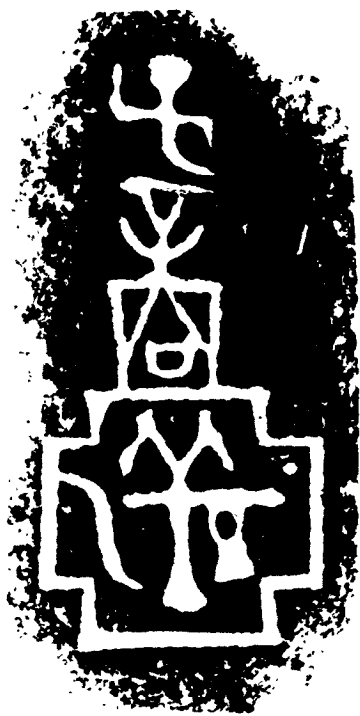
二十五周年を祝う

部長 小西高弘

書道部創立二十五周年を祝ひ申し上げます。昨年、福岡大学が創立五十周年を祝ったばかりですが、書道部がその半分の歴史を歩いてきたことは部員の方々に比べて、大学にとっても意義深いことと存じます。

福岡大学が世界の学問の府となるために、書道部の存在価値はますます大きくなるでしょう。またやうなことを願っています。書道部の卒業生の方々には、日々の時々の部室の匂いが今も忘れられず、胸中ではやがくるものがあるかと存じます。日々の仕事・人生の活カとして、いつまでも書道部を大切にしていってほしいものです。

部員諸君はこの良き年めぐる機会をたたくて下さい。諸君が書道を通じた思い存分、創造的活動を行なわれることを願、つやみせん。諸君の心もとび出し、全国へ、更に世界へ眼を開き、書道を通して友情を拓けることを次の目標にしようといひたいまは。



御挨拶

書心会々長 柴田 一天

私共、福岡大学書道部では、本年創立二十五周年を迎える事が出  
来ました。これも偏に皆様方の深い御理解とよめたたかい御心の賜と  
心より御禮申し上げます。

さて、書道部がこれまで歩んで来た年月は歴史的背景も、遠く  
幾々の苦悩によつかり、時に挫折し、それを乗り越えざることを繰り  
返して、たように思われます。

創立当時、そして現在も「青春時代の中心」の学生こそが主役であ  
り、その学生の新鮮な発想、若く論議行動が二十五年の歩みと  
見たと云、これも過言ではありません。

また十五年の間、お世話頂いた古田龍夫前長、そして三十七  
年より今日まで御指導を頂いて下さる赤爪五揚先生、今日まで御指導  
ご援助を頂いた、大学関係者の皆様方にはこの紙面でお借りし、厚  
く御礼申し上げます。

私共は今後何を成すべきか、その使命を考え、書道部・書心会共  
に手を携えて、頑張っていく所存です。皆様方には今後、養々の御  
指導、御鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。

福大書道部創立二十五周年を迎えて

福岡大学名誉教授 古田 龍夫

福大書道部創立二十五周年を迎えるに當って私は感無量である。  
私が田村先生からバトンを受けて書道部長となり、た當初は、ペン習  
字との同好会から部に再格したばかりの頃であり、先輩の御指導

君は福大書道部の存在を字の内外に強く認識して貰い各種の協力を  
得るために随分と苦勞したものである。それが今日では、ペン習字  
とも別次元に押し上げられた書道部となり、このころである。

これは、先輩の御負諸君の一致協力の努力もつるものと聞けら、

す私共、當初から御指導されて、赤爪先生に對し、心とこめて感  
謝の意を表し、且、私共が権威ある書道家としての先生、御指導  
と立派な御人柄による感化が、たけは、今日、優れた書道部  
が生まれたのである。

また私共、部長として御負諸君の個人的なことで苦勞させられた  
ことは、一度もない。亦、常に衆目書道部長に、たと思、ている。そ  
して、すに卒業した先輩、諸君はいずれも揃、て各々の職場に所  
在得ている。さらに、徳久政博君、日長入道は喜ばしい限りである  
と、ところで、私達自分、周囲に多くの温暖なる友人を持つこと、  
心豊かに生活と運命、開拓が保障されるのである。御負諸君は  
今最も力強い書道時代に書道という高い藝術の研鑽に情熱を燃や  
り、相共に励んでいる。

この生涯にわたる友人情の諸君は、互いに心温まる一生の  
友となるであらう。それ、人生の宝である。大切に大切にしてい  
れば、今日すでに四十前後となり、この私の子役達の学生時代に  
これらの友人が人生の宝であるから大切に疎遠をわらぬよう  
にせよ、と何度も言、ていたが、それが私がかうもやうにわか  
つたことが今日までわらぬ、い、のこす。

私共御負諸君が、小西部長の御指導の下に、このよう、山と  
のりも築かんと、を期待するものである。  
最後に、たが、五十二年には部長退任のパーティー、そして五  
十九年一月には、叙勲を記念する祝賀会とこの私の為に、開いて頂  
く等、書心会の柴田会長を始めとするOBの方々、さらに現役諸君  
に深く謝意を表したい。

福岡大学書道部、そして、書心会が今後益々発展されるように  
祈念するものである。

# 古き良き伝統を継承して

宇術文化部会常任幹事会

幹事長 野崎 浩司

伝統という言葉と耳にして耳近ではよく、古く古いといひ、固くるいといふような言葉がのえ、てきます。

確かに、教養する社会環境の中において、いい伝統というものは見失ひがらに、てまいます。しかし、やうい、た環境の中で伝統というものを再度み、めなおし、その中に新しいものを発見していくことも必要ではないでしょうか。故きを温めて新しいを知る、ということとわづかありますが、今現代人が最も忘れがらに、ていられるのだと思、ています。

現在、高度情報化社会と呼ばれる中、ニューメディアの発達により情報は飛びかい、新しい情報ごとんと増え、とうてい、やうい、たものに影響され、てまいます。やうい、た多様な情報の中から、人々は何れに選択、てい、か、ねば、ならないのです。

我々、今や、い、た世の中で物事の本质を見抜く眼を養わなければならぬのです。その本質とは伝統の中にこそ脈脈と流れており、その伝統の中から取捨選択、てい、た事が大事であると想、ています。書道師において、その本質が何百年も間受け、つづかれ、今も古典芸術として続、てい、るものと、同じ事では、ない、てい、まいます。

今回、書道部の合同機関誌「書心」を奮、てい、て書くにあたり、ま、てい、たO.D.先輩方との交流、その伝統の深さを目のあたりに感じ、た、大変感、てい、てお、り、ます。二十五年という伝承、今も受け、つづ、か、れ、る、大、事、に、つ、れ、て、お、る、と、想、て、い、ま、す、が、部、員、諸、君、も、その血を受け、つづ、か、す、宇、術、文、化、部、会、の、中、の、雄、と、し、て、活、躍、し、て、お、る、書、道、師、を、何、れ、と、見、つ、け、細、く、こ、と、を、願、い、し、て、お、ま、せ、ま、い、ま、す。

# 最初の漢字・甲骨文字

人文学部助教授 佐々木 猛

今と云ふこと三千年の昔、それまで野々都を遷、てい、た殷帝国は、今日の河南省安陽県に最後の都「大邑商」を建設、てい、た。こゝが十九世紀末に発掘された安陽の「殷墟」である。「甲骨文字」とい、この殷墟から出土した亀甲・獸骨に刻、つづ、か、れた古代文字であり、今日解読、てい、る最初の漢字である。

しかし、この中国最古の文字は、今日のように、人から人へ情報を伝える道具ではなく、自らの記憶を残り、てい、るために用、い、られる道具でもない。それ、この世を支配する天帝の意思を問、う、儀式を行、な、つ、た、と、い、ふ、結果を記録、つづ、か、れたものである。

龜の甲や獸の骨の裏側に穴を掘、り、そこに焼、つづ、か、れた青銅の火箸を、てい、て、込、め、ると、その表側に「ト」・「イ」などのひらがなが出る。王は、この形を見てそこに表、め、れた天帝の意思を知るのである。その内容は、祭祀・その年の豊凶・風雨・軍事・臣下や同盟国に対する命令・狩獵・往來・病氣・卜句の九種類に分類、てい、られるが、全体の九割が祭祀の卜辞である（占、い、の問、い、やその結果を記、つづ、か、れたものを卜辞とい、う、）。

殷帝国の王は、す、こ、ろ、く、時間をも支配、つづ、か、れて、おり、一句（十日）ごと、に次の一句の吉凶を天帝に問、う、た（この卜辞を卜句とい、う、）。

次に一つの例を挙げ、てい、よう。



こいひ午の肩胛骨に刻んだ例で、初期の優品といわれるものであ  
る。大略三つのト母<sup>ト</sup>見え、左側のもは上より三分の一の所の「  
父母」字から始まる。やひ右から左に次のように解説される。

「癸酉ト殷貞問亡田王二日セ

王固日給出彝出樽五日

丁丑王賓中丁卒陞在

癸辛十月」

訓読すれば次のようになる。

「癸酉にト<sup>ト</sup>了殷貞<sup>ト</sup>問、旬<sup>ト</sup>旬に田セまかむと。

王ニたび<sup>ト</sup>て日<sup>ト</sup>く、「給<sup>ト</sup>、彝有らん、樽有らん」と。

王固みて日<sup>ト</sup>く、「給<sup>ト</sup>、彝有らん、樽有らん」と。

五日丁丑に王、中丁に賓するに、卒れ陞<sup>ト</sup>うかりま。

癸の卓に在<sup>ト</sup>り<sup>ト</sup>とま。十月」

「癸酉」とは、占った日の干支(當時口これて日を表わした)。

「殷」とは、占人の名。

次の一句のこととトしたところ、異帯は分ひろうという答えが  
たが、細かく見るとトの形に異変が見えたのであろう。王は身体に  
苦痛を受けたであろうという占告が出た。五日後の丁丑の日に集  
て王が祖先の王の中丁の霊を迎える祭りをしているとき、祭殿の階  
段から墜ちようになつたのである。

今日約三千の甲骨文字が知られ、そのうち約一千字が解説されて  
いる。すべて骨の甲に刻まれているものであるから、「筆法」を鑑  
賞することはできないが、今日も使われている漢字の祖として、古  
代中国の文化をその中に見ることが出来る。

文字のことばもと「文」といふた。甲骨文字では、「文」<sup>文</sup>「文」<sup>文</sup>  
などと記し、青銅器の銘文である金文では「文」<sup>文</sup>のように記す。  
これは人の胸に書いた文身(いれずみ)であつた。文身は一定の年  
齢に達するたびに行なわれ、新しい世帯への加入儀礼の一部であ  
つた。「文」は正しくは、「羞」と書くべきで、「尸」はひたいを表  
わし、「文」はひたいに四えた文身の形である。今日の日本でもア  
ヤッコといひ、子供が生まれて宴客する時、そのひたいに「X」

のようになり、或いは「大」「小」「犬」のような字を書く風習  
が残っている(「類」の字も文身を加之たひたいを意味する)。人が  
死んだ時も屍体を聖化するために文身を切れた。

このように文身はあつた。人生の転機となるような時の通過儀礼  
の一つとして行なわれた。「文」とは神にまかす、了祝されたもので  
あり、美しくするこぼしいものであつた。そこからは人の美徳をい  
詰らなり、中国文明の基本理念となるのである。

文身は東方の沿海の民族・夷系(殷の中心部もこれである)の俗  
であり、古代の日本も男子は黥面文身を施していたといふ。「宗  
像」という地名も恐らくも「胸形」であり、胸に文身を施した  
海洋民族が、朝鮮半島・中国の江南・九州北部に活躍していたの  
をこりもとめられたものであるといえる。

はるの古代中国の神聖文字である甲骨文字も、このように今日の  
我々も全く無関係ではないのである。

一九八五年八月

### 伝 統

福大書道部の伝統を、私の目から考えて見た。

講師 赤木 石掃

二十五年と三期に分けて初めの十年、次の十年。そして、最近の五  
年と言うふうに分けて見る。

(一) 創設期、初めの十年間である。会長柴田死霊の耆頭として同  
好会が出来、同好会を部に昇格させようと最長入選の実績をあげ、  
部の結束も密固にた先望遠。その為には上級生が下級生をよく指導  
し、かわいがる。卒業生は在校生の面倒をよく見る。といふ、た人間  
関係の強さ。

これは、福大書道部の一つ大きな伝統だと思ふ。大先輩連の人間  
関係の強さは、他校の追隨も評さない立派なもので敬意を表する次  
第です。

現役生も一層この伝統は、伸ばしてもらいたい。

(一) 搖籃期 次の十年。部は出来た。実績もあげた。

ソーマ、大連連盟に於てもり、ター格として頑強なことも出来るように、た。

だが大連の書道部はどうあるべきか、勉強の方法を確立し、内部を充実せねばならぬ。

即ち勉強方法を「古典中心」。その上に立つた自己の確立。その花がどのように咲くか、という意味で搖籃期とした。その意味は、次の時代が、何時迄になるかわからないが、円熟した時代を迎えたいからと言う野望に、つながらぬ。

(二) 目下躍進中とでも言うか現代迄の最近の五年間。

展覽会至上主義ではなく、古典から自己の発見。その為には、日本の書道家の動きや作品等も広く眺めながら役立てて行く。と言う勉強の仕方。

古典だけでは作品はつくれない。靈感と言う唐時代の詩人は、王羲之のあでやかな形の俗。好きを突いて悪口を言っている。

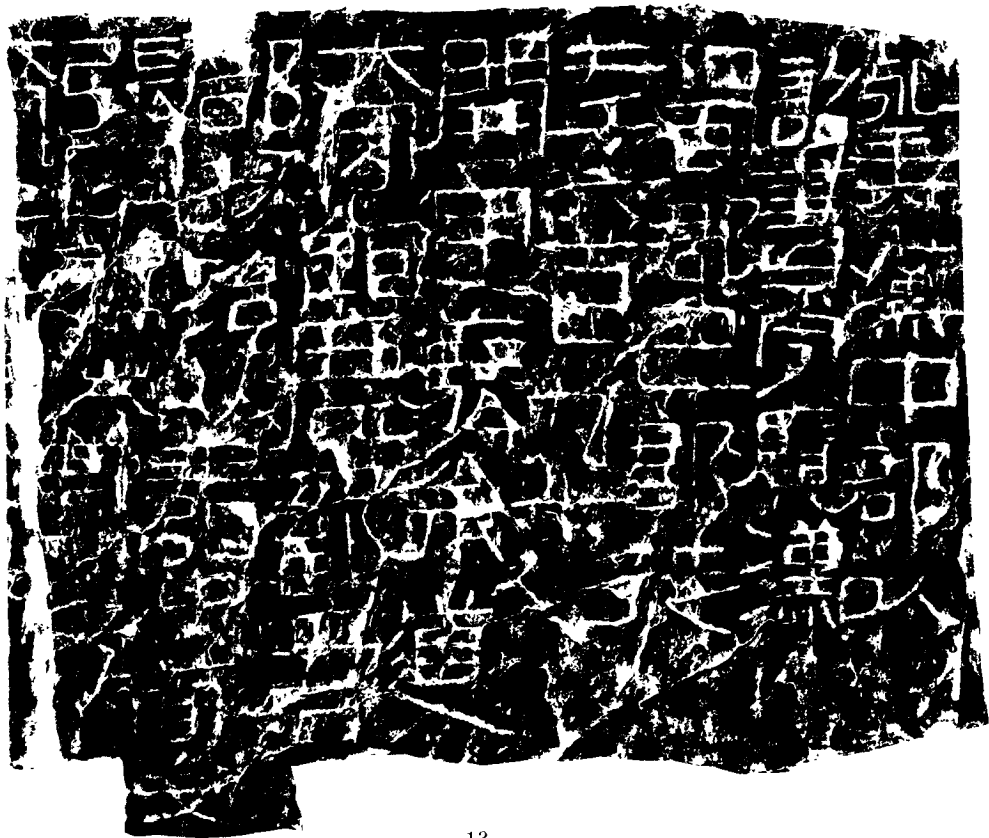
王羲之が草書の神取でも、あの形を追うようでは駄目。自己の発見にむつかしいものである。

然し目下その勉強方法を模索中である。

この創設期の開拓精神・強い人間関係は、現在の書道部の運営の骨髄をなす伝統であり、私は、日常の行いに参加して、ユナイとその意思をうけている。

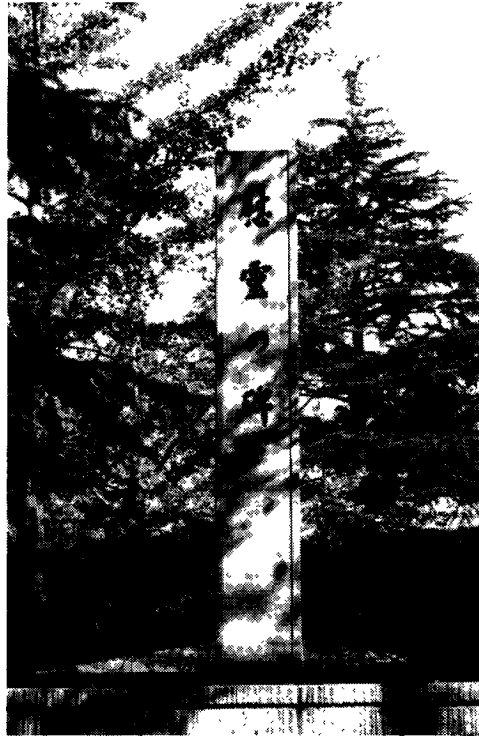
偉大なるかな福大書道部。と感ぜずにはあらぬ。この内閣環境から一歩眼を外にむけて、勉強のあり方を(二)の搖籃期で考えて見た。この勉強方法は、伝統として更にのびることだろう。目下(三)の開花を卓展や市展という「公」の場で見たいものだ。

かくして、努力された草書の努力に敬意を表し、ついで現在努力中の現役の皆さんをたのもしく思っている次第です。



開通優斜道刻石

現役生も一層この伝統は、伸ばしてもらいたい。



福岡大学創立五十周年に建立された  
慰霊の碑 赤木石掃書



5周年記念	執	中	殿	藍	書
10周年記念	遊	心	村	木	田
15周年記念	鍊	磨	赤	石	石
20周年記念	養	志	木	掃	掃
”	自	然	赤	木	書
	然	妙	山	石	書
		有	本	掃	外
			空	書	

福岡大学書道部創立 25 周年記念

# 書道展

会 期	昭和 60 年 11 月 1 日 (金) ~ 4 日 (月)
会 場	福岡大学 1 号館
主 催	福岡大学書道部 福岡大学書心会



一、...  
 二、...  
 三、...  
 四、...  
 五、...  
 六、...  
 七、...  
 八、...  
 九、...  
 十、...

▲法学部三年 原浩志

死研如名道...  
 嗚呼...  
 銘...

▲法学部三年 田中英樹

嗚呼...  
 嗚呼...  
 嗚呼...

▲工学部三年 尾崎光義

嗚呼...  
 嗚呼...  
 嗚呼...

▲経済学部三年 瓜生達哉

嗚呼...  
 嗚呼...  
 嗚呼...

▲法学部四年 藤代裕之



清陽以鏡和送在梅香秋多如送多之馬疾之能舉深矣  
 秋風紅野秋風紅野秋風紅野秋風紅野秋風紅野  
 秋風紅野秋風紅野秋風紅野秋風紅野秋風紅野  
 秋風紅野秋風紅野秋風紅野秋風紅野秋風紅野

▲人文学部 二年 大谷 薫

漢書卷之九十四 志之九十四  
 禮樂志第九十四 禮樂志第九十四  
 禮樂志第九十四 禮樂志第九十四  
 禮樂志第九十四 禮樂志第九十四

▲工学部 二年 木下 晋

明朝人車輪制 乃看到 塔銘 西洋日槍就  
 已定牛牛橫東方若自 針 去庚漢人收同  
 不亦曉郎道相吉 莫前聲 莫前聲

▲経済学部 二年 白糸林太郎

慈惠英子其為多事 已其馬恆美 通惠等而書者 為其後先 俾托中東表  
 而皇觀者為言 御偏中者未提 乃執而應 海者為舟 舟者三層 在崎而野者  
 為本中神 運者女 為皇製少 多所 伴立日 忽而之風 韻者乃者乃 亦亦推  
 已飛起帶後者 運者運者乃者 亦亦首 大皇皇 伴運者 皇皇國乃者

▲商学部 二年

前田秀樹

張生手 指石鼓 文勸我 試作石鼓 歌少後 無人 論他 死才

▲薬学部 二年

正木喜美子

持時系石鼓 何用 細使 還過 海師 宜士 憤起 揮 天不 大開 明堂  
 空胡 望 諸候 劍 輝 鳴 舞 聖 於 岐 陽 騁 雄 俊 名 鼓 志 節 子 子 子

▲人文学部 二年 真角寛子

幽咽流涕難表在滄海凝化、亦通續指願則  
有悲時恨、此情全積、脈有餘、聲及舞臺上。

野僧早早餓不能飽既見寒溪有炊煙

▲人文学部 一年 石田陽子

東坡道人云沈泉張處何時到眼

陽子註

郵路老處有書子 執望黃杖而進、人盡在巷根直控

▲經濟学部 一年 井上憲司

下幅巾青衣袖手側 初者為長少他身尾冠係道

脈摘既首乃陳珀石老屋中 係衣口切首而動 士尚註

由道屢難處時至何處前 處不到因斷

▲經濟学部 一年 岩井弘一

形燕子揚念室燕等、秀甲淫呢喃語然不

可曉愧我不如芳冶體若何傷海慈柔日 弘一註

德之志也復其術者守高物物凡物皆守  
 不必令人異陸陸一碧千里非 樓紅海空是哲宗  
 入屏風十首：通靈龍在時天以事前。貞弘

▲商学部 一年 岸原貞弘

農夫去草嘉穀必茂志日除毒去道以清若日言  
 有武甘受顯歎聞其名請暑功重委後事滂存職  
 嚴整庶惡其有行達孝弟不軌仁義者 善心

▲商学部 一年

北本正範

龜鶴年壽齊相介不祀殊種是靈物  
 相傳正形魁鶴有冲宵心龜獻曳尾居  
 心竹而相相上堂櫻振功慎勿語 聖人必以

▶經濟学部 一年 鬼頭雅人

商学部 一年 児島道彦

桃李無言弄風黃鶴惟見綠奴人言事八岳仲儀  
有江船未終未終歌魚有海之裝卷收納中幸不敬  
遠此紅白喜營入山嶽進隨異人以希 蓮子心

商学部 一年 後藤元彰

外表胡公 概通經略  
廣西期待良厚 亦不

以爲大尉黃瓊所辟 後望三月後房果望黃瓊未刻  
史二千石權重之堂中餘人 由言責意活動很多致亦私  
故勞對日言之而果自非果私 亦果深為民言

人文学部 一年 新開祥子

商学部 一年 豐永泰之

黃菊紅茱滿泛秋千里  
結言穿有後

東洋實業社  
十九年秋  
泰之

▲法学部 一年 中尾明子

納芳子其何眼百寶三之達觀字遠想乃人家婦兮春風泛天  
宇兮清則大洞庭之白浪漲北法之若灣勢任人而往非勿當  
雙鳥凡味今首款之千奴卷震洋而占俱運 明子記

▲理学部 一年 西本裕介

依岩集開見平山夜開集其抽屋椽我采石之意通  
然老松魁梧數百年斧斤不斫今冬天風鳴撼皇  
手弦洗耳不須善薩泉嘉三子甚好賢林平記

早被燁誤欲粧娟臨鏡墮承恩

▲人文学部 一年 牧迫栄作

不在貌教妥若為容

杜荀鶴詩  
春官 榮作臨

龍、翔、鷹、舞、舞

▲ 賛助出品 講師 赤木石掃先生

白妙の袖ふりは入て  
たなはたの六の川原  
ままたた一らし  
丹阿彌

▲ 柴田一夫 (36 年度卒)



砂洲  
思

▲ 柴田一夫 (36年度卒)

義志

▶ 安河内克行 (三九年度卒)

一期一会

▲ 原 通幸 (37年度卒)

善山智海

◀ 西 隆義 (39年度卒)

▲高橋幸代（四三年度卒）

生也月日大校之日月公守... 高橋幸代

▲德久政機（四三年度卒）

有恩風... 德久政機

▲二村文夫（四三年度卒）

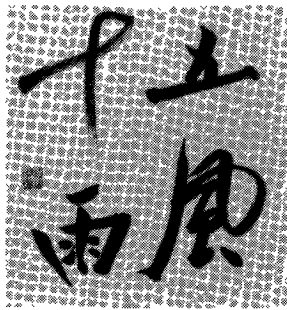
紫北... 二村文夫

原博幸

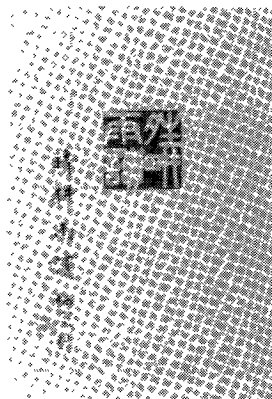
▲原博幸（43年度卒）

谷口薰

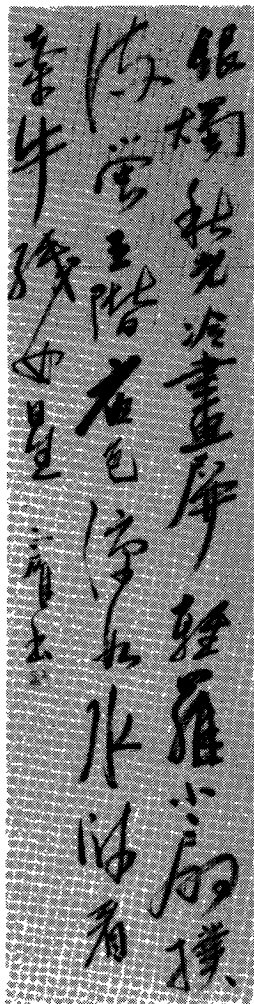
▲谷口薰（四三年度卒）



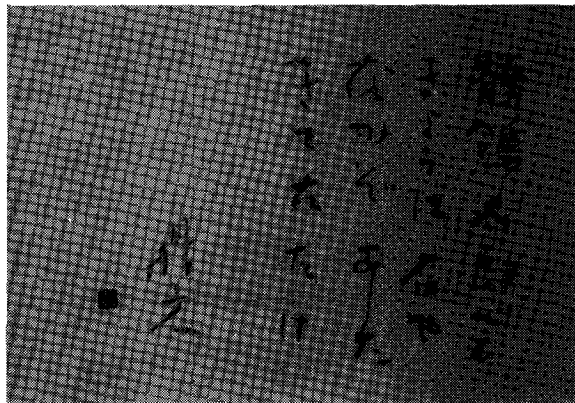
▲ 船越達也 (43 年度卒)



◀ 平井晴彦 (四三年度卒)



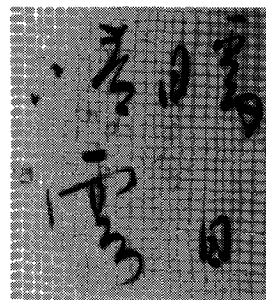
▶ 尾中 正 (四五年度卒)



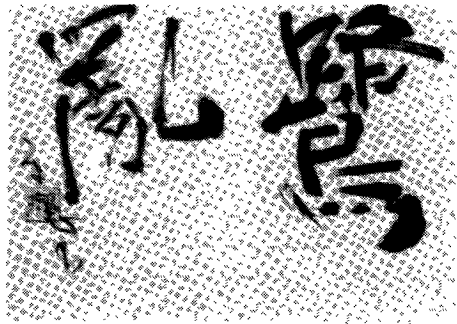
▲ 前崎恒春 (44 年度卒)



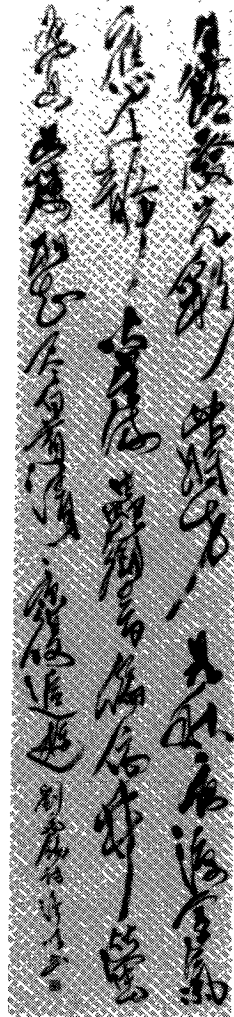
▲ 山下陽子 (45 年度卒)



▲ 御田満生 (45 年度卒)



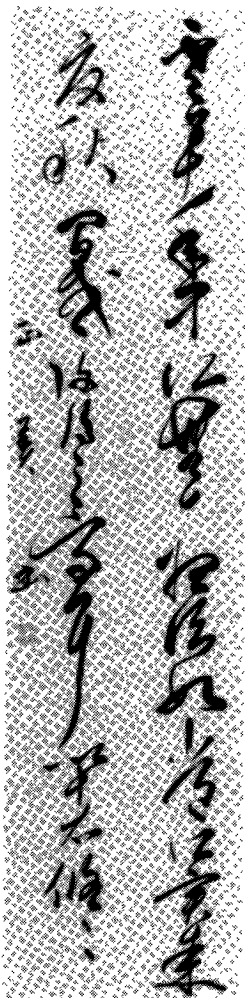
▲ 佐々木盛勝 (48 年度卒)



▲ 横沢 順 (45 年度卒)



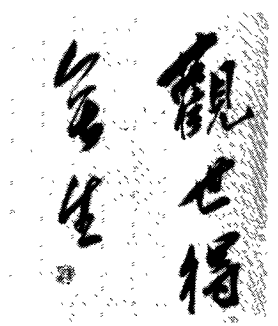
▲ 村上廣子 (15 年度卒)



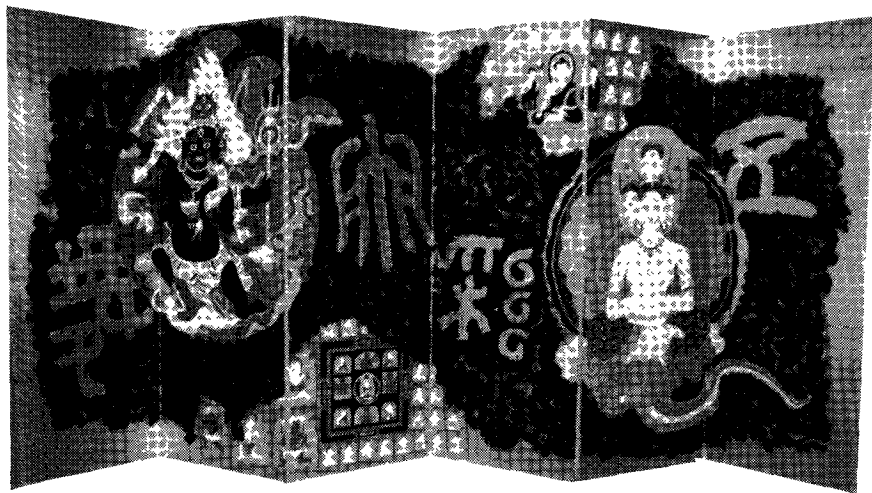
▶ 佐野正美 (五十年 度卒)



▲ 安河内純一 (46 年度卒)



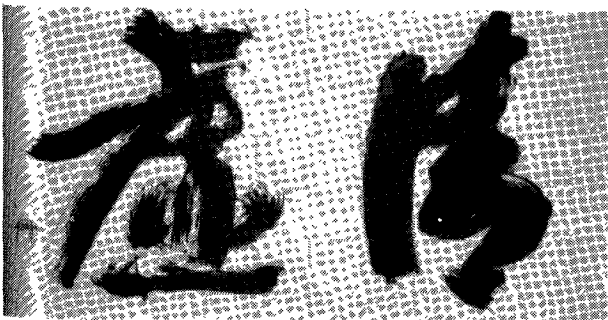
▲ 小野善広 (46 年度卒)



▲ 荒尾記史朗 (51 年度卒)



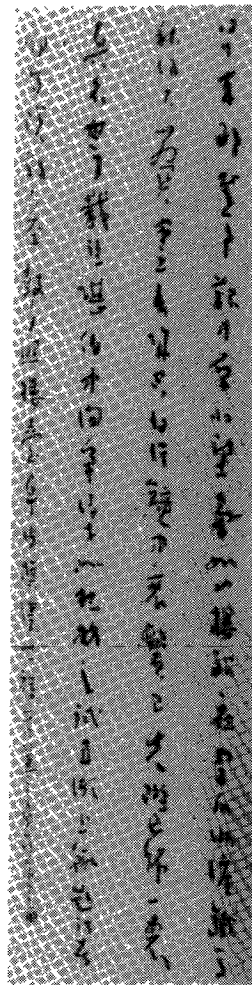
▲ 南部好孝 (51 年度卒)



▲ 田中博美 (51 年度卒)



◀ 宮崎秀博 (五〇年度卒)



▲ 末広昌徳 (50 年度卒)



遠事未歸有信  
遠事未歸有信  
遠事未歸有信  
遠事未歸有信  
遠事未歸有信  
遠事未歸有信  
遠事未歸有信  
遠事未歸有信  
遠事未歸有信  
遠事未歸有信

▲河野清文(54年度卒)

山陰西齋為客開翠  
山陰西齋為客開翠  
山陰西齋為客開翠  
山陰西齋為客開翠  
山陰西齋為客開翠  
山陰西齋為客開翠  
山陰西齋為客開翠  
山陰西齋為客開翠  
山陰西齋為客開翠  
山陰西齋為客開翠

蓮雨後南堂  
蓮雨後南堂  
蓮雨後南堂  
蓮雨後南堂  
蓮雨後南堂  
蓮雨後南堂  
蓮雨後南堂  
蓮雨後南堂  
蓮雨後南堂  
蓮雨後南堂

▲米島邦章(54年度卒)

有宅人何足言門  
有宅人何足言門  
有宅人何足言門  
有宅人何足言門  
有宅人何足言門  
有宅人何足言門  
有宅人何足言門  
有宅人何足言門  
有宅人何足言門  
有宅人何足言門

▲城戸信比古(57年度卒)

鶴岡英子  
鶴岡英子  
鶴岡英子  
鶴岡英子  
鶴岡英子  
鶴岡英子  
鶴岡英子  
鶴岡英子  
鶴岡英子  
鶴岡英子

鶴岡英子  
鶴岡英子  
鶴岡英子  
鶴岡英子  
鶴岡英子  
鶴岡英子  
鶴岡英子  
鶴岡英子  
鶴岡英子  
鶴岡英子

鶴岡英子  
鶴岡英子  
鶴岡英子  
鶴岡英子  
鶴岡英子  
鶴岡英子  
鶴岡英子  
鶴岡英子  
鶴岡英子  
鶴岡英子

鶴岡英子  
鶴岡英子  
鶴岡英子  
鶴岡英子  
鶴岡英子  
鶴岡英子  
鶴岡英子  
鶴岡英子  
鶴岡英子  
鶴岡英子

鶴岡英子  
鶴岡英子  
鶴岡英子  
鶴岡英子  
鶴岡英子  
鶴岡英子  
鶴岡英子  
鶴岡英子  
鶴岡英子  
鶴岡英子

▲鶴岡英子(56年度卒)

満招損  
謙受益

◀ 津村文彦 (五八年度卒)

此書是... 所用... 年... 生... 卒... 年... 卒...  
此書是... 所用... 年... 生... 卒... 年... 卒...  
此書是... 所用... 年... 生... 卒... 年... 卒...

▲ 満生憲親 (58年度卒)

此書是... 所用... 年... 生... 卒... 年... 卒...  
此書是... 所用... 年... 生... 卒... 年... 卒...  
此書是... 所用... 年... 生... 卒... 年... 卒...

▲ 床嶋俊一 (57年度卒)

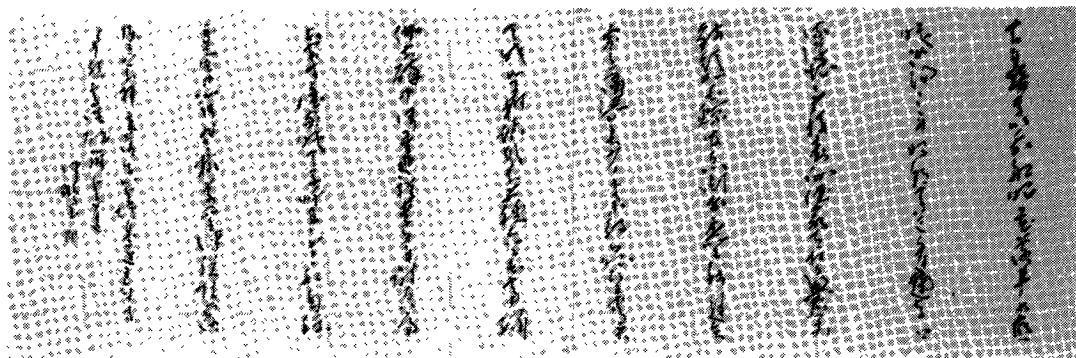
此書是... 所用... 年... 生... 卒... 年... 卒...  
此書是... 所用... 年... 生... 卒... 年... 卒...  
此書是... 所用... 年... 生... 卒... 年... 卒...

▲ 坪矢一義 (58年度卒)

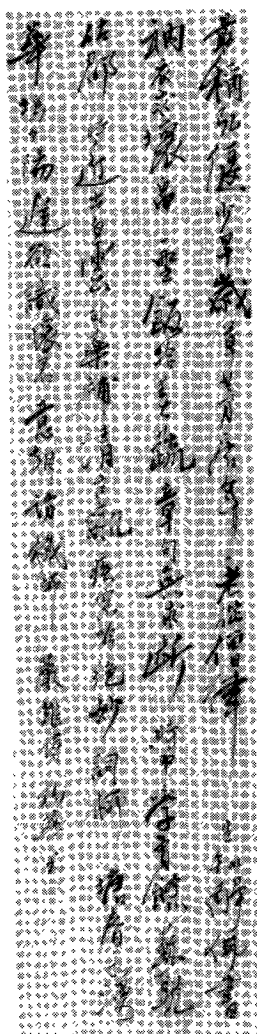
此書是... 所用... 年... 生... 卒... 年... 卒...  
此書是... 所用... 年... 生... 卒... 年... 卒...  
此書是... 所用... 年... 生... 卒... 年... 卒...

▲ 石橋正隆 (59年度卒)





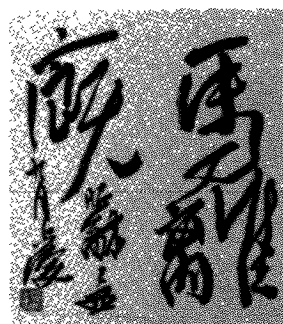
▲ 松本直人 (58年度卒)



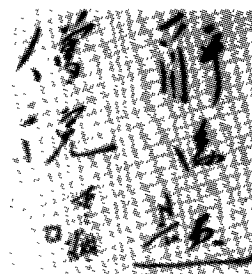
◀ 市川初江 (五九年度卒)



◀ 中村純一郎 (五八年度卒)



▶ 山城邦敬 (五八年度卒)



▲ 鍋藤利浩 (59年度卒)

# 心軌跡―道標

誕生その一

編集部

昭和三十四年六月、当時法学部三年新海蘇石が、飛起人となり柴田一夫會心會々長三十六年度卒、原通業書心會副会長、松田記念昭和五十年五月死去、三浦勝、諸隈郁賢以上三十七年度卒ら加、さう附屬大塚高等學校出身者で同好会として結成、講師に白水谷東が就任する。

同好会は、書道同好会、ペン習字同好会の二本立てで、会員はわずか十名であった。翌三十五年十一月には、書道同好会、ペン習字同好会の合同を条件に三十六年四月をもって、同好会から書道部に昇格が認められる。田村量法学部教授を初代部長に迎え、初代幹事に柴田一夫が就任する。

創立二十五周年を迎えた書道部の歴史は、すなわち三十四年の同好会設立ではなく、初代幹事柴田の誕生である三十五年が、創立と云うことになる。

## 誕生その二

柴田一夫らの努力により三十二年四月に、正式に書道部としてスタートをまわった。当時、学文会予算五千円を確保して、感教の船出となった。

その年には、第一回西日本高等学校博覧大会を開催。十年十一月十七日には、第二十五回記念大会を開催の予定すると同時に、福岡大学書道部が飛起校となり、福岡学生書道連盟初代運営委員長、原通業を創立した。部昇格後、間むな、書道部が、積極的な活動を行なった。理由は何と云っても書道部の活動は大会や学文会に、認めてもらおう事と同時にいくらかでも多くの部費を獲得したかったからだ。その為には又、公募展への出品も大身な役割だった。と柴田は当時を振り返る。

三十五年七月に、諸隈郁賢が西部毎日展に入選、以後毎日まで福岡展を中心に、数々の入選者を輩出することになる。



赤木先生を囲んで

創立当時

# 祝賀記念叙勲先生古田



就任当時の古田先生

妻御部長の喜びの前に、OB、学生

## 名誉部長

田村量初代部長の後を継ぎ、三十八年法學長古田龍夫教授が第二代会長に就任。古田部長は四十二年から四十四年の法學部長に任じ、中も部長代行を置くこととなり、福岡大学を退職する五十二年三月まで十五年の長きに渡り、苦勞を頂いた。

古田部長は大変早く、その他特約講師や院後援者、当時の学生達に親近感を与えた。特に揮毫大会では会場が熱く、困り果てると、すぐさま学生課に出向いてお骨折りを頂いたり、第十五回の記念大会では、当分の大会委員長山村昌次(五十一年度卒)副委員長志ガ(前年)学長挨拶とは名ばかりで、学生部長代行の挨拶、といったことである旨申し上げ、何とか本学の学長挨拶が、かわりなれぬかと御相談したり、古田部長の当時の盟友である、河原由郎学長に了解を得て、心よく挨拶を頂いた。その当時の学生達の喜びようはなげかつた。

後日談に、なるが山村は、五十二年四月、大学の総務課に勤務するが、ある時河原学長に当時の御礼を述べると、学長は書道部は、揮毫大会を始め、日頃より大変立派な活動を、されて、今後も後輩の指導を、よろしくお願いいたしますと、語られたと云う。

今日の書道部があるも古田部長の、尽力が、これと新めて御礼を申し上げたい。

書心会は五十二年古田龍夫部長退任謝恩パーティ、山を開催、全国各地よりOBが参加し、盛大なパーティを行なった。先生には、心より書道部名誉部長に就任して頂いた。

古田名誉部長は、五十八年五月、大学より名誉教授の称号を、授けられ、五十八年十一月、勲三等瑞宝賞を受賞。書心会では五十九年一月、古田龍夫先生叙勲記念祝賀会を開催、大学関係者、OBを始め、百余名の人々が先生を祝った。先生は今日もなお、非常勤講師として、教壇に立たれ、元気に御活躍中である。

講師 赤木石種

昭和三十七年、柳田徹川に変わり、講師に赤木石種、就任。  
 当時、安河内克行評議委員長、三十九年度卒らけ、柳田に代えて大  
 塚藍海の如く講師を依頼に行、たか、大塚は「足遅か、たよ、つい  
 昨日西南の講師を引き受けてしまった」との弁、それ出で、赤木先  
 生はどうかと云う具合で、講師赤木石種が誕生した。  
 以来、現在まで二十四年の長い間、お世話になり、お礼、殊に、  
 長庚を中心とした書道塾に於いて、師の尽力なくしては今日の隆  
 盛は、たか、たと云ってよい。

師は、当時四十歳になつたばかりで、人生において、書家とい  
 ても、更に脂の乗り切つた時期で、夏の暑、時など、上はランニン  
 か下はカラパン（フンドシ）と云う説もある）一枚で、部員を指導し  
 た。

近年、女子部員が増えたので、それもおかたない、又師は、書に  
 対し徹しい指導を、施したか一方、大学の書道部と云えども、初め  
 て筆を持つたので、ええ、その一人一人の実力にあつた、指導を  
 施した。

書道だけの指導者ではなく、書道部の運営をも考へた、よき理解  
 者であり、教育者であると云える。



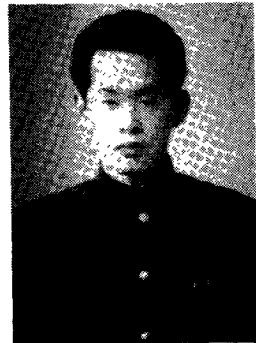
創立当時の赤木先生の指導

書心会々々長・柴田一夫

書道部のOB会を書心会と云う、書心会々々長は現在も柴田一夫であ  
 る。現在もと云うのは、四十八年から五十一年度までの二期のみ、原  
 博之に会長の座を譲つた以外、常にこの人が会長である。

初代幹事を勤めた、柴田は最年長者でもあるが、彼の持つキャラ  
 クターからしてこの人が会長に座る以外にない、穏やかな物腰、  
 して自己に厳しく、責任感が強い、若くOBや現役学生にも、飾らず  
 気さくに語りかける。何より書道部を、一着愛してやまない。二年  
 に一度の役員改選に、度々推されるのも当然であろう。

又、柴田は現役学生の役員改選後、毎年新旧役員と自宅に呼び寄  
 せ鍋を囲み、酒を酌み交し、一年間の労をねぎらい、そして、新役  
 員の一人一人と語り、教諭を忘れない。柴田はこれまで全ての書心  
 会行事、学生への指導を含め  
 陣頭指揮をとつて来たが、四  
 十半はも過ぎ、自覚が目立っ  
 て来た為、ばかりでけりかろ  
 うが、今回の二十五周年記念  
 行事の座して、評議委員長で  
 ある、安河内克行（三十九年  
 度卒）を中心にプロジェクト  
 ナームを組織し、自らは相談  
 役に回り、挙行した。



若かりし頃の柴田一夫

「来年は、〇〇君が会長をしてく出」これは彼の口癖である。  
 書道部、そして書心会も、二十五年もの長い間、創り育んで来た  
 彼こそ云い表すことのできぬほど、一みじみと素朴な心に感づいて  
 いる。  
 書心会々々長の重責を、見事に果している、柴田一夫、その人で

超人

福岡学生書道連盟の創設に力を注いだ。原通幸（書心会副会長）は、福書連の運営委員長を二年間勤め、三十七年一月には、第一回の連盟展を開催した。

そして、三十八年五月には、福書連が発起校となり、九州学生書道連盟を結成。初代理事長に就任。原はその間、学術文化研究会の三十七年度、常任幹事（書記）として活躍する。書道部の今日の隆盛を導いた、第一人者である。まさに、スーパースターである。

日展

日展は、云うまでもなく、書道にとりて最も権威ある。官展の系統を引く公募展である。

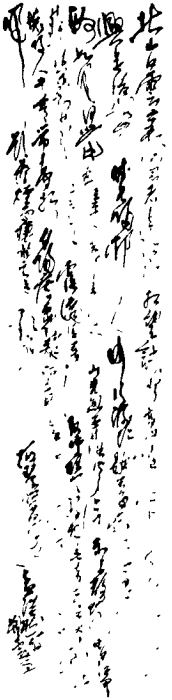
その日展に、五十八年、徳久政機（四十三年度卒）が入選を果した。徳久は、卒業後も赤木石埜に師事。その後赤木石埜のかつての師である殿村藍田に師事する。

吳服商を営みながら、書活動には余念がない。書心会では後日、徳久政機、日展入選を祝う会を中央区猿辺通り「高砂」に於いて盛大に行った。いやはや書道部のみならず、福岡大学卒業生の盛衰ある受章である。

第15回日展（1983）

秋興

徳久明彦



県展その一

前に諸限か西部毎日展に入選した事も記述したが、以後福岡県展を中心に、教々の入選者を出すことになる。安河内克行（三十九年度卒）、平井晴彦（四十三年度卒）、前崎恒春（四十四年度卒）、荒尾記史郎（五十一年度卒）らは、幾度となく入選を果してゐる。その中で、前崎は五十年朝日新聞社賞、翌五十一年岩田展賞を受賞、五十二年福岡美術協会賞となる。又四十九年と五十三年には、洋画の部で県展に入選する等、多彩で現在書家として、活躍中である。



S43年 県展合宿

### 具展 その二

具展史上、重要な付出来事か、四十四年である。具展会議委員、尾中正（四十五年度卒）ら特選四名、入選五名の大量受賞である。

一つの団体からやしも大学のサークルからとして、この快挙は当時、書道界の話題とされ、大層である。そして五十六年には、具展の一大である具知事賞を、田中博美（五十一年度卒）が獲得、正に堂々高き、福岡大学書道部である。

### 「信じられぬ知事賞」書で5度目挑戦 推田・田中さん

福岡大学書道部は「福大書道部」の前身として、昭和二十一年に設立された。昭和二十五年に「福岡大学書道部」として改称された。昭和二十七年に「福岡大学書道部」として改称された。昭和二十九年に「福岡大学書道部」として改称された。昭和三十一年に「福岡大学書道部」として改称された。昭和三十三年に「福岡大学書道部」として改称された。昭和三十五年に「福岡大学書道部」として改称された。昭和三十七年に「福岡大学書道部」として改称された。昭和三十九年に「福岡大学書道部」として改称された。昭和四十一年に「福岡大学書道部」として改称された。昭和四十三年に「福岡大学書道部」として改称された。昭和四十五年に「福岡大学書道部」として改称された。昭和四十七年に「福岡大学書道部」として改称された。昭和四十九年に「福岡大学書道部」として改称された。昭和五十一年に「福岡大学書道部」として改称された。昭和五十三年に「福岡大学書道部」として改称された。昭和五十五年に「福岡大学書道部」として改称された。昭和五十七年に「福岡大学書道部」として改称された。昭和五十九年に「福岡大学書道部」として改称された。昭和六十一年に「福岡大学書道部」として改称された。昭和六十三年に「福岡大学書道部」として改称された。昭和六十五年に「福岡大学書道部」として改称された。昭和六十七年に「福岡大学書道部」として改称された。昭和六十九年に「福岡大学書道部」として改称された。昭和七十一年に「福岡大学書道部」として改称された。昭和七十三年に「福岡大学書道部」として改称された。昭和七十五年に「福岡大学書道部」として改称された。昭和七十七年に「福岡大学書道部」として改称された。昭和七十九年に「福岡大学書道部」として改称された。昭和八十一年に「福岡大学書道部」として改称された。昭和八十三年に「福岡大学書道部」として改称された。昭和八十五年に「福岡大学書道部」として改称された。昭和八十七年に「福岡大学書道部」として改称された。昭和八十九年に「福岡大学書道部」として改称された。昭和九十一年に「福岡大学書道部」として改称された。昭和九十三年に「福岡大学書道部」として改称された。昭和九十五年に「福岡大学書道部」として改称された。昭和九十七年に「福岡大学書道部」として改称された。昭和九十九年に「福岡大学書道部」として改称された。令和元年度に「福岡大学書道部」として改称された。

### 具展 その三

秋言扶沙子（四十七年度卒）は一年生の時、具展に入選する。彼女は小さい頃より赤木石掃に師事し、その実力は前述の通りであるが、大学に来てみれば又、師の字本を勉強する事になった。その事か彼女には何かしら、脱皮できずに自分を感ずるにはいらなかった。「大学に来たら、今までとは違う字を勉強してみたい、そして自分の書を書いてみたい」、そんな彼女だった。しかし無情にも、幼い時から教わった筆使いは、やはり赤木流下りかたが、そこで彼女が右手ではなかった、よー左手でやってかような決意し、何とついに在学中、左手で書いた作品で具展入選を果す。脱帽である。一かーがかり、云うまでもなく彼女にとって、最も尊敬する師は赤木石掃でーかない。

### 文武両道

書道部は、誠に忙し、サークルである。年中、行事が詰まっ、ろー、勉強どころではなかった。当時を振り返る者か多い、残念ながら成績不振、そして、留年のケースもたむる者かいる中、何と書道部にも特待生かいたのを、ご存知だろうか？

大石唯子（旧姓平田、四十八年度卒）その人である。彼女は文学部経営学学科に在籍し、四十六年度、四十七年度の二回特待生となり、そして、四十七年には具展入選、正に文武両道を絵に書いた人である。

学生諸君、ハの垢でも頂いて来なさい。

### 義兄弟

昭和三十六年四月に、書道同好会、ペン習字同好会の合併を条件に、部昇格を認められた。以来八年余り、書とペンは同じ釜の飯を食うのが、所詮、使う道具から違おうし、練習方針も異なっている。役員も部として幹事かいて、手たペンの方にも幹事かいると、いった具合、分れるべくして分れた感か強い。

四十四年には、書道部からペン習字部門が分離、その時ペン習字は同好会に降格してのスタートとなった。その後、四十九年に部昇格か認められ現在に至っている。

血を分けた兄弟の兄を書道部とし、可愛らしい弟のペン習字部の今後益々の隆盛を祈念するものである。



ペン習字部門の練習風景（S37年）

## 研究会

書道部の中下色々の研究会があった。六朝研究会は、金丸弦二(四十六年度卒)が創設。以来各年代一名づつの少数精鋭(アソビとして、水野博文(四十八年度卒)、地頭園裕孝(四十九年度卒)、押越和則(五十年度卒)、山村昌次(五十一年度卒)、松本健二(五十二年度卒)、高倉深(五十三年度卒)、松田一寿(五十四年度卒)がいた。九年間続いた六朝研究会は前文のとおり、九名の会員しか存在せず、会員が会長となり、下不思議な研究会であった。

他に篆刻研究会、花材研究会等が存在した。スドも会という法文学部経営学資料の連中で作った。酒を飲むだけの会もあった。

## 主流

夏はトロイ(マシシニカ等が高価過ぎた)のボロシャツに綿パン、ワンピースのソックスにスニーカー、冬はネイビーブルーのVANKETのフレンチ、レジメンタルストライプの菱屋のネクタイ、ケリーのストラックス、靴はリーカルのコイシューズとくしむ(四十八年、五十二年頃)。ちよつとか、こよかつ。正に、アイビーそのものだった。部員全員が、そうだった。分けてはいけないアイビーが主流である。ストラックスの裾が広がると笑われ、靴のかかとが高いとエグすまされた。

ある御人、靴のかかとが高いのをかんと、ノコギリで切っていました。衆一い着る時代であった。



S 5 1 年当時

## コンパ



創立当時



現在

やわらかな五月の若葉の頃は、新入生歓迎コンパ。そして合宿や揮毫大会の打ち上げ、クリスマスパーティーに、二月の遠い出コーンパと学生は忙しい。そう飲むことに忙しいのだ。以上は、いわゆる書道部の年間行事だけで、連盟の練成会の打ち上げ、一・二年生合同コンパなど、いやはや大変な事である。不断は、ものも云われない奴が、酒の席では鬼角元気がいっと来る。

いつぞやの新入生コンパはすごかった。前にまず、新入生が並ぶ自己紹介をしながら、先輩が注いでくれたコップのビールを一気に飲む。まさに「一気・イッキ」のコールがやまない。見事に全員飲んでしまった。全員甲種合格である。

その後が大変で、学生服を着た役員連中が前に並ぶと、四年の先輩がコップあるいば大きな皿など、日本酒を並々と注ぎに廻る。そして一言「玉子酒!」風邪でもかかっているのかと思えば、すき焼についている生クマエを、クワイと割り、その日本酒の入ったコップに入山していった。まさに、玉子酒である。それを、見事に「コクエクレ」と音を立て飲んでしまった。

学生諸君、酒も女も程々に。

表

部名	書道部	学術文化全部	大分県立第一高等学校
部員名	高倉 兼	JECCIFT	氏名
現行部	1 高倉 兼 TEL 091-5491	米田	昭和31年10月
紀元	2 高倉 兼 TEL 091-5491	大田 幸治 TEL 5055	昭和32年
昭和	3 高倉 兼 TEL 091-5491	橋本 秀昭 TEL 3379	昭和33年
昭和	4 高倉 兼 TEL 091-5491	山崎 雅代 TEL 5055	昭和34年
昭和	5 高倉 兼 TEL 091-5491	高倉 兼 TEL 5055	昭和35年
昭和	6 高倉 兼 TEL 091-5491	高倉 兼 TEL 5055	昭和36年
昭和	7 高倉 兼 TEL 091-5491	高倉 兼 TEL 5055	昭和37年
昭和	8 高倉 兼 TEL 091-5491	高倉 兼 TEL 5055	昭和38年
昭和	9 高倉 兼 TEL 091-5491	高倉 兼 TEL 5055	昭和39年
昭和	10 高倉 兼 TEL 091-5491	高倉 兼 TEL 5055	昭和40年
昭和	11 高倉 兼 TEL 091-5491	高倉 兼 TEL 5055	昭和41年
昭和	12 高倉 兼 TEL 091-5491	高倉 兼 TEL 5055	昭和42年
昭和	13 高倉 兼 TEL 091-5491	高倉 兼 TEL 5055	昭和43年
昭和	14 高倉 兼 TEL 091-5491	高倉 兼 TEL 5055	昭和44年
昭和	15 高倉 兼 TEL 091-5491	高倉 兼 TEL 5055	昭和45年
昭和	16 高倉 兼 TEL 091-5491	高倉 兼 TEL 5055	昭和46年
昭和	17 高倉 兼 TEL 091-5491	高倉 兼 TEL 5055	昭和47年
昭和	18 高倉 兼 TEL 091-5491	高倉 兼 TEL 5055	昭和48年
昭和	19 高倉 兼 TEL 091-5491	高倉 兼 TEL 5055	昭和49年
昭和	20 高倉 兼 TEL 091-5491	高倉 兼 TEL 5055	昭和50年

裏

昭和51年度	高倉 兼	大田 幸治
昭和52年度	高倉 兼	高倉 兼
昭和53年度	高倉 兼	高倉 兼
昭和54年度	高倉 兼	高倉 兼
昭和55年度	高倉 兼	高倉 兼
昭和56年度	高倉 兼	高倉 兼
昭和57年度	高倉 兼	高倉 兼
昭和58年度	高倉 兼	高倉 兼
昭和59年度	高倉 兼	高倉 兼
昭和60年度	高倉 兼	高倉 兼
昭和61年度	高倉 兼	高倉 兼
昭和62年度	高倉 兼	高倉 兼
昭和63年度	高倉 兼	高倉 兼
昭和64年度	高倉 兼	高倉 兼
昭和65年度	高倉 兼	高倉 兼
昭和66年度	高倉 兼	高倉 兼
昭和67年度	高倉 兼	高倉 兼
昭和68年度	高倉 兼	高倉 兼
昭和69年度	高倉 兼	高倉 兼
昭和70年度	高倉 兼	高倉 兼
昭和71年度	高倉 兼	高倉 兼
昭和72年度	高倉 兼	高倉 兼
昭和73年度	高倉 兼	高倉 兼
昭和74年度	高倉 兼	高倉 兼
昭和75年度	高倉 兼	高倉 兼
昭和76年度	高倉 兼	高倉 兼
昭和77年度	高倉 兼	高倉 兼
昭和78年度	高倉 兼	高倉 兼
昭和79年度	高倉 兼	高倉 兼
昭和80年度	高倉 兼	高倉 兼
昭和81年度	高倉 兼	高倉 兼
昭和82年度	高倉 兼	高倉 兼
昭和83年度	高倉 兼	高倉 兼
昭和84年度	高倉 兼	高倉 兼
昭和85年度	高倉 兼	高倉 兼
昭和86年度	高倉 兼	高倉 兼
昭和87年度	高倉 兼	高倉 兼
昭和88年度	高倉 兼	高倉 兼
昭和89年度	高倉 兼	高倉 兼
昭和90年度	高倉 兼	高倉 兼
昭和91年度	高倉 兼	高倉 兼
昭和92年度	高倉 兼	高倉 兼
昭和93年度	高倉 兼	高倉 兼
昭和94年度	高倉 兼	高倉 兼
昭和95年度	高倉 兼	高倉 兼
昭和96年度	高倉 兼	高倉 兼
昭和97年度	高倉 兼	高倉 兼
昭和98年度	高倉 兼	高倉 兼
昭和99年度	高倉 兼	高倉 兼
昭和100年度	高倉 兼	高倉 兼

懐かしの部員カード

幹事はモテモテ

書道会には、原通幸(三十七年度卒)と原博之(四十三年度卒)の兄弟がいるが、卒業後書道部内で、結婚した者が多い。

最初に先陣を切ったのが、横山幸治(四十三年度卒)と二年後輩の旧姓八重倉緑(四十五年度卒)の二人。そして、橋本秀昭と旧姓山崎雅代(共に四十八年度卒)がいる。

五十三年度卒には、同級生のカワプルが二組いる。高倉兼之と旧姓穴見美千代(一、高倉兼之と旧姓山口真由美である。それから、大山一則(五十四年度卒)と旧姓横山佳代子(五十七年度卒)と続ぎ、最近では、森田健二(五十五年度卒)と旧姓児玉富美が、結婚した。うらやましい限りである。

クラブ内の恋愛は、今も昔も大変むずかしいとさえ云われている。殊に、役員ともなれば部の運営上、そして部員の指導の上で、その感情を押し殺すことさえあるだろう。だが結果は不思議である。

六組中三組ずつあり、高倉兼、大山一則、森田健二は、まさしく多く幹事経験者なのだ。

何はともあれ、皆の幸せを祈るものである。

学文会ソフトボール

書道部は、結構スポーツマンが多かったようだ。書道部といえど回りからは、エモ女性的で、その男の姿と口録の「カーケル」に見られかた。近年こそ女性部員が増えたりもしているが、大学の便学の精神すなわち、質実剛健、積極道取、總健中正、思想健全とくれば、その便学の精神と地で行くカーケルは、書道部以外にないと思ふのは小生だけであろうか？

学文会が主催する春と秋のソフトボール大会では、四十余りのチームが参加している。成績を御覧あれ。

- 三十七年春 優勝
- 秋 準優勝
- 四十七年春 準優勝
- 四十八年秋 優勝
- 五十四年秋 準優勝
- 六十年秋 多分優勝

以上のとおりである。

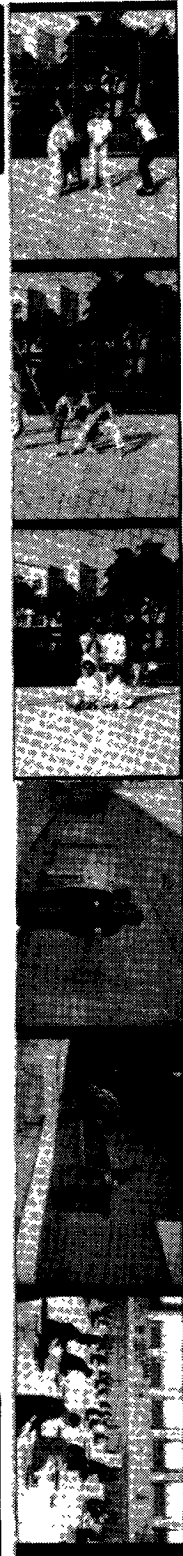
特に四十八年秋の大会では、地頭菊彦と森田卓(共に四十九年度卒)は打席に立ったかに、本塁打を打った。



必勝を期す書道部の面々







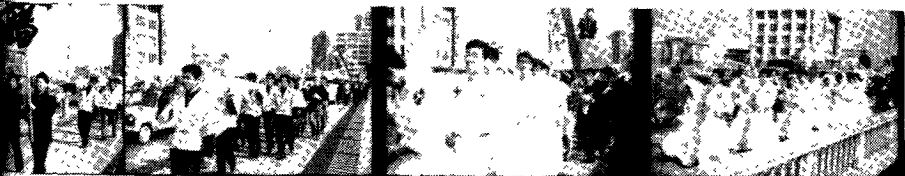
念宿

書道部は例年夏季合宿と春季合宿の二つがある。  
夏の方は、も、から書道部かりの強化合宿である。以前、十数年前は、太宰府の文書館、官地獄神社、そして今年の七月は、太宰府國分寺で行なわれた。國分寺と云うので、人と立派な処で、いろいろのたろろと思、訪問すると、國分寺自体は結構な代物だ。だが、合宿所はなんと、納骨堂の階下であった。夜ともなると、さびしい。んや、りーに違いない。すかすかある。Bは「骨、骨、骨」と書く。よ、らん？ア、ドバイス。

揮毫大会その一

本年十一月に、西日本高等学校揮毫大会は、創立二十五年の記念大会を迎える。

では、揮毫大会とは参加する高校生にと、何何であり、主催する学生にと、何何ののみ。揮毫大会の趣旨文には「書道は、東洋情趣の代表的な精神文化並びに書写生活必然の所産として、我々民族が誇るべき古典芸術である（中略）。本大会は全国屈指の文教地域西日本に於ける高等学校の書道文化の普及と書技向上を目的とし、以て、書道の伝統を擁護すると共に、書道教育の充実と振興に寄与せんとし、毎年、揮毫大会、展示会を開催するものである（後略）」とある。



揮毫風景

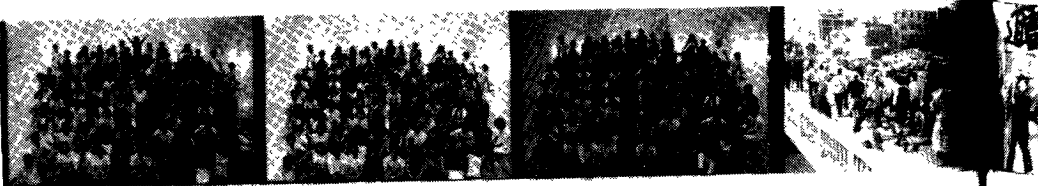
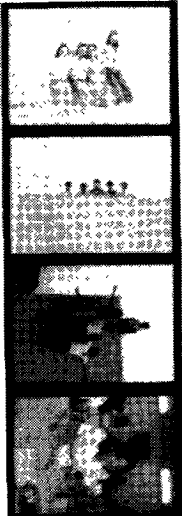


例年、西日本地域より約三十校、二百余名の高校生と迎える書道部員、前年の反省と踏まえたと四月下旬より準備を始め、十二月の展示会終了まで本大会の為に東西奔走、暇を惜む。とこの山で、二十回を数える現在、書道部の学内外での責任は重い。

揮毫大会にかかると費用、揮毫大会に費やす時間は莫大なものがある。これにかかると費用や時間を別に使えば、もと、現実には部員の為になるものがあるかも知れない。しかし、今日の書道部の歴史は揮毫大会の歴史であり、揮毫大会を継続してやる事は書道部にとり、大変重要な意味をもち続けているところである。それゆえ、一朝一夕に成し得ない任務の上に書道部が存在するからである。自らの娯楽の為にだけ参加する者とは違ふ何ひ、すなわち、社会に寄与せんが為の目的意識活動は、大学の目的を充分に果たし得る学友会活動と云ったも過ぎ下りはない。歴史ある書道学友会のあるゆるカークールの指導者たる事を望むものである。

揮毫大会の二

書道部が毎年揮毫大会に要する金は億単位に高い。書道部からいくらかの援助があるが、財源である。そんな中、やはりOBと有難いものだ。佐藤博士が専門学校に勤める河内克行へ評議員長、三十九年度年一回、わがかなを掲載し毎年表彰式の会場を提供し、NPC商店の役員としている河内純一（副評議員長、四十六年度年一回）、揮毫大会の賞品一切を原価を割る金額で毎年世話をしてゐる。



四十六年度卒 小野 善廣

昭和四十七年三月卒業以来、十余年の歲月が過ぎ去りました。当時、橋本書道部に入部して、まことに驚いたことと言えは、あまりにも部員が多かったことです。確か、昭和四十四年だったと思いますが、ペン習字商好会が発足しました。私が入部した時には、一緒にやっていた関係で恐らく、一〇〇人以上はいないでしようか。御室に入つても溢れんばかりの人数で、とても一年生の私なんかが入れる余地はありません。ドア越しに眺めると、椅子に座っているのが、オビサンみたいな顔をした四年生ではなかったでしょうか。皆、兼しそうにトランプ等に興じている様子でした。トランプと言えは、当時は部屋をよくしていたものです。雨が降ればトランプをし、天気が良ければソフトボールをして遊んでいました。当時は、ソフトボールの試合が毎に数回行われており、よく練習をしていました。部員数が多くて、レギュラーになるのが大変な思いでした。こんな風に書くと、書道の練習をやつてなかった様に思われそうですが、書道部の本分を忘れて忘れていたわけではあります。日本間道場を茶道部と共用して、ために三回程度しか使用出来なかつたと思いますが、練習日は、授業がない時などに練習して、いました。夏休みには恒例の夏季合宿を大宰府の文書館で行なっていました。この合宿では、とくに角、よく練習した様子を誇って、います。練習は非常に厳しいものでした。それでも兼し、念室であり終つて家に帰ると、気が枯れた感じがしていました。

考えてみますと、性格も十人十色で、しかも血の気の多い若者が書道部という部の中を目標に向かつて活動出来ることは、何とすばらしいことでしょうか。「書」をやるのは、当然でしょうが、学生といふ小社会に於て、先輩、同輩、後輩との関わりを身をもって体験し、他人の考えや、行動から自分にはない一面を吸収出来れば最高でしょう。折紙、人間というものは、決して一人を生きていけないものでありません。それ故に、一人一人が自分の立場を良く理解し、事に当れば、きつと道は開けて来るでしょう。創部二十五周年の

節目の年にあたり、〇日諸氏、学生諸君がいま一度、書道部の行く末を考へ、誇りある書道部を創ろうではありませんか。

橋本書道部 バンザイ！

「思ふ事」

五十年度卒 押越 和利

十年にかります。遠い鹿児島の方に住んでおりますと、なかなか絶念等に出席する機会を設けてしまひ、非常に心若しく思っています。十年も経つと、もつ、名簿には名前なんか無いだろうと思つて、いまずと「荒巻」が届けらる。自分の名前が確認されると、木々と服をたておろします。先輩や後輩の皆さんの変わらぬ名前を拝見しまして懐かしく思つると同時に、何事にも参加して、自分を思つと申し分なく思ふ事をもっています。

大学の四年間は、法政部には在籍はして、たのですが、実際には、鞘、太宰に行つて、授業をエスパーして部屋に行つたり、和室に居たりしてました。赤木先生の御薫陶、六朝研究会（今はどうなつて、いまずのせいでしょうか）、因幡つとんを喰おう会、皆好会等の仲間、今でも当時のその場面や言葉のやりとりなどが、鮮明に思い出されてきます。一番の思い出は、長後、西日本高等学校校務大会です。一、二年生の時は、そうでもありませんが、三年生の時は大会委員長をさせて戴きまして、授賞の時は大変おつてしまひました。何を言つて、いるのか分からないくらい緊張したのを、今でも覚えて、います。また、春と夏の合宿も数えきれないエピソードがあります。

しかしながら、今思ふ事は、四年間という短い期間に、数多くの方々と知り合ひにたれり事、何物にも難い色々な貴重な経験を与えて貰つた事です。夜中に温泉に行つたり（突然）、雲仙の霧氷を見に行つたり、今では考えられない日々でした。二山らの短か

い期間が、十月経つた今の生名や考え方の基礎はなつていると言つても過言ではありません。書道部の山岡君は、本気で感謝してと承り有るものかと思はれます。有難うございます。

最後は有りませぬが、先輩、後輩の諸君の方の後者友の「三三三」を心からお祈り申し上げて、ま心を、書道部は御座います。ん事を祈念申し上げます。

### 「豊田商事事件と先人の教え」

四十三年度卒 平井 晴彦

現在教育問題が取り立てられている中で、豊田商事永野会長、刺殺事件のテレビ放映があつた事は、子供に及ぼす影響は計り知れないものがある。永野会長は週刊記者に、「人間は因果応報」、「死ぬのは仕方のない」と語っている。皮肉にも彼は主犯、飯田篤郎に殺された。「純金ファミリー証券」持ちの飯田、八百徳円をかき集めたと言つ、その陰で泣く被害者、自殺者も事件前に出ている。

「所謂人生はマネーゲームだ。」人に損をさせたり儲けたり、商売には道徳は不必要、被害届けは「たたくて不審届けだ」、常識を真向から引き裂く暴言を言っている。その身を耳に「たかのかく銃剣男に」「お前は死刑や」と体中十三カ所を刺された、悪徳に染まつた汚れた体も自分自身の血で染める三分間の最後であつた。

「金は人生の為にある。金の為に人生があるのではない」の名言を思ひ出す。又、「金を馬鹿にしてはならない。金を馬鹿にするものは、必ず金から馬鹿にされてしまう。しかる、金は大切な金の奴隷になつてはいけない。」と江崎かりこの創始者、江崎村一氏は金言を残している。新五千円札の新浪戸箱造は、「東業に奔走し、金儲けに熱中したりとも、ついに人の人たることを忘ぬぬ以上は、金は人生の邪魔にもならぬ。決して悪用される事もない。富むものかぢらず不仁ではなく、また不仁のみ富むわけではない。」と教えている。「人の人たること」、人加人として行うべき道を誤つてはいけない。という事であり、この一言が念頭深くあれば、人間が金の奴隷になる事はない。得ないというのである。「王さまの馬鹿なりとも、馬鹿な欲を起さぬことなげ此は、馬鹿でなく、馬鹿でなくとも馬鹿

な欲を起さぬことなげ、馬鹿となるものなり（二）と書き、人それや山自身の能力の限界を越えたものを「超える」馬鹿に欲しというわけだ。欲が能力を造る。超すと、人間は馬鹿な事をしてかすや、馬鹿を鳴らしているのである。「総じて、人から持ち込んたるもうけは、本物は極めて少ない。本当にもうかるのなら、自分で自身でやるだらう、そんな事に持ち歩く必要はないはずだ。自分でやる力がないものであれば、いくらでも雇ひつけてきて、大変な事いかにする。向こうからどうだとうだ、と、押売りに来るわけが、い（提議者）ウマイ話に、口々に話さぬものはない。人間という動物は、モウケタイと思えば、思ふほど損をするものだ。冷静さを失つては、いけぬ。この名言も彼の苦しい経験からのものであり、昨今の社会に對する先見の明が、書道界も豊田商事事件とまではいかなくとも類するところが多いように感ずる。勢がある中央書道の人か、右向けば右、左向けば左と向く、特に九州男児と誇れる九州人に多いのはなせだらうか。彼らは真の書道発達と稱しているか、書道、真とは何であるのか、社中に属する人は考へた事があるか、どうするか、師風の真似をせよと、王羲之や良寛は言ひ残したのか、何て事はないか、中央書人が次にどうであらうか、〇〇賞の賞金カンパをいっているだけでないか、あるいは何も知らぬ人間より上手にお金を吸い上げていっているだけか、中央書道員と稱しても私から見れば、どうして、永野会長並に「か見えぬ」のである。現況にそつて王

語して、いのか、生活の賢さかも知れない。一か、私指書を指導する教師である。教師は実社会の、善と悪とを分別し、善のみを指導するの職務である。小生も片手で多数の書道社中の人から入会のお誘いを受けながら、未だ入会しなかつたことと幸福に思つている。無差別が故に誰とでも自由に話せ、自由におつて、いかにあるか、道徳感の欠落や、弱者イジメは、現代の中学生や高校生の問題だではないか、実業界、書道界にも存在している。中学生、高校生が抱山する大人の世界の問題がある。又それを見た、うとする勇氣ある若者も少くない。小生も二人の子の親として、子供達に欠落ある人間にならぬよう、願つてやまぬ、毎日である。

(徳意志)と後ト一ト下。

印度や中国を旅つた時に采れられた布や装束が作られた服を着た作品の中にも目まぐるしい光景に自然なマーフの羽とまた目だ様な口語を夜弄いていたといつて思ふに、倒置同行となり、後輩として増々真剣に書に取り組もうと欲す新天に、たが第です。

### 心如花

四十二年度卒 徳久 政機

四季を通じて私達にある時は目まぐるしく、又、ある時は時間の止つたかの様に、一ひきり語りかけて来るものは果して何者であらうか、それがあるいは精神の彷徨であり、美へのあこがれであるかも知れない。「百花潭の春」、溪山勝趣の夏、「萬山秋色の秋」「雪景山居の冬」、それこそ季節の変転を過してばかり、私達の感性を充たしてくれるもの、こころに潤いのあるもの、ふとこころに出会ひか、心ほどこをたぎらせてくれることであらう。また、そうばかりとも言えず、心ほどこ不安に充ちたものに日々を駆り立てられ、それは、一言では言い尽せない、何か不満足なもののへの、焦りか心の奥に染くうて、やりまぬ思いを覚えてしまふものである。満足のないものを求めれば求める程、その思いが一瞬のうちに崩れ去り、不安と焦燥の念に駆り立てられ、四季の風勢に慰められ、つても、又堂々めどりの日々を過ごす様に。もう、一幅の作品をみて何も感じない人がいたら、それは季節の移り変りさえ感じとれない。人であるかも知れない。ある種の感動を覚えるかそうでないか一つの問題であり、やはりそれは最初であり最終的なものとなるであらう。そこに芸と人との果て、かわりか出来、人と自然との相互関係が生まれて来るであらう。この様なものは、他の人が犯すことの出来ないものであり、それが、昇華した一つの道となる。

芭蕉の俳句 光琳の絵 観阿弥の能 利休の茶 等々それ以外の如し、それは一つであり、又同じものであるであらう。

我々普通をやる人間にとり、得てて降りやすい偏狭な道、の様なものがあるとすれば、私達は考え直さなくては、いけないかも知れません。

いつも心に花を飾り、人の道を歩んで、きたいものだ。

### はじめと教育

五十六年卒 十代目 雄右衛門

本日は、現在、広島市立の中学校教師を以て三年目を迎えています。職業柄、教育問題(特に現在の荒廃)について考えてみたいと思つた。

まずオ一の大きな問題は、「はじめ」である。昔から「はじめ」は、陰湿で執念深いもので、オ三者もかわい、そうでも、いじめに加わる始末です。これは、振家族化の所存もあるでしょうが、大人の中に子供に對する考え方が薄れてゐるからではないかと思つます。子育ては、遊びがやられてくると考えてゐる大人が実に多いのです。もう少し、昔の大人を思い出してほしいものです。どこの子であらうと、弱々者いじめをしてゐるとすぐ叱られた思い出があります。

一か、それより大人世界にもこの「はじめ」の原因があるのではないですか。

オ二に、一徳統中流階級意識です。子供の欲い、物を、考えないに置いといて、また、それを口端に、勉強させてやうとする。こんな方法で努力という言葉を理解させてゐる。

四十五十代の大人が戦争終了後のどん底の生活で得たものは、子供には、衆をさせてやう。はい、生活させてやう。はい、風持だつたと思つますが、一か、そこに一つだけ欠けていたのが、これまで続いた、厳しい、謙、物事に対する厳しい見方、考え方ではないでしょうか。(自分も甘やかされて育つた一人ですが子供は、甘えの中で得るものは、わかまますということだけではないでしようか。)

自分の思うようにならなければ、すねる、はぶるるといつた姿に對して、皆さんは、どう対処しておられますか。小さな子供は、な

「よろこび」

昭和五十七年度卒 森田 富美  
書道部創立二十五周年、おめでとうございます。私も二十五才、書道部と同じ年令です。入学二年の時には二十周年の記念行事に参加しました。何だか自分の誕生日のお祝いみたいで、ちょっと嬉し面はいい気持ちがあります。

以前、書心会会長の宗田先輩に会い、書道部設立時の話を伺ったことがあります。す、かりな定した時期に入部した私達たちには到底理解できないほどの出来事です。今ではごく当り前のことが当り前でない大変な日々をすごしたんだなあと思っております。それから二十五年、このときと誰よりも感慨深い思いで迎えていこうとします。

そして赤木先生がいら、います。赤穂町字は書道の育成のために二十五年あまりも尽くして下さり、心から感謝したい気持ち一杯です。書道部講師という仕事を承えて、にじみ出る先生の魅力はどなたも御存じでしょう。ものすごいバイクに乗って来られるあの姿は忘れられません。

数えきれない方々の暖かい思いのおかげで迎えられることの出来た行事の中で、縁起でもないとおりの受けかたを思い出して、私に去る八月十二日に起きた飛行機墜落事故のことを思ふにはおおよそです。それは、命の尊厳や今日こころをよめている喜びを悲愴の事故の中から改めて考えさせられたからです。

この機関誌が皆ごんの手元に届く頃、この事故ほど悲しい昔の出来事のように思われ、いろいろかきかきまわります。マスコミが犯している現代、情報化のすいスピードで通り過ぎていきます。そして時間が輪をかけて良い事も悪い事もどんどん私達の記憶の中から消えていってしまうのです。

事故原因はいろいろ言われていますが、素人の私などが思っています。そんな状況を感じた運命や因果みたいなのを感ずて、まいます。いつどうなるかわからないのが人の命。その言葉は何度も何度も耳にしているのに、こんなショックな事故が起すのは

ら身に詰まってくる自分自身の悪見が恐ろしくもあり、又昭和時代にはまわってきたせい、いろいろとも思っています。  
人それぞれ運命や因果がまたりないから書道部も私も二十五年無事生きまわりました。大波、小波たぐいあつたけれど、まわりの世に存在している価値を改めて考えたいものです。  
欲ばりですが、これから書道部のBとして三十周年、五十周年を迎えらるよう、元気でいたいと思います。

「史朗展に寄せて」

五十八年度卒 中村 純一郎  
松本 直人

志尾記史朗先輩、私が書道部に入部した頃の、辺りに墨の痕が散るのもおもしろく連落に三文字、イの迫力の書にみ、けにとろろ又、引、欲すと言われた自宅の書や絵で壁も障子も埋めつくされ、子のほり替えるに時分、事ほどを思い出して、夏の盛り、御自宅を解放されて、すておられる少々風変わりな二十四時間営業の個性と存見に伺いました。

まず、目にはいるのが東洋情趣の深い絵が施された焼物の数々、又、雨戸であろうか、小すす四枚分の巨大な柵本、全て御自身の作であり、家、と言う空間を住みこいた作品配置であり、肩をはずさない個展、アトリエ(作業場)が普段のままに道具が新聞紙をまいた床の上に置かれて、いろいろの増々、気軽さを語り、更に目を引くのが屏風の貼絵や額に入った書作品の表装、それ何百人と目頃書いている作品(失敗作や草稿)も切り貼りしたもので不思議な模様と之が出、先輩はさうでは、作品に仕上がりました。

こちらには全く御自宅の庭の自家栽培の野菜や花同様、自然流の内に、芸術と言うジャンルに、ごだわらない記史朗流の生活の中に存在するもの、それが創造された結果であり、先輩ご自身の刹那刹那の生命の輝きが動入られた志尾記史朗の足跡として、今後の歩み、糧としてここにのべているので、何なのかと先輩の語り、そのかきかきから純重の頭で考え、つ、縁花で、とこう天、と玉手製の湯のみに、そがれたみずと、これも玉手製の工鈴の音に、一服の赤味を、こころから

にも知らないのです。アイスクリームを与えれば、それがおいしいから、次からそれを欲しがり出す。与えなければ、そんなことは言わぬので、この決断が、大きく子供の将来に影響を与えることではない。

オ三に、學問に打ち込む考え方でよい。どうか、子供に、いい成績をとってほしいのは、すべからぬ母親の願いであらう。ただ、ひたすら、勉強を押しつけられて、一つでもできない教科があると、それについて、どうだ、どうだとよく言われ、これが、子供には一番いやなのです。逆に、どんなに言われてもやることでは、怒められて、善い言はないのでよい。いいことは、一、かりなめて、悪い点は、改められるように言うといふのがいいです。なんどか、父兄会に言っているようなことですが、どうであらうか。

二十一世紀を担う子供達を、育てることが、できるかどうかは、私達の腕にかかっています。大事な教育をもう一度考えてみてはいかがでしょうか。

最後に福岡大学書道創立二十五周年、おめでとろございます。これからも、益々の御発展をお祈りします。

### 「八年前を思い出せ」

五十三年度卒 堤 寛

いやいや、社会に出て、先輩は強いのだ。原稿を書かされるハメになりました。

先日の「書心会合宿」に顔を出して本当に自分がいやになつてまいりました。社会に出てまともに「筆」を握っていない現在、合宿所の墨のおいさが自分を振り返らせてくれました。

墨・紙・筆・筆・筆、赤羽先生のなつかしい手本等、自分が素直になつていくのがわかります。たまには、いいもんです。

社会に出てなぜ「筆」が持てなかつたのか、理由はどうでも付けられます。一か、持っていない現実はキリキリと残つて、ま、ま、自分の気持ち、生活にゆとりが持てなかつたのか。今、振り返

って見ると「筆」とは、自分の生き方、人間性、生活のゆとりのような気がします。現役の頃は、全くと言つていいほど、そこまで考える頭を持ちませんでした。ただ単純に突走、ただけのような気がします。

突走、たと言え「九書大会」を思い出すにはいられません。昭和三十一年五月当時福書連の運営委員長とされて、た原通幸先輩を中心となつて、福書連が発起校となつて、九州学生書道連盟が結成されました。それから十一年の歳月が過ぎ昭和四十一年の夏、私が一年生の時、いわゆる練成会である九書大会が開催されました。

「九書大会」の運営は各大学の持ち廻りで主催してまいりました。すべからぬ九州書道連盟と云う名は、年々一度だけ参加を呼びかけ「九書大会」を開催してまいりました。その内容は、と云うと福書連の練成会と同様のもので、むしろつまらぬ大会であつたように思ひます。

それまで福大では十名前後の参加者を毎年送り込んでまいりました。主催校はほとんど国公立の大学がやつて、九大・熊本・佐大・分大・北九州大等が当番校を回してまいりました。

一年の夏の九書大会は、あきれられる思いで日程を遅くするように思ひます。運営のまずさ、規律のない生活には、福大の参加者にはなえられぬことでした。当時私の先輩で幹事をされた永野さんが反省会にあつて「マフ」に爆発。

日く「こんな大会では無意味である。学生書道をやるとは、お祭りであつてはならない。もうとどろび、当番校の姿勢と参加する者もお祭りのような態度ではならぬ」と、筆を握り、福大の参加者は金返退席を回してまいりました。当番校である熊本からは後日手紙が来たりもなりました。

それから二年が過ぎ、三年生の時、再び今度は鹿兒島大から「九書大会」の参加が持ちかけられました。このまま不参加するかあるいは参加するか、ブレドでも何一つ進展は望めません。それでは「九書大会」も自分達福大でやるしかない、これが結論でした。

福大には云うまでもなく種々大会をほめて、行事がビッシリとつまって、やれるかやれないか大問題でした。このまま

練習に燃えた三年間

九書大会を他大学の運営にまかせるか、いや銭々かやるかがないし  
結論が出たのです。

その結論が出た。が実行委員会開催前日の夕方、それから第三台  
に分乗し一踏鹿見島へ。

実行委員会(出席)会議途中に前述の案を動議を提出。

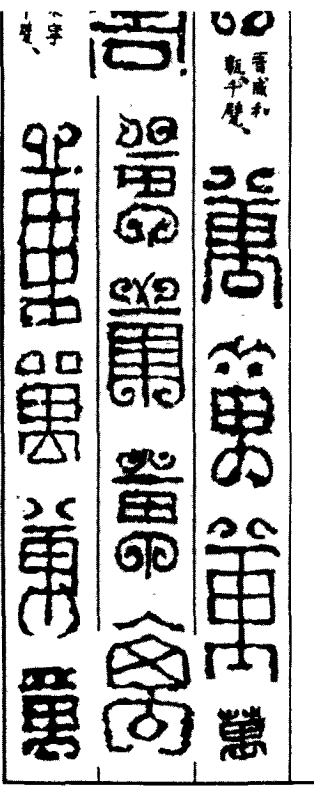
結果は受け入れられるはずがありません。その時、その場ではこれ  
がベストと思っただけです。若さと言えは若さです。

何の撤回もなくやれるわけがないのです。一か一、もう少  
し行事が少なくて時間があればと残念でなりません。

今この文章を鹿児島で書いています。何かの因縁でよい方が。

現役諸君、あれから八年。一か一、種々の「血」はそう変わるはずは  
ないはず。「九書大会」に限らず、福大書道部らしい、若き情熱で  
前進して下さい。

創立二十五周年福大書道部バナー



練習に励んだ三年間

五十五年庚午 櫻井典

書道部創立二十五周年おめでとうございませう。早いもので卒業し  
て五年目に入りますが、諸先輩方、部員の皆様、お元気でご活躍の  
ことと幸いです。

さて私は、懐かしい書道部現役の頃の思い出を、思いつくすまじに  
羅列したいと思います。

二年生から入部した当時の私は、右も左も全く分からず、又書道  
りの新入部員であつた。周りを見ても、他の同輩は、生き生きと  
て意欲に満ちあふれている。先輩方は威風凛々。油断も勝も  
ないような人が多かつた。部員総会や役員の新入部員とくは、何と  
も堅苦しい感じが漂い、なかなか慣れることができなかった。た  
自分としては、態度ある態度で接するしかないと思つて、たか  
「きり」とすきた死打は、却つて他人に冷たさを与えるようにも見  
えた。そんな自分にと、マ最も落ち着けるのは、練習時間であつた。  
日本間での、あの練習だ。正座、黙想。細い目を閉じてい  
るときは、いつも強いものがある。何と書こうかなどと言うイメ  
ージではない。ただ強い線を引こうとする意志のみなのであつた。  
た。そして練習開始。とんどん書き、た。とにかく書きまく、た。み  
んなり真剣だ。た。当時誰が名付けたか知らないが、「くそ紙」と  
いう名の紙面に墨をのせた。のせたというより筆でこす、た。この  
紙は、安価で墨色は全く出てこない紙だ。た。一か一、そのくそ紙  
がまたよかつた。くそ紙は墨量の変化をついでた。だから、かす  
れば特に勉強になつた。ますますかすれが好きになつた。法帖もあ  
りとはゆるものを扱つた。日本間にあるほとんどのものを書いた。  
新しいものも開拓した。明清の書家たちであつた。明清の書には、  
技術的に巧みなのが多かつた。中でも吳昌碩や倪元璐は、好きだ  
つた。それを手本で、とんどん書いた。練習が終わり、たときは、満  
足感があつた。

下宿でも書いた。とにかく学生の頃は、書いた。今から思うと、  
よくそんな時間があつたと思つてくらくらく。

これからの、学生時代のような燃える気持ちで、書活動が続けて  
いきたいと思つています。みなさんがんばりなさい。





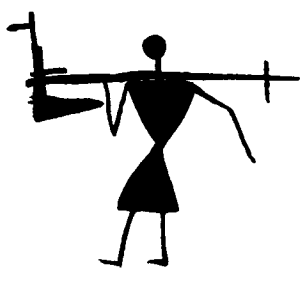
1の口でるものは、当時建造された寺院部の遺跡がある。イ

境にいた。陽の方でくーくーの音をたててくると、まてチャパティーを

くと、子供が二人寝ていた。おとんとおぼん、嫁さんなど、  
降ったように現れた。よくききた。と、トイさんお直  
る手ですすめたくれた。飛ひ上がるように辛かた。彼らおベシタ  
リヤンカ、アカシも肉のたいわい。イモ、ニンジン、豆など  
ゆで、カレール粉などまぶしてある。うまいものでわい。あまり  
の辛くは目も白黒までしている。トイさんが水を持ってきた。  
だが平口出なめた。水はあぶないのだ。ミネラルウォーターでも  
薬品臭く、ドブ臭い。

写真など撮った。タリーア、外燈もつけて面白いもっている小ぢな  
カーンも通りぬけ巨大がジマロの並木がある大平原の一歩道をら  
くだの背にゆらゆらしているよるゆくゆく、くわいた時の流れが、  
自転車もこぐペタルのギクギク音を伴奏に群衆の大空に上陸の  
青白い月を追いながら、いらぬ間に家内と月の砂漠をロップさみなが  
ら、幸々な気分になつて、ホテルへの帰路を歩いた。

タリー、アゲラのごみごみと、又、人々にふり回された道中から  
開放され、ホテルのレストランでブライビルと顔面ぐらにある  
カバネボトチップをポリポリやりながら乾杯した。翌朝の目ざめ  
はよかつたが、一瞬悪夢、おん返し待ち受けていた。  
人間万事塞翁驥、まだまだ長い旅は続く。



### 「ある夏の日」

五十六年度卒 鶴田 定司

「どうアアいら、いまはすか」と、OBの小村さんに電話を  
マみすと何と、「二十五周年の原稿を妻はんや」と命令されて  
「まいました。恐い先輩の顔が電話の向こうに浮かんで断る事が  
出来ず、筆を取、た次第です。

私がふ、と小村さんが懐しくか、電話をしたように、先日、現  
在の副執事の原君から電話をもら、大変、喜んだの。ア、彼  
は夏休みを逃下マイクア日本一開をや、ているから突然一泊させ  
てはいけません。原君は、私が卒業した年に入社しています  
から電話をもら、た途端、名前と顔が一致せず少戸惑いまいたか  
ら、アみると、どういえは、私が卒業した年の書道部のクリスマス  
パーティーの二次会での焼鳥格闘で、鶴田君(当時四年)の横に  
いた男と聞いてきました。

二人ア酒を飲み話をアアみると何となく他人とは、思えなくとも  
かす面白いです。いや、書道部です。と一緒によ、マきた仲間  
のような錯覚さえ感ずるのです。夜の食事は、焼鳥屋に行きました。  
とこの下私は現在、会社ア「特技は何ですか」と聞かれますと「早  
めー大食いです」の豪語が結構うけています。細身の原君はその  
私を前にアアどんぶりめー二杯をくれました。目を輝せ「夏合宿で  
は、こんな人ではないです」と返、マくるから、私は表面上は、  
平然を装、アいまは、心の中は、「おめーおめー伝説は生きても  
かあ。よ、しや、しとわけのわからぬ気分が入りました。私の特技  
の早飯、大食いは、医学的には、良くないのですか、「今」の自分  
を「今」の立場を大切に扱アアいたおと思、アいます。「大めー  
を後、ア大食をアアやろ。」と……

その時代に対応し、一つ一つの物事に自分の余エネルギーを注ぎ  
アクシオンを廻し、それを見事に排出アアいき、アアアアで、かいつ  
と過去にゆくの思い出を残アアうと……  
さて、翌朝、彼は、黒のTシャツと短パンで、にぎりめしを三つ

こらえバイクに跨り東北に向、マ千葉を去、マいきました。  
たまに、妻がお産で里帰りして、何となくお産が出来な  
たけいども、後輩を見送りながら、日射しがまはやく朝下りたが、  
私は、夕べ振りに心地よい清涼感を覚えました。

### 「新たな旅立ちへ」

五十二年庚午 文野 雄二

先日本の整理をマていきましたら、本に挟ま、た四つ折りのポスト  
カードでマました、人目をひく様なお宝やお宝のカード。このホ  
スターは、書道部創立十五周年を記念して開催された時のものであ  
り、OBの遠藤先輩に相談して赤木先生に揮毫を頂いたものでした。  
記念展は、福岡市立少年文化会館に於いて開催され書心会展併設  
されたのもこの時でした。あれから二十年、歳月の流れの早さに  
驚かされると共に懐古の思いに浸りました。

昨年は、福岡大学が創立五十周年を迎え、数々の記念事業が展開  
されたことをOBの機関誌「有信」や西日本新聞などで知りまし  
た。その新聞記事の中、サークル活動が盛んであることも紹介され  
ていました。四十余年ある学友会のサークルを代表して、書道部の  
西日本高等学校校揮毫大会が敢、マいるのを見、誇りにくもあり、  
皆に自慢したい気にもなりました。以前から、書道部の活動が、認  
めらふていることは、周知の通りですが、創立五十周年といふ記念  
すべき時に紹介されたことを考えると改めて、現在の書道部の活動  
状況と将来の書道部をみる思いがマあります。

小林田五郎の言葉に、徒勞の賭け。という言葉があります。私の  
大好きな言葉です。不可能と思えること、無駄な努力と思えることに  
チャレンジする情熱、合理性ばかりを追求することの世で、無駄なも  
のでも信じて努力することの意義を見つめる。その山崎田五郎の考え  
方です。私は、現在トライアスロンへ水泳・サイクリング・マラン  
ンを続けながら競走、鉄人レースともいってチャレンジしよう  
と練習をマしています。自分では、一生懸命努力がマしているつもりが

その結果が、なかなか表れない時、無駄な事をや、マいるのでも  
ないかという焦りに驚かれることがあると思います。無駄な無駄でない  
は、チャレンジしてまなげればわかります。結局、無駄な無駄  
重なる、何かが生まれると信じています。

創立二十五周年を迎えた書道部の歩みは、決して順調なものでな  
く、幾多の試練に堪えながら築きあげられたことを忘れてはな  
りません。書道部は、新たな賭け、徒勞の賭けに勝たんが為に立ち  
あげたのです。私もOBの一員として、微力ながら協力マしています。  
と思えます。



なすびのへた

が作られているという事であり、文字にしても原形文字の基本と

## 「なすびのへた」

四十四年度卒 前崎崎典之

卒業してから十五年になる。書をフラフラ書いてもう十五年も経ってしまつたのかと、改めて時の早さをかみしめている。どちらかといえは十五年間書のことばかり考へていたような気がする。人から趣味はと聞かれても、何が趣味かピンと来ない有様なのである。物を見たり、本を読んだり、旅をしたりして時を過ごすことは多いのだが、それも書を通して物を見るし、本を通して書を考えてしまふ。幸の不辛の何をやって書きつながつてしまふが、私は書の只使ひと言つてもよいだらう。

そんな召使ひが、今までの書に反感を感じている。正確にいえば書の学び方に、よりよい方法があるのじやないかと疑問を持つてしまつたという訳である。こんな話に耳を貸してくれる人はやはり少ない。長いことつき合つていて、ある程度理解を示してくれる人から、そんなバカなという顔をされるのである。さて、こちらは大真面目、バカな話を聞いてもらうことにしよう。

——ゴキブリは空にならないという話を知っていますか。本当です。雨が降るから縁があるのでなくて、縁があるから雨が降るといふこと知っていますか。私は最近知りました。幼児に知的教育をするに精神的發育不全になることを知っていますか。子供のお守りをテレビに頼むと、その子は自閉症になります。恐ろしいことです。書は古典の真似などやる必要がなく、ただ勝手気儘に書けばよいといふことを知っていますか。今、私がつていふことです。——

何をやるにも直接、直に自分で確かめることが肝要であらう。今まで正しいと思つていたことが、以外と間違ひであることも多いのじやないだらうか。古典に学べといふことは社会的に信用のある言葉だと思ふ。「古きを尊厳新しきを知る」これは金言である、私もせせと古典を学んで来た。ところが古きを尊んで来て思ふことだが、すべての造形物の最も美しいものは初期のものに多いといふことに気付いたのである。初期のものの特徴は自然を手本にして物

が作られてゐるということである。文字にしても象形文字が基本となり形成されたのである。動物の姿、植物の形、○や△や□や〽。すべて自然を見つめた結果である。人が造り出した物(書)に触れられて新しい物を生みだすのが書における芸術行為だと今まで思つて来たのであるが、それだけではいけないらしい。今では、自然を見つめ、自然とは何か、生命とは何か、生きるということはどういふことを聞いたり、そのことと書とのかのわりを感じ、自然の恵みをいづかに浴びることが、生きたいとした懸念ある書につながることに疑いを持たないのである。

自然を見ていて一番に気づくことは、自然には価値感がないといふことである。なすびの葉も茎もへたも花もどれをとつても等しく重要なのであつて、どれ一つ欠けてもなすびにはならないのである。ところが人間はなすびの葉にのみ価値を見つけるのである。又、花の好きな人は、花にも価値があると主張する。しかし、葉っぱやへたに価値を見出す人など一人もいないかもしれない。もしかして、葉草研究家にとつてはへたや葉っぱも価値があるのかもしれない。この様になすび一つとつても人の間では、価値も様ざまに変わるのがある。ところが人がどんな見方をしようとも、なすびは自然に生かされて、なすびであることを全うするだけである。花やへたのといちいち分けたりはしないのである。

自然を見るということは、真なるものを見つけるといふことにならう。人間界で分別された価値判断では、真なるものはつかぬないのである。「なすびはなすび」といふところに絶対のものがあつて、なすびは美味といふのは絶対ではないのである。書を学ぶものは、古典を絶対だと思ひがちである。王羲之は絶対で、王羲之の真似さをしておれば、永遠不変なものに近づけると思ひ、一心に臨書する人も多からう。だが「書は書」であるところのものをつかんでいなければ、如何に王羲之とそっくりになつても、何ら意義のあることではないのである。

私は、絶対の真なるものをつかみたいと、せせと古典にとり組んで来た。各時代、各体の書を臨書してみた。それもかなり念入り

に時間をかけてやったのが、どれも自分の手の届かない立派なものであるというところ、確認するに留まったのである。その利障といふのが、不幸にとでもいふのが、人の真似することだけは結構上手にやってみよう。

とこころがひよんなことからこころが書だというものにはぶっかった。朝日新聞に掲載された「ヘレン・ケラー」の手紙である。これを見た時のことは、今でもありありと浮かんでくる。大変なショックであった。目・口・耳が不自由な身で、や、と覚えてどうにか書ける様になつた文字である。まだ目の見えな時の、たつた一つ残された水の記憶を糸口に、冷たくてピチャピチャするものごとを、W A T R と呼ぶんだという言葉の実態をや、とのこととてつかんだ喜ぶ、そして目の前が広々と広がる光明を、一字一字の文字はあふれんばかりに刻みつけていたのがあった。

言葉や文字の持つ意義を身体で感じ取るのが書である。それがなくて、何で書といふよか。如何に巧みに筆を動かすことか出来たにせよ、それが何に作るのか。ただ上手なだけではないの。ただうまいなあと思惑をつかせるだけではないのか。上手だというだけで心算から感動できるならいい。私は今までにそんな経験をしたことがない。「これしかない」「これさえあれば他はもう何もいらぬ」といふ、ここに芸術は存在するのである。芸術にとって、多彩に表現出来ることは大して重要なることでは無い。却つてこのことが低俗を招くことを心配するのである。

私は初めに善は勝手気儘に書けばよいといった。書を愛する人であれば、そうするのが絶対の善に出会える最良の道であると信ずる。何ものにもとらわれず、堂々と自分の「これしかない」を書き書きたいものである。それがたとえ他人にとつて、なすびのへたでであろうとも。

Helena Keller.

五十一年度卒 山村 昌次

- 〔安・あ〕 愛情を持って後輩を指導せよ。敬い、ばかりが死書ではない。
- 〔以・い〕 畏怖するな、のびのびやれ。恐いものなごの世にさほどない。
- 〔守・う〕 上を望めば切がない。マイペースでやれ。一歩後退、二歩前進。
- 〔衣・え〕 遠慮はいらぬ。先輩には御馳走になれ。その分後輩に看れ。
- 〔於・お〕 往生際を知れ。いつまでも過去の栄光を越えな。
- 〔加・か〕 可憐な後輩には敬とせよ。黙つて見守るのも先輩の役目である。
- 〔幾・き〕 気配りも大事だ。相手は何を望んでいるのかよく考えよ。
- 〔久・く〕 苦悩こそ人間を大きくする。若きウエルテルになれ。
- 〔計・け〕 健康あり、その人生だ。下宿でラーメンばかり食うな。
- 〔己・こ〕 心を開け、さすれば友も語らうだらう。
- 〔左・ま〕 最善をつくせ。決して後悔せぬ為。
- 〔之・し〕 指導者たれ。その若きエネルギーを燃焼させよ。
- 〔寸・す〕 前道を辿せ。道理にかなう案はない。
- 〔世・せ〕 正義が勝つ。自己を信じよ。

正義が勝つ。自己を信じよ。

〔曾・イ〕

創造のつとめよ。歴史とは過去とこれからと未来である。

〔不・た〕

大局を見つめよ。こまかい事は程々の。

〔知・ち〕

沈黙は銀より劣り、雄弁は金にも勝る。有言実行」

〔川・つ〕

通説をきんせよ。水の流れに逆らえは溺れる。

〔天・て〕

的確な情報を探め。よく正しい判断を。

〔止・と〕

時は待、よく小ぬ。今何をすべきか考えよ。

〔奈・な〕

軟派で終るな。硬派と化せ。

〔仁・に〕

忍の一字に添する。それをも一つにさせる種。

〔奴・ぬ〕

拒ま、板かたつ、互いに精進を。

〔輪・わ〕

音と上げて見たとて、ものの何になる。己の価値を下げ成りなり。

〔乃・の〕

望みは高く持て。よしてのま終れ。

〔項・け〕

繁忙と愛せ。暇ほど苦しいものはい。

〔比・ひ〕

人として人を愛せ、人に苦しみ、人と笑え。

〔不・ふ〕

不慮の決意でぶつかれ。己に屈するべからず。

〔部・へ〕

偏人と成るもよし。人と同じ事とするな。

〔保・ほ〕

〔天・ま〕

鞭笞を忘るな。復讐未だ肝骨である。

〔美・み〕

通達せよ。舌つに身ままのせるもよし。

〔武・む〕

未曾有の言道部を創れ。伝統は生きものである。

〔女・め〕

無知は良いが、無恥にはなるな。

〔毛・も〕

名誉と栄光の為どなく、時に捨てるしなるも良し。

〔也・や〕

元手こぎはうぬ友達、輪、互程の反を今こぎ持て。

〔由・ゆ〕

役職に徹せよ。役夏で終るな。

〔与・よ〕

勇気を持て決断せよ。行く末は明るい。

〔良・ら〕

余裕を持て事に当れ。急いで善果はなし。

〔利・り〕

衆観は禁物。常に最悪の事態を想定せよ。

〔留・る〕

立案に一時間置せば、反省に二時間費せ。

〔札・わ〕

累年で時は経つが、歴史には血と汗がある。

〔呂・ろ〕

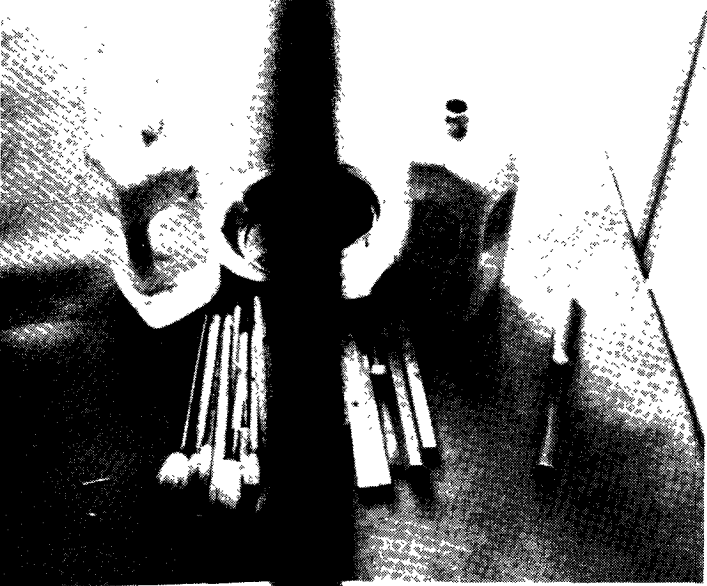
烈火のごとく燃えよ。一度は燃えつきこしまえ。

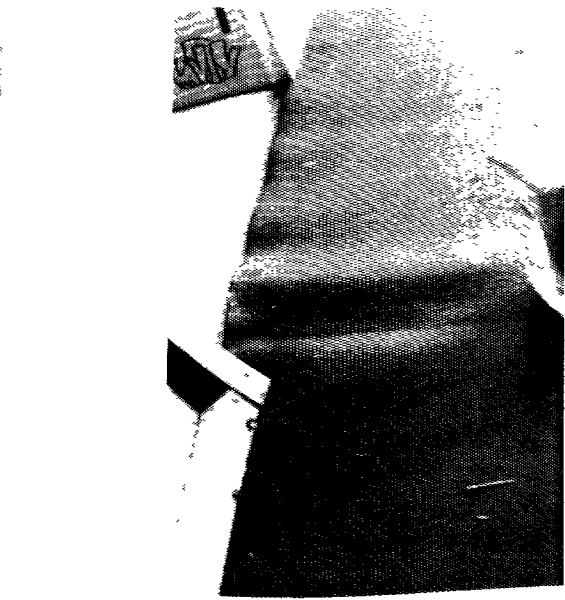
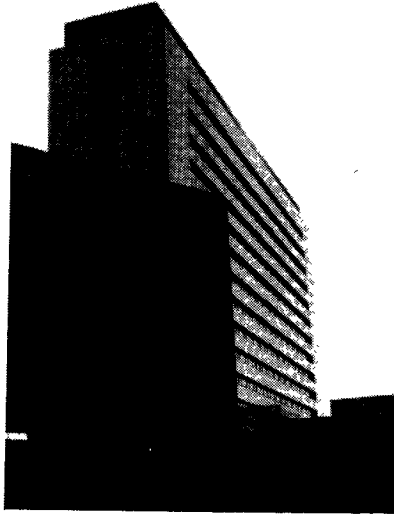
〔和・わ〕

労せずして、成功はなし。衆は後の衆にみにせよ。

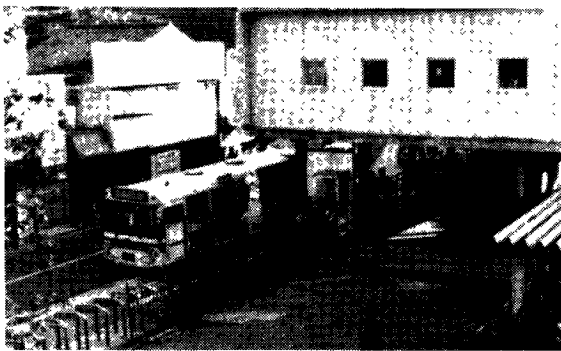
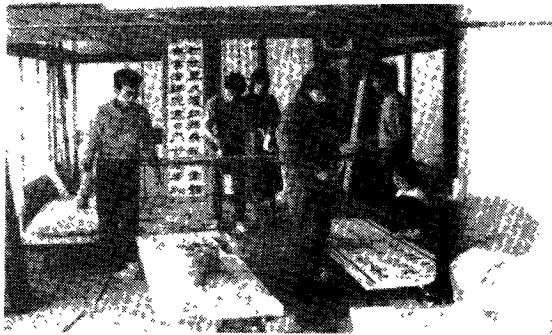
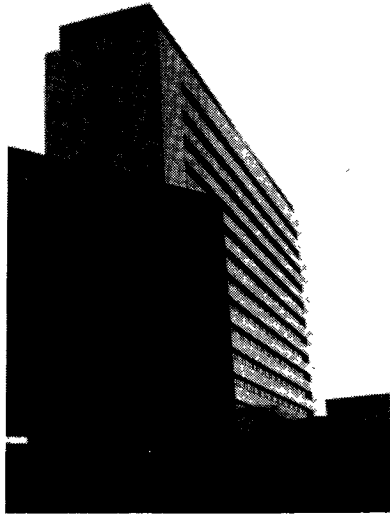
〔苦・く〕

苦き政、極み苦み進歩する。歴史を刻む音がする。









輝いていくとき

人文学部 一年 財部 知子

私は中学・高校とトラスバンド部でした。楽器はアルトサックスです。中学・高校とも九州大会に出場できるような学校でしたから練習は仲々ハードでした。中学・高校とも毎年夏休みは、ほとんどみりまこんでいた。大会が夏にあつたので、夏休みは最後の遠い込みだ、たのです。

私は中学の頃から先輩にうまいと言われ、割と期待されていました。中学三年間は、わけが解らず自信に満ちて、そのおかげで自分の思う様に楽器を操り、感情の入れ込みも大胆にやって、まあ、高校の時からでしょうか。楽器を吹く度、悩み苦しみ練習すればする程、下手になつてゆく気がしたのには、段々と自信というものが崩れ去つてゆき、人前で吹くこと、つまり本番に弱くなつて、いったのです。ステージに立つた時は、自分だけが頼りなのです。ステージで著段または、それ以上の実力を出せるか否かは、「自信」私は吹けるのだ、という自信が重要だと思つて、私はその自信というものを、それだけの理由ではありませんが、結局五年間続けた下ラスを、高校三年になる時やめてしまつた。やはり、自分自身に負けたということになるのですね。悔しいけれど、どうする、ともできなかつたのです。

今でも、あの頃と同じ位楽器が好きだし、あの感動、あの震えを味わいたいと思つてあります。普通の練習をしていても、楽器の音が聞えると、私はなんでこんな所で字を、書いてゐるのだらう、と悲しくなる時があります。でも私は、苦しみの中でも吹きぬいたあのステージが最後だと思つたし、最後のソロを満足に吹けたと思うから、悔しいはないと信じています。結局今までの中で、楽器を真剣に吹いていた自分か、例え苦しみでいたにしろ、一番輝いていたのではないのでしょうか。

今はまだ、書道に深く興味を持って、書いています。書いてゐると自然と無心になるといふことは、よく傾向でしょうか……？

星の楽しみ方

法学部 三年 照本 英若

毎晩、毎夜、空に輝いてゐる星を遠く

皆さんも今までに何度か、思わず息を飲むような星を、観察することあると思います。キャンプや、田舎への旅行等で……

そんな時、皆さんは、どんな気持ちで星々をみていますか？

最初から、「あ、あんな綺麗な星で、あんなにあるのか金星だ。」とか「えつと、あんなにあるのが、〇〇座で、その横が、X座だ。」とか思ひながら、みているのではないのでしょうか？ 初めから、そんな事、知つて、みているのです。ただ単に自分の感じてゐるままに、空を眺めていけばいいと思つて、そして、ず、と眺めてゐると、むくむくと興味を湧いて来ます。「あの明るく星は、何という星かなあ？」、「あの赤いのは、何かなあ？」なんていう風に……

か、残念ながら、ここでも、興味を湧かぬか、他人、残念です。か、布団の中に入つて、おやすみ下さい。

さて、興味を湧いて来た人は、疑問が増えるに候つて、色々な方法を、それを解決しようと思つて、本、テレビ、先生、物知りの友人、etc……、でも、一つは片付くと、あなただけ、もう星の虜、もう迷げられぬが、(と僕が思つていますが……)星々の美しさ、星座の色々な物何と、全天で88もあるのです。星雲、星団の素晴らしい等々……、特に夏の後の銀河、つまり、天の川ですけれど、これなん

か、僕のお薦めです。是非、星のきれいな所で眺めてみて下さい。最高ですよ。まあ、自分も、星の魅力に捕まつた者の一人です。が、預けていないと思つて、小学校の6年の時に捕まり、今まで続

いていますが、知識で星々を見上げていますが、やっぱりいいもの

です。下ぶん、星とは一生付き合つよう打気があります。

そこのあなた、一緒に星を見上げようぜ、いっしょんよ。

僕は、星を見ているからと言って、決して狼の暗く人間ではありません。でも寂しいものですねえ。最近、空が明るくて星のきれいに見えるところが、少なくなつた……。

日本一周、二万kmの旅

法字部 三年 原 若志

大学に入學してはや三回目の夏休み、四年の夏休みはおそらく就職活動で忙しいと思うから、今年の夏休みには学生生活最後の夏休みとなるだろうと思ひ、有意義な学生の時にいかにすべきか、何を捜した。その結果、バイクでの日本一周の旅に行くことにした。

親に生死の三日前に相談したので、あきらめてものはいわれないという感じであった。一人旅であるのが、親にとって特に引く掛、てなかなかに許してもうえなかったが、ねほりにねほって、どうにか許可を得た。これから二十三日間の旅の出来事を、日記的につつ、てみる。

初一日、七月二十日土曜日、快晴

広島の自宅を朝五時に出発、山陽路をひた走りに走って神戸に正午に到着。六甲山に登り、展望台からの眺望には驚いた。その後公園で昼寝をし、十八時にOBの江越先輩と待ち合わせ、三ノ宮へ飲みを連れて行ってもらう。帰りに、ラーメン屋さんに寄ってラーメンを食べたが、最後の味、やっぱり九ツウラーメンは最高！  
走行距離三三七km（街中を走るのは疲れる）

初四日目、七月二十三日火曜日、快晴

眠い目をこすり早朝四時半に起きて有名な輪島の朝市に行つてみた。なんとその場所には、人、こ人もいない、路傍も全く姿が見えなかり、何の為に早起きをしたのか、下うつ。輪島の朝市は旅行者相手、八時ごろから正午まであることを耳に、愕然としてしまった。輪島を八時半に出発し富山へ正午に着く。ここからどうするか考えた、すぐ決定、立山に行つて山登りするーかなーと思ひ、早速実行、電車、バスを経由して、立山室堂に着く。目前にある雄山に登った。山頂でのあの風景は、言葉では表現できない。

下り、富山駅に到着したのが22時近く、今日の宿所は、富山駅。駅のベンチは、堅く眠りにくかった。

走行距離二一四km

初七日目、七月二十六日金曜日、快晴

立山で、山登りのよさに取り付かれ、今度は日本一の山、富士山に挑戦、話によると登つて下るのに八時間程度かかるらしい。契約アケにビールを飲み、気合を入れて登山開始。四時間をかけ山頂に登頂、なんというこのすがすがしさ、この充実感は、たえられなかった。二時間休憩後、走つて下山、なんと一時間か、かかつていないのには自分でも驚ろいた。日本一の山を征服した。

走行距離一〇〇km

初十日目、七月二十九日日曜日、快晴

純子の犬吠崎から千葉市へ引き返し、OBの鶴田先輩の家に突然訪れる。今までほとんど話してこなかったことが、自分に、書道部の後輩であるというだけで、気持ちよく出向えてくれた。昼から酒を飲み、夕飯には焼肉を食べさせてくれた。旅に出て、まともな飯物を食べてなかった。た。だ。ひ。た。す。ら。飯。べ。た。余り飯をすきたので、胃の調子が悪くなり、胃薬を飲んで眠る。畳の上で眠れなかった。なんと幸せなんだろう。( )

初十三日目、八月一日木曜日、雲りのち雨

目が覚めるとそこは霧に包まれた函館港だった。霧のかかった函館港を、青函連絡船は函館駅に着岸。とてモロマンチックでこたえられず、その気分を数十分楽しんで、ぼけーとして過す。それから神威岬を経て札幌へ……。走行距離六〇〇km

初十五日目、八月三日土曜日、快晴

大雪山近くのキャンプ場に泊り、朝五時に起床しまたも登山に挑戦。今回は大雪山連峰の徒走である。約九時間歩き、げげし、夏の大雪山は高山植物でいっぱい、その風景には感動の一言である。約三十kmを歩いたので疲れて口も開くのもいやなぐらい、よく考えてみると朝からカンコーヒー二本と、牛乳を一本しか飲んでいなかった。疲れるのはあたりまえである。自分も、まだまだ若いんだなと感心した。

オ十七日目、八月五日月曜日、重り時々雨

守屋君のYHに右り早く起き、知床名物のカムイワツカの巻に行き、露天風呂に入った。もちろんお昼はただで、なんと混浴である。ふろに入っていたら、若い女子が教名やって来たのには驚いてしまった。その後、知床峠を通り網走峠、霧多布峠を経て釧路へ、今日もまた宿は駅に打っていった。コンクリートの上に寝袋で眠る……。脚が痛くよー。

オ二十日目、八月八日木曜日、快晴

今日は記念する日である。なせかと一年数ヶ月ぶりに、福島の友人に再会できるからだ。その夜達は、三年間で自転車による、日本一周中で、この日に青森に来るわけである。午後十時に駅に待らぬゆせ、一年数ヶ月ぶりの再会に感動、いつものようにいつものように、酒を飲みながら街にくり出す。今日の酒は、本当においしかった。ふらふらしながら駅にたどり着く、今日もまた宿は駅に打っていった。考案者には、たようなお負かする……。

オ二十一日目、八月九日金曜日、快晴

昨日の酒が残り頭が、がつかんている中、午前二時半に目が覚めた。今日の目標富山市、走りに走りまくり午後九時には、なんと富山駅にたどりつく、なんと十六時間で八〇〇kmを走破。お尻が痛くてたまりません。もうバイク乗りのイヤだ！

オ二十二日目、八月十日土曜日、快晴

昨日の疲れが、体の中に蓄積されているのが、自分でわかる。今日は京都にて、おの志岐先輩と待ち合おうことになっていたので、疲れた体に鞭打って走った。約束の時間より早く着いたので、京都駅から清水寺まで往復二時間ぶらぶら歩く。その後、志岐先輩と飲みに行き、冷房バリのバリのサウナで眠る。なんと気分よーことか（忘れることか下させせん。）

オ二十三日目、日曜日快晴

旅の最終日、京都を七時半に出発。一路五島へ……安全運転にだけを考えて走った。十時間をかけて四〇〇kmを走り、生きて家に

帰る。親のほら、といた歳……。心配をかけてどうもすみません。自分でも生きて帰って来たい。今日のビールは最高にうまかった……。感慨無量とけこの様も状態をいうのだろうか。

「感想」

本当に楽かった二十三日間、考案者の心とくあてもなく、行きたい所にふらふらと、眠りたい所に寝袋で眠る。山を川を海を見、体で触れてきた。自然のすばらしさに改めて感動した。色々な街を見、色々な土地の人間と色々な話しかけてきたのは、とてもためになった。その中で自分を心で見つめ、本当の自分をつかんだような気がする。人間は未知のものに憧れ、ロマンを追い求めたものかな？自分の存在を確かめたい者は、一人旅をするか……。そこには今まで発見できなかった自分、また必ず何か待っている……。

僕の朝だよーん！！

高学部 一年 後藤 元彰

「ケウトール」という尾崎先輩の声で朝目が覚めて、時計を見ると午前五時半。もう一度、僕は眠ろうかと思うが何故か眠れない。こめは、何かに取り付かれている……。それから朝はほんの時間まで何もしていないで、たてこたえを聴いてボケッとして、たり、一日がボケッとしてしまっ。そして、ぼんぼんを履いて、月・水・金は毛氈敷の日だから、八時五十分までに部屋に行かなければならぬ。僕はバス通で、八時三十七分のバスに乗ると、大学に着くのは八時五十二分、三分ぐらい。それで遅れるとや、びりまじりから、八時十分のバスに乗らなければならぬ。それで行くくと八時二十五分ぐらいには大学に着く。そして、ジュースコーナーに行く。コーヒを一杯飲む。ミレかうまい、しかし、僕のまわりでジュースやコーヒを飲んでいる人は、みんな暗い。ついでに僕も暗い。そうして、八時三十分過ぎた、部屋の戸をたたき、すると先に来られておられる小本先輩、原先輩が「ケタルイナ」とおっしゃる。やっぱ僕も、ケタルイのたろうか。そして、田中先輩が入って来られる。田中先輩は、応援団のものまねがお得意なようで、僕もたぶらお話を交わす。只れ、只れ、只れ……。

か入って来りぬ「バカ」とおっしゃる。そして、照本さんか来りぬ  
て「何しよんかおまえ、びーっとせよ」と、おっしゃる。こ  
れで、僕も少しはびーっとなる。そして、尾崎先輩も来りぬ、も  
う何も言えないくらいにメキメキクチュには、さしは、そろそろ書  
く字数がオーバーするなので、藤代先輩、平田先輩、中川先輩、  
白糸先輩、石川先輩、前田先輩、木下先輩、正木先輩、  
真月先輩、鬼頭君、西本君、井上君、児島君、牧迫君、北本君、豊  
永君、岩井君、岸原君、中尾さん、新聞さん、財部さん、石田さん  
おほようございませう。

### 秋日

人文学部 二年 石川 恩喜

秋である。大学に入って二度目の秋になる。この頃、つくづく時  
間の経つのは早いものだと感ずる。ついでこの前二年生に当たるんだ  
なあ、と、一年生を終えて思ふ、そして、「長い夏休み何をして過  
ごそうか」となると考えていたのに、もう秋なのだ。そこで僕は考え  
た。時間の経つのが以前より、早くなっているのではないか。つま  
り、速くなったり遅くなったり、なりなかりか速度を増して来ているの  
だ……。

人間の平均寿命が伸びて、社会問題になつて来ているが、あんな  
平均寿命が伸びたものでない。時間が速くなったから、人間が長  
生きするように思えるだけなのだ。又、楽しい時間は短かく、苦  
しい時間は長く感じられることがあるが、それは感じられるのではな  
く、実際に長かったり短かったりしているのである。時間のスピ  
ードが速くなるから、高速道路はでき、飛行機はひびきりたりに飛  
び、人間は早口、早足になる。生活全体が高速化しているのだ。な  
んど、僕はとりとめもないことを図書館の椅子にすわって考えてい  
ます。外はなんとすがすがしい天気なものでしょうか。背振の縁線が  
西からつづいて、文系センターで途切れています。

二年もあと半年、そして三年、四年、方からむとむと、忙  
しい時間が来ることでしょう。でも山から、大学生を自分のや

スで有意義に送るためたまには、こういう余裕の時間も必要だと感  
じます。とりとめもないことを考えている今、時間はゆるりと過  
ぎていきます。(於図書館)

### 時空を越えて

法学部 四年 藤代 裕之

ついに大学入学並かに書道部入部以来、三年と半年の日が経って  
しまった。四年生になつても、あ、という間に月日は流れる。一体  
これまでどの時間を何に使ったのだろうか？ 下宿の部屋の中、ワイ  
スキー片手に、懐しのビートルズを聞きながら振り返つてみよう。  
先ず下宿生活では、先輩と後輩達のいる中での共同生活、とにかく  
自分の存在をば、きりさせ、規律のとれた生活とし、他人に迷惑  
にならない様、自分の時間をフルに活かして来た。下宿生活、  
それが、全ての活動源になつて来た。

高校から同じ福大に進学して来た友と、時々、集まれば酒を飲  
み、高校時代を懐かしみ、お互いの大学生生活を確認し合ひ、大学に打  
つた今でもつぎ合つている。そして、やはり一番大きな大学生生活の  
出来事といえ、書道部への入部だろう。一日の時間が、書道部単  
位で生活し切つて来たのではないだろうか？ 苦しい事、楽しい事、  
様々あり、先輩は言うまでもない。二年生の最初には、気がつくと同  
輩かいない。学年に一人しかいない。致命的な事だろう。そして、  
大学に入つたから、何かのサークルに入つて頑張ろうという入学当  
時の決意と、恵まれた先輩後輩に支えられながら活動して来た。その  
中で書道面では、赤木先生という素晴らしい先生のおかけで、具展  
市展と入選する事が出来た。大変な事だが、体験もできた。

二十四代という代の幹事を引き受け、そして七転八起の一年を送  
つた。この一年間は、自分だけが上級生、副幹事以下一ツ学年が  
運うという、異例な形でやつて来た。わけがわからなくなり、気が  
狂いそうなたまも、たけれど、皆んなの力で乗り越える事が出来た。  
二十四代か、どのようなカラーの代だったのか？ 聞かれても答え

ようかない。もう聞きたい人がいるのならば、直接自分の方に聞きに来て欲しい。そして、やがて四年生と打った。四年生と言え、最高学年というわけで、簡単そうに見える、とても難い。学年だ。一言で難いと言つても、簡単に答えられないのだが、クラアの顔が幹事ならば、クラアを見つめる目ではないだろうか？ その存在の有り方が難いのだ。

この大学生者、人間関係無一では、語る事が不可能だろう。自分か大学生生活で学んだ事と言え、何事にも前向の姿勢で積極的に行動する事、人間関係をうまく保ち、人の良い事を吸収し、お互いに向上し合う事だろう。そして、これらの事が決して無駄にならないと確信している。自分から進んで行動しないと得るものは少ない、心の中にも残るものは少ないだろうし、社会生活をする中で、人と人との関係というものが、最も大切な事ではないだろうか？

その中で、自分の進むべき道を察し出す事か、人間らしい生き方ではないだろうか？「人間は考える量である」今、一度この諺を確認し、書道部に入つた者は、この書道部という小さな世界で大きな世界の中で、自己を確立して欲しい。

多分先輩方も、この書道部という世界の活動が大好きな自信と持って、現在も活躍していることだろう。残された数ヶ月、本当に集大成として積極性をもつて活動したい。

### 最近思うこと

人文学部 二年 真角 寛子

今年むきた秋が巡って来た。この季節になると幼い頃のいろいろのことを思い出す。雉を拾いに行ったり、柿をちぎったり、とんぼを捕まえたり……。専攻部中心遊んでいた自分、近所では少し、二くて有名だった自分等々、歳月の人を待たないの間に自分を二十にさせてしまった。

何か一生懸命に追いかけていたあの頃にも一つ夜もこりた。窓から夕暮れの風景を見ながらこう思った。

・ 秋の日ほつろべ落として、と言われる様に、真承の太陽が地上を照らし地平線に沈んでゆく。雲が光に照らされて鮮やかな色を描き出す。ああ何とすばらしい芸術だろうと感心しながら家路を急いでる。大学生生活も二年目に入り後輩も出来たが何故か入学式が昨日のこの様である。最近はずっと日々よくしく月日が過ぎていくような気がする。祖父が亡くなった事もあるが、これもあれも、しなくてはいけなない事ばかりで自分の時間がこれだけ「ち」しかない。しかし、今が人生の修行だと考えたと何ともない。これから人生の大きな球外さな程も来りこえていく身のたからだ。その為には、幼い頃のあの無邪気な笑顔を忘れずにいたい。

### 私の書道観

法学部 三年 平田 聖子

わずか三年足らずで、書道を知りたように考え、何を待て来たか、は、キリーに、とは、うまく文章として表現できにくいのですが、この言葉としてまた形として言つて表わすことのできな部分、内に秘められた自分の心を、書に表現できるような気がします。

時と場合によつては言えないこと、心と裏腹なことを言つて、いまうことか、誰にもあると思つたのですか、そんな時の、本当の自分を書は、自己主張の場として表わして行くと思つたのです。

又、よく人は、顔やスタイルでその人の、人間性がわかると言われまが、文字にも相当することだと思つた。他人とも情的に書ととりあつていよう、このような考えは、かりでは、当然書の追求の幅が広く、おもしろくありません。一応、書道をやつていながらには、上手に打りたい、又芸術的に認められるものでなければならぬ、強く思うのです。

そこで私は勉強方法として、もちろん古典の勉強も必要だと思つたが、今は、福大書道部に在籍している以上、講師の赤木先生の、おしやる通りに勉強を進めていくのが、本当だと思つた。

私を二十代とさせてしまった。

書の古典的な魅力もわからず、主体性もなく我流となつてしまつた。かもしませんか、そういう中でも、自分か今までとりえてきた書のイメージを、直観的な能力でタッチし、また筆の持ち方とか、どのようにしたら行間がすきりまのいに見えるとか、墨汁の濃淡などという知的な能力がうまくかみ合ふこと、自分で納得のいく書か描かれるのではないかと思ひます。一か、なかなか納得はいくもの、又か書けたと思つても、認められたいことか多分にあります。一か、書けたことか、自分にとつて努力を、他のものとすばりい、作品を見て目を高め、反省をするので常に勉強してゐる状態になると思ひます。

このように練り返しが、今の私の勉強方法ですが、まだまだ勉強不足で、ぬかるやうでぬかからないやうで、理論的に言いつらして恐縮するだけですが、謙虚な気持ちも忘れずに、生涯にわたる課題として勉強してゐると思ひます。

### 書感

尚学部 三年 山本 順一

我々は、少年とも墨書に興味を持ち、自ら墨書を求める者の集りである。従つて我々は、社会に存在する墨書を見たり、又書くことによつて自己を満足しようとするか、時には意に添はずその不満を白紙にぶちまけたりする。こゝろに書生志を行う者々だが、一人一人を見渡すと、真に書をもつてやまぬ道の人もある。学生の余技として書をもつてゐる人もあるが、我々一人一人は皆目的を持って書技にいそいでゐる。一か、何かにして現在我々は素人であつて、未だ専門家ではないが、書の奥義を極めようといふ意、過渡期にある者で、あるなまらぬが、そのような人も現在に於いては、まだ素人の域を脱してゐない。こゝろに現状にある我々は、墨書を研究し、実技を磨くに當つて、一併何を成さねばならぬか。

一般的に書に関する事に興味がある人や専門書家でさえも、我々が書写した文字の巧拙を簡単に云々することか多いやうだ。我々も

まずか、今は、大書道部には在籍してゐる以上、講師の山本先生の御しやる通りに勉強を遊んでいくのが、各々だと思ひます。

その類ではないだらうか。勿論美術的に、芸術的に書き出した作品は、その個人の性格が表現され、技術的にもうまざりあり、他人の心を引きつけるものであれば、立派な書と言えらるであらう。一か、それだけではない、巧拙を云々してよいだらうか、もつと深く細い見つけ方をしなければならぬと思ひます。

例えば、書を批判するに當つては、前述の評を下すことの外に、毛筆をどのように使用したかの点についても着目してみたい。

用具論に於るかも、一か、墨書は毛筆によつて表現された文字である。同種類の墨と筆と紙によつて表現された作品に上下が出来、個人差が見受けられるのは勿論、その人の心の在り方にも左右されるだらうか。そこには毛筆をどのように使用したかによつて随分差異を生じる。毛筆をどのように使用し、毛筆の一つを如何に使つてあるか、作者が書表現に企及することを、一本の毛筆に托して如何に工夫し、如何ように駆使したかをもつと見つける必要があるのではないだらうか。

技術上腕法とか、執筆法とか種々言われてゐるか、所詮はその指により腕によつて毛筆の鋒先を、どのように紙面に接させて、意圖した作品を完成しようとしたか、いつと見つけていくことか大切だと思ひます。これは一例にすぎないが、やうすることか松道の研究になり、技術の練磨となるのではないだらうか。

私達は、まず実技養成に努め、文字表現の實力を養わなければならぬであらう。それが、書の心を知る一番の方法であると思ひます。



部員の一き

我が青春に悔いはなし。

法学部 四年 藤代 裕之

書道部で出会う人達は、私の財産です。がんばり、増やしたい。

工学部 三年 尾崎 光義

自由奔放にはきき、真白にはなるまで……

法学部 三年 原 浩志

二十一歳の抵抗！ 人生は限りなく、サーマまた、ほかのものはある。

経済学部 三年 瓜生 達哉

血に飢えた服のような目を持って、生きていきたい。

法学部 三年 田中 英樹

何にでも 悔いのない一生を 私は生きたい。

法学部 三年 服本 英治

若さは 楽さ 美しさ 喜びを増せ、哀しさは その後悔と哀惜で生まれるのびーばである。

商学部 三年 山本 順一

書道部で 大学生活を送れることが 大変うれいのです。

法学部 三年 平田 聖子

夢にこだわり続ける事。

それは怒かし続ける事に 他ならない。

工学部 三年 木下 晋

夢は 人生である。

商学部 二年 中川 純博

健康第一、元気に 楽しく 徹しく 頑張る。

人文学部 二年 石川 忠喜

理想と現実とのギャップの中に 己れを知る才がかりを見いだすことができる。

商学部 二年 前田 秀樹

今日も元気だ 書道がうまい。ああ 若いってことは いいことだ。

経済学部 二年 白糸 林太郎

徒然草に 「をりふりの桜り変はるこそ」という段があるが、私も現在 この心境である。

人文学部 二年 真角 寛子

雨がかりの虹、夕焼けに溶け込むシャボン玉、心が揺るぐようなソムニヒとにふれたらいいな。

薬学部 二年 正木 香美子

マコーステックな セピア色の女性でありたいと思、っています。

人文学部 二年 大谷 薫

夜の街は 暗すぎて 俺には似合わない。

昼の明もさうそのようだけど 一人夜の街を歩く。

経済学部 一年 井上 寛司



最近サークル活動が、生活の一部位になっていま、たような気がしますが、毎日楽しい大学生活です。これが現在の、自分の実感です。

経済学部 一年 岩井 弘一

今、自分にできることを、精一杯して悔いの残らない活動をしてみたいと思う。

商学部 一年 岸原 真弘

僕たちの歩いてる長い一本道は、どこもけわしく長い道だけども、これから歩く人のために、ゆるんだエエ、おためよう

商学部 一年 北本 正範

前に進んでいこううちに、いつか何かが見えただろう！  
だから、前に進むんだ。

経済学部 一年 鬼頭 雅人

思い、切り スロットルを聞く。走る！ 蹴る！  
俺に有るのは、眼前に続く道だけだ。そして僕は、風になろう！！

商学部 一年 見島 道彦

僕は、二番より一番の方が、もっと三番になって、一番じゃうぜ  
それで四番なら、一番でもいい。

商学部 一年 後藤 元彰

ブレインスターで決める、俺の人生。

商学部 一年 豊永 泰之

Be Free

理学部 一年 西本 祐介

性格は、かなり暗くて、僕の一番の欠点は、何と、いってても女の嫌いなことですが、よろしくお願ひします。

文学部 一年 牧道 栄作  
強く、強い人間になりたいです。

法学部 一年 中尾 翔子

強く、カリッぱい。若さにまかせて、生きていけたら最高です。

文学部 一年 新開 祥子

将来性のあまりタイプ、好まです。

文学部 一年 石田 陽子

ぼー、といてると、時が過ぎてゆき、私はとうとう19才。  
年齢にとり残された一歳、アッという間にわたります。

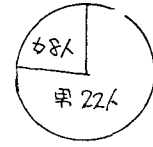
文学部 一年 財部 知子



# 書道部データ・バンク

現在、書道部員数は、三十名。我部を知、つらう後に  
書道にアンケートを取りました。以下はその結果です。

A. あなたは、男ですか?  
女ですか?



我部は男の子が  
女性が多いです!!

E. 高校時代の部活はどの部活ですか?



F. あなたは自宅生ですか?  
部活はアパートに帰る自宅生もいるようです。



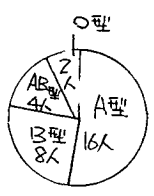
部活は、アパートに帰る自宅生もいるようです。

B. あなたはどの学部ですか?



理学部という  
変な名前が多いです。

C. あなたの血液型はどの型ですか?



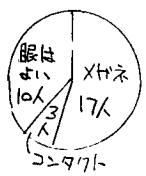
歴代幹事をした  
方は、B型が多いと  
おぼろげに第26代幹事  
がB型です。

G. あなたは行くか行かないか?



部活は、北政の  
ジャンボータに  
とってかわります。

H. あなたはメガネをかいてますか?  
Xはメガネを  
書道をやる  
と眼鏡は減らします。



眼鏡を減らします。

I. あなたの採算はどのくらいですか?  
7割の人が採算を上げて入部と回答です。

その他の解答例を、  
まきく山、  
E-1に本数を上げ、  
花巻におどろかせ、  
イトコオバ、たから  
ア、エリー聖堂のゆるぎ  
看板が素敵、たろ、  
... E+D

K. あなたの趣味は何ですか?  
書道部の三大人気趣味は、音楽鑑賞、ドライブ、読書です。

その他の解答例を  
掃除  
寺めぐり  
寝る事  
数学  
料理(男子解答)  
... E+C

L. あなたの特技は何ですか?  
スポーツをあげる人が多かったようです。

その他の解答例を、  
三ツツツツツ  
大食  
波のこぼれは特技です、  
... ( )

・自作書  
・波のこぼれは特技です、

無  
15X

供  
福  
の  
よ  
い

10  
Y

日

・農  
作  
業

・モーニング

・屋台で焼酎をたのむ事(？)

・学食の既定食を二分して食べる事

・・・etc.

M. 休日の過ごし方は？

ホーリーとマいる、TVを見る、ドライブが人気がある、たまたま、その他の解答例を、

・ひたすら眠る

・映画を見て、コンサートに行く、天神を歩く

・絵を描く

・弟とバレーセンターへ行く・・・etc.

以上が アンケートの結果です。交通部の部署は、一様にと、おまきり変わりはないようです。



# 書道研究

## 明代の書について

明代の書道研究については、四人の代表的な書家を選び、年々順に述べていこうと思ひます。

まず最初と董其昌は、董其昌（江蘇省松江府）の人で字も玄宰といふ。嘉靖三十四年（一五五五年）に生まれ、崇禎九年（一六三六年）に没した。

明代の前中期の書道は、元代の繼承であり特長として様式化されたものであつた。後期になると、その元固定化した国に過ぎず、その型を破ろうとして先頭をきつたのが董其昌である。

董其昌の書の特徴は、フとめて生々たる書さう。そして主觀を盛り上げて、天真爛漫な境を出しなす。一見は、ドけてあるやうであるが、それが却つて一つの運法を醸成する。時に狂放な草風のものを書いたが、どこまでも節度と快活さというのをもその人柄によるものであろうか。

董其昌の狂放時の書は、かなり筆意が走りであつたが、次第に格致なものとなつていった。董其昌の書はこのように淡々とつてゐるが、筆意はどこまでもまづわづらふやうなねばりを持つてゐる。しかもねばり、こさが嫌味にならぬ程度に止まり、いぶる服のような淡さとなつてゐる。

マニリスムに陥つたが、たといふのは、常に生々たる書さうといふ努力があつたからであり、そして心用意の淡さだけには留意を表現した。

また董其昌のこの心は、明末の黃道周や王鐸、倪元璐、傅山に致つて一層強調され、さらに絢爛たる書道が展開されたのであつた。

次に二人目として王鐸は、河南省孟津の人で一五九二年に生まれ、一六五二年に没した。明、清の二朝に仕えた為、社会からはその行動は非難されるが、自由奔放な性格のため、本人はそれと負けてゐなかつたらしい。

王鐸は博覧多讀や画もよく、書は時にすぐれており、黄石首を號とする。その書は、村上三島氏によると、黄庭堅や東坡などのよりの、パツと一時期がない。つまり一つの型は、た書の強弱

がないといふ。「筆を東南西北に操る人」「筆を素直に使う人」が、かじの方向にも動いてゐるの、筆舞といふもの、腕の陥らぬ、と村上氏は表現してゐる。

晋、唐の古法帖（羊本）なる筆跡を石ずり（本本）を研究し、それを単に形の模倣に終わらせず、原帖を手がかりとして形式にとらわれぬ自由な書を目指した。

建綿草（三字、五字ある）、は一行字句全部にわたつて、統一した草書も得意とし、沈勁豪放、明末清室派の筆一人者であり、自分の感情や熱氣を得意の書で表わせた王鐸はまさに芸術家であつたと思ふ。

そして三人目として倪元璐は、上虞に万曆二十一年（一五九三年）に生まれ、字を玉汝鶴玉と号した。

彼は王鐸と同年の天啓壬戌（一六二二年）の進士で、礼部尚書兼翰林院學士にまで出世した。

崇禎十七年（一六四四年）寧自成京師を陥るに及んで、衣冠を整理し、北向して父を拜し、南向して母を拜し、自ら自縊して首をくつて死に、殉國の忠節を称せられた。

倪元璐は、詩文を能くし、書画に巧みで、その書は力強い筆致は押さえることのできない風概を感じることができる。

また行、草を能くし、高節な人柄を現した枯淡超逸の書である。例として作品を二つ程あげてみると、八五言律詩帖（行書。この幅は筆力剛強。倪元璐の面目躍如たる書で、狂放期の作とみられるが、すでに狂俗の書風を示した優品である）。

八詩画冊（行書。この詩画冊は倪元璐の巻上の履上にのこしたもので、伝家の秘宝ともいふべきもので、山水・奇石の画と共に詩四首を録し、詩画冊を成り、書も画も元璐の代表的作品といふ）。

最後に、張瑞因は福建省晉江の人で、二水・白毫庵主。または果亭山人と号してゐた。

瑞因は、当時勢力をふる、マニリスムに陥つた、彼のため

に生祠碑を手書し、彼の引立によつて台閣に列したといわれ、います。

このように台閣にまで列した人ですから、政治家としても相当のものであつたが、それよりも書画の専心とマニリスムに陥つてゐる、

ように、パットと時徴がない。つまり一つの型にはま。本書の構成

重宝昌、米百鍾と共に明末の四大家といわれ、俗に冊張米書とも  
称されてゐます。

一、カー、彼は毅宗の逆鱗にふれて官を免せられてゐるので、明史  
に伝記の記載がなく、その生卒すらは、きりりないのは、何とも惜  
まれることです。

明代における書の本流は、やはり王羲之中心のものですが、瑞  
圃はその伝統に逆ひ、永らく引継がれてきた王羲之一知微の旨を閉き、  
新たな手法を打ち立てたところに偉大さがあります。

だが瑞圃にても最初は、やはり王羲之の門をたいたことと思  
われ、瑞圃の偉、所は、古人を学びながら古人の原にならず、  
よく自己を見出し、一種独特の書風を築きあげた所にあります。

瑞圃の書は、フトコロの広いものではないが、その線は、キリッ  
と引きまわり、逆切れのよいキビキビとした感があるので、結構法  
用筆法に大きな特徴があります。

そして、瑞圃の結構法は極めて求心的なもので、どうもフトコ  
ロは狭くなり、暗い感のものとなり勝ちですが、その欠点を筆  
法によって補つてゐます。

つまり、転折の個所では筆を反転させてゐるが、この手法だと、  
筆先の一画のみを使う手法よりは、ズツと墨のもちも良いので、時  
に連綿筆には最適のものといえるだろう。

また、このように筆を反転させ、その瞬間に筆圧を変化させ、避  
速の変化を加味させてゐるので、線も自ら伸びやかになり、抑揚も  
生じ、字形にするフトコロの狭さを、これによって或る程度カバー  
してゐます。そして、これこそ瑞圃独特のものであり、一つの技法  
として学ぶべき点であるでしょう。

ところで、このような特徴は、印刷物だと兎角、ハッキリない  
ので自然・形のみを学ぶ結果となり、瑞圃の欠点のみを習得し、ち  
なで注意しなければなりません。

以上明の四人の書家をあげて説明し、明の時代は、以前  
の型を破ろうという思想があり、それが書風にも表われ、あげた四  
人の書家にしてもその書にそれぞれ主観や個性があり、見てももの  
眼を驚かせてくれます。

それだけに学ぶべきところも多分にある時代であるといえるで  
しょう。

### 一 宋時代一 米市

米市重祐三一大観元。1051-1107。名は初めは敏の字を書いたが、四  
十一歳以後は市を書いた。あざなは元章。襄陽(湖北省の人であるの  
で鹿門居士、襄陽漫士と號した。

米氏は周の時の楚國の子孫であるといふので「楚國米市」という  
印を作つてゐる。父は武官、母が宣仁皇后の書知であつたので、そ  
の恩によつて秘書省校書郎に補せられ冷光尉(廣東省)に任ぜられ  
たのが、熙寧八年(108)二十歳のころである。以後、南方に官する  
こと五年、その間、桂林(廣西省)にも官した。それから蔡河撥發  
といふ職をへて崇寧二年(110)には太常博士であつた。ついで知常  
州に任ぜられたが、赴任せず管句洞管官となり、出で知無為軍と  
なつたが、招かれ書畫博士となり、禮部員外郎に擢げられたが、  
間もなく出で知淮陽軍となつたのが崇寧五年(110)聖大観元年(1107)  
海陽の役所で卒した。享年五十七歳。書のみならず畫にも長じ、  
いりゆる米法山水の創始者である。畫畫の鑑識に長じ、多くの名蹟  
を収蔵し、晋人の真蹟畫畫を得たのが寶晋齋と號した。石を好む奇  
石た会えば拜したといふ。

また非常な潔癖でも有名であり、色々奇行に富んだので米顛とも  
米癡とも呼ばれた。

書はあらゆる書を手学んだが、結局晋人の高古の風を慕ひ、よくそ  
の筆法精神をえた。終生の努力と天才とで一家をなし、書の技量で  
は宋代第一である。

学書についで米市は、自らこう語つてゐる。「自分は初め顔真卿  
を学んだ。七、八歳の頃は非常に大きな字を書いたので、一枚の紙  
にまとまらなかつた。後に柳公權の書を見てその緊結を慕ひ、柳の  
金剛經を学んだ。やがて柳が歐陽詢から出てゐることを知つて歐を  
学んだ。そうするといつしか字が印版、排字(計算に用ゐる棒を並

べた)のようになってゐる。ついで柳の骨力と天才とで一家をなし、書の技量で  
は宋代第一である。

学書についで米市は、自らこう語つてゐる。「自分は初め顔真卿  
を学んだ。七、八歳の頃は非常に大きな字を書いたので、一枚の紙  
にまとまらなかつた。後に柳公權の書を見てその緊結を慕ひ、柳の  
金剛經を学んだ。やがて柳が歐陽詢から出てゐることを知つて歐を  
学んだ。そうするといつしか字が印版、排字(計算に用ゐる棒を並

べた)のようになってゐる。ついで柳の骨力と天才とで一家をなし、書の技量で  
は宋代第一である。

学書についで米市は、自らこう語つてゐる。「自分は初め顔真卿  
を学んだ。七、八歳の頃は非常に大きな字を書いたので、一枚の紙  
にまとまらなかつた。後に柳公權の書を見てその緊結を慕ひ、柳の  
金剛經を学んだ。やがて柳が歐陽詢から出てゐることを知つて歐を  
学んだ。そうするといつしか字が印版、排字(計算に用ゐる棒を並

べた)のようになってゐる。ついで柳の骨力と天才とで一家をなし、書の技量で  
は宋代第一である。

べたさま)のようになつてくる。そこで極遠良を慕い最も長く留た  
また段季の轉摺肥美を、八面みな全一のを慕、たが、やがて段が全  
く顏傳の筆法から出てきたものであることを覚、たので、遂に法帖  
をもちめて見るよつになつて、晋帖の平法に入つた。鍾繇の四角  
一字を兼て師宣古巨を手本とした。その劉寔碑を臨んだのである。

篆書では詛楚文と石鼓文が好きである。また竹簡は竹の筆を以て  
凌ぎ書いた千のたあり、鐘鼎の銘は石老の點かえりわしめことを  
悟つた。書壁の字は沈侍師を主とした。小字は大いに取るに、小  
字は大いに取るに、以上以上のほかにも米芾が自分の字書について述  
べたものに「自分は幼時より顔真卿の行書を学んだが小字には留意  
しなかつた」といふことあり、ことさらに海兵名書にも「顔真卿の行  
書は教つべし、真書は俗品に入ら」といふことある。ことさらに法  
を無視した顔の楷書は好まらなかつたに違ひないが、当時の及くの人  
人とともに、顔の行書はよく習つたのである。彼の評紙帖などは顔  
法から来ていると董其昌は評している。

董其昌は晋人の正法を得ることに努力したことは米芾と同様で、  
またそのうらうらう点では米芾以後の第一人者であるから、米芾を理解す  
ることこそ、とも深い。彼は米芾の小楷を批評して「米芾の行書は  
世間に傳つて、晋人の書と競手する位だが、しかし米芾の平生自負  
するところは小楷であつたのではないか。その小を大事にしてむやみ  
に書かぬか、たので筆蹟が稀小なのであらう」といふことある。大  
体、米芾の得意は大中字の行草で、小楷などは欠けたものではないとい  
ふ批評が、音から外れ、董其昌のこの言は、その小に對する  
啓蒙の意もあると思わしむが、とにかく米の小楷は決して際におけ  
るものではない。また彼は小楷についてこうもいふことある。「小楷  
は非常にむづかしい。法帖を臨するそのは只だ形骸を得るだけであ  
るから、益々真のそのから遠ざかる。吾人の真蹟を見たいので神化  
から隔たさうであらう。宋では唯だ米芾だけが真の小楷を解した  
といふことある。

米芾は蘇東坡、黃山谷とともに宋代の革新派の書家として、  
そこに彼の書道史上における大なる意義がある。同時に彼は正法  
追求家として宋代の第一人者である。彼の書が字は小易くして

字が難いゆえである。

担当 三年 原 一年 鬼頭 北水 石田

### 六朝時代について

この時代の書について、概説とその主要書について述べて行く。

#### 時代

魏吳蜀の三國の鼎立の時代から西晋の末年まで、漢以来の篆隸と  
ともにそのから新しく脱化した楷行草の書體が相伴、て行なわれ  
た。古代型の篆隸と近代型の楷行草とが互いに交錯して用いられた。  
文書を作成したり消息文を書いたりするには楷行草の體が用いら  
れたが、一方ではまた、何かの儀式に、たそのや特にあらたまつたも  
のにはやはり前代から行なわれたい篆隸が用いられた。

十六國時代になると、最も勢力の大きかつた前秦において、漢人  
にして書を巧みにし崔悦と盧湛がつかえたことが史籍に見えてくる。  
しかしこの國の道品はいづれもまた、三國、西晋以来の隸書の氣味  
を脱却しきれぬ過渡的なもので、その技法においてこそ、中原のその  
にはどうして及ばない點がある。この時代は、書の方角が一定せず、  
江南の書風が入つて承ていながら、また古隸書の體を同化するに  
いたらず、過渡的な現象を呈していったと解せらるるので、朔漢の  
地における異民族の間において依然として新舊の書體が混在して  
いたことが想像せらる。

南北朝時代に在ると、東晋の世に、書聖王羲之とその子王獻之の  
父子が相ついで出たことは、中国書道史上、実に画期的な一大進歩  
をもたらした。この二人の稟賦すくもた異常な天才によつて創造せ  
られた二王の典型は、後世永く中国書法の規範として一般に遵奉せ  
らるることになったが、そうした大勢の定まつたのは、二王の書の  
いかに洗練せられた高雅な風格が南朝の貴族の好みにあつたり適  
合したからである。そのほか南朝の貴族は二王の典型に隨善渴仰し  
たのであつた。

中国の法帖の最も高き地位を占めてゐる時代は東晋であつたといふ。

並行してその時代の第一人物である、彼の書が学ばれ小高くして

中国の法帖の最も高き地位を占めていた時代は東晋であつた。

その後を通じてうけついでている周朝は、東晋と遜から唐にかけての書の第二の半の中間にあつて極めて重要な意義をもつ時代であつていつてよい。

。王羲之について

王羲之は、中国はもとより、日本でも古くから書聖として尊敬されてゐる東晋の能書家である。字は逸少といひ、官に任えて右軍將軍、会稽内史となり、官名から王右軍と呼ばれた。彼は名門の出であつたが中央政府の地位を辞任し、山水の間に遊び、自適を重んじて書業に専らした。そして、書に對してはついに古今の書聖と仰がれるに至り、楷行草の三体を芸術的な立派な書体に完成させたのである。彼の書は伝統的な筆法の主流になつて、いつの世にも古今無二の名筆として絶賛された。唐の太宗は羲之の書を愛するあまり、天下にその書を求め、断簡令墨といふことも愛惜したことは有名である。日本でも奈良時代には羲之の書風が伝わり、平安時代にはいつては、上代様の成立に深い影響を与えた。

羲之の眞蹟はすでに滅んで見ることができないが、「喪乱帖」、「孔侍中帖」などの双鉤填墨本や、蘭亭帖、「十七帖」などの刻本、ほかに羲之の楷書と伝へる「黄庭經」「寒餞論」などがあり、集帖に刻入されたものも大変多い。

彼の書には結体が安定し、古雅な形を保つてゐるものもあるが、反射に爽快かつ奔放な書もある。整然とした筆致と豪放な筆致との両方を兼ね備へてゐる王羲之の書を学ぶことは、古い時代の書の意味をわらう上で、たいへん意義深いことである。

このよつに王羲之について調べてみて、彼の偉大さを感じると、彼の書がごんごんにたくさんの人々に愛されつてきたかといふことも強く感じた。

こゝから書道を学んでいくにあつて、王羲之の豪放さと優雅さを参考にしてやつていきたいと思ふ。

。六朝書経

六朝書経は北方の諸國家を中心として遂次盛大なる宗仙文化が展

開される中で生まれつたものである。殊に五世初頭から六世紀末に行なわれた造寺、造仏の大規模な經營とともに、その膨大な經典の移入、漢訳とその書写は北方書道の特徴ある一大成果を残した。

北方書道は地方的な雄健な傾向をもつ、殊に仏典を寫した字經の大量な眞蹟紙本はこの地方的傾向の中で熱烈な宗仙な眞情をかたむけて書かされてゐる。この字經群は本朝殘紙と同じくすべて眞蹟本であり、大量な種類がある。この中で字經を専門とした經生の字はやや技術としての洗練につとめてゐるのに對し、僕業の爲に書き修業の用の爲に寫してゐるものは心情のままに書寫し、ときには破綻を呈したものである。このように北方書道といふものは個人の価値よりも記録、文獻の必要、信仰の爲のものとして書かされて持に美的規範性の外には意味がおかされてゐない。

その作品には「華嚴經」、「大般涅槃經」、「菩薩心胎經」がある。

最後に、この頃の字經は見たものをひきつけるおもしろさがある。おもしろく、その魅力は型にとらわれない作品程成であり、書いた人の迫力といつていいだらう。

情熱を注いで書いたそののである。

。六朝墓誌

石に刻した遺物は、南朝には極めて少なりが、北朝にはその方が伝存してゐる。北朝には太和十七年(四九三)の頃から南風の書風が流入してきて、六世紀のはじめ二、三十年は最も活発であつた。石刻には、碑、墓誌、摩崖、造像があり、その内、碑と墓誌は石も鐵器で寫された書法もよく美し、文章、内容に本格的なものが多く、書に對してはその当時の最も高級なものが見られる。

墓誌は、地上の立碑の禁止にとせられて、地下に刻石を埋めることから發達したもので、およそ西晋の頃から行われ、南朝の宋齊梁陳にはかなり盛大であつた。近世、洛陽その他から出土したもので六世紀の初め二、三十年のものがあり、その殆んどは北朝のものであるが書風を知つてに都合がよく、この頃の書風にはおよそ、三つの傾向がある。

第一は、勁健なかに自然の風采をそなえたもので、司馬顯字墓誌などをよくその特色を示している。第二は、勁健で、経体の方正な感じのもの、肅宗昭儀胡相墓誌などがよい例である。第三は筆法が中和をえて、温和なやめらかな調子と華びたもので、明らかに、南朝の王者の流儀を受けていると見てよく、張黑女墓誌が最もよくその条件にかなっている。第一の代表的な碑に、張猛龍碑、第二の代表的な碑に高貞碑がよい例がある。

この三種の書風を基準として見ることを要記と鑑賞するに必ず要であると思ふ。

。造像記

造像記とは仏象、道像の縁起を記した金石文のことである。中國に於いては南北朝時代に盛んで、北魏洛陽に造営された竜門石窟窟ことに有名である。この石窟は、西山に二十八洞、東洞に七洞ある。その内外に造らされている大小の仏龕造像の数は九万七千余といわれている。こよらの造像には、禿頂の由來を示す刻記題名が数多あり、文字の識別し得るものが三千種以上に及ぶという。この石窟の中で、正陽洞が、北朝書道の代表となる北魏時代の窟の中で最もよく振らよっている。そしてこの洞に龍門二十品と呼ばれる北魏書道としてすぐれた特色をもつ造像記銘がある。

この中で牛板造像記が最もよく、書體はまことに勁健俊拔な北朝の書をつががそのとして龍門二十品の第一に選ばれて推賞されよっている。

この造像記は石に刻まれたもので、その線は力強い。しかし、その中に見られるこの造像記の絶えまないまっすぐな線を感ぜると、とてもよい。

書けば書けば、その味わいを感じ、その中に引き込まれていくところである。

担当、三年 昭和二年 前田二年 牧道 豊永、新聞



一 弗造像記



初唐の書法をいふ者は、必ず歐・虞・褚・薛の四大家を挙げるの  
と例とする。歐は歐陽詢、虞は虞世南、褚は褚遂良、薛は薛稷であ  
る。一カローシ、四人の出た五代には、多少の差がある。

褚遂良は欧・虞に較べると、約四十年の後輩であり、薛稷はまた  
褚遂良に較べると五十年餘の後輩にあたる。したがって、この四人  
の書を年代的にひらべてみると、そこには明らかに歴史的な變代の  
跡が窺われる。

さて、歐陽詢と虞世南とは、いずれも六朝の陳代に生れ、隋に仕  
え、それから唐に帰した人物である。その唐に帰した時には、すで  
に六十歳に達していた。普通初唐の四大家と稱してはいるが、むし  
ろ隋から唐初にかけて一つの時代を劃した書法の大家といつてもよ  
い。

歐陽詢の書として、皇甫誕碑、房彦謙碑、化度寺造像碑、九  
世官廳銘、温彦博碑の五碑が特に有名で、そのうち房彦謙碑が隷  
書でかかれていたのを除くと、ほかはすべて正楷である。わけても  
九成宮醜泉銘とは、その優劣について古篆專家の間にもいろいろや  
かまひ議論があるが、ともかく楷書を学ぶ最高の模範とせられて  
いるもので、中国書道史上の名品であることは疑いがない。

そのほか歐陽詢の書蹟と傳えられている石刻は相當に多く、また  
各種の集帖の中には、伊尼摩象帖と高帖、張翰帖、千字文などの行  
草書のものが見られるが、必ずしもすべてが真蹟であると断言し  
がたい。ただ、南帖や張翰帖、書風は、わが嵯峨天皇の長朝と傳え  
られる平嶋百詠と近く、またわが國には、奈良朝時代に歐陽詢の真  
蹟と稱するものが確かに舶載せられていた事實と考えあわせて、ト  
南帖や張翰帖などは歐陽詢の書蹟として、ほぼ信憑しきいかなと思  
う。一カローシ、歐陽詢の特技は、やはり楷書にあり、そのうしろに  
行草書のものや隷書の房彦謙碑などは、何といへば楷書に劣るようであ  
る。

それらの虞世南の書として、孔子廟堂碑、貞觀初帖も、とも有名  
で、そのほかには、汝南公主墓誌の真蹟、各種の集帖の中に刻せら  
れている行草書のものや数點有するばかりである。

孔子廟堂碑は原石が亡失して、いまは、十四三井氏藏本に複製  
する唯一の唐拓本によるもの、その真面目を窺うことはできぬが  
重刻本によつても歐陽詢の化度寺造像碑、九成宮醜泉銘と鼎立  
する正楷の名品とみることは、古今定論のみとみてよい。

以上歐陽詢の、もつとも峻拔をもち、たまごり、虞世南は道媚なる  
點に特色を有している。そこで歐陽詢と北派、虞世南を可致とする  
説がある。一カローシ、歐陽詢と北派とするのは、いさゝかと思ふ。歐陽詢  
は、いまの湖南長沙の人と、もともと南朝人であるからである。

次に褚遂良について述べよう。  
褚遂良の書として、伊闕佛龕碑、孟法師碑、房玄齡碑、雁塔聖教  
序の四碑が代表的な作例として高く、このうち孟法師碑は原石が  
今日亡んでしまつて、残るが、唯一の唐拓本が傳えられている。また  
房玄齡碑は唐末が甚しいけれども、それよりもその書拓本に據り  
は一千餘字を見ることができる。

ともかく褚遂良の書の大體を窺うには、極めて重要な資料となつ  
ている。このほか、各種の集帖の中には、栢樹賦、文皇哀冊、梵寬  
賢、陰符經など、その真蹟と傳えられているものがあるが、いろいろ見えて  
いるが、必ずしもすべてを真蹟として信用することはできない。そ  
こでまづ、伊闕佛龕碑以下の四碑について考察してみると、その  
書は明らかに歐虞の二人の長を兼取して、その一家の風を創造して  
いる。

歐の長という楷書の中に隸法を交え、峻拔迫らず、古穆の趣を存  
することをあつた。虞の長というのに剛を合して、筆墨のすのら  
逾媚の妙に富むことである。褚遂良の四碑のうち、そのうち、長と兼  
て兼取するにつれて、また痕痕迹のよく表わされるのは、伊闕佛龕碑と孟  
法師との、つまり初期の書であつて、それが房玄齡碑と雁塔聖教序  
とに及ると、もはや渾然とした褚遂良一家の書を完成して、るので  
ある。古人はこの定例でうめた褚遂良の書を評して、王羲之の媚趣  
を得たものと評している。

そればかりでなく、道評には相違ないが、一カローシ、曾永也虞世南の書に  
較べると、同じ變化している。その變化している點は、褚遂良の書  
には著しく隸法の加わつて、いることである。

だいたいまが之は、古くから傳へられた書様の法を拒否して、新しく美術的の書を創造することに成功したのである。だが、諸遂良の書には、その主義との相背した法が多分に取り入れられているのである。

もつともその釋法を取り入れることは、すでに歐陽詢の試みたところで、諸遂良はそれを學んだに過ぎない。であるが、その意味をみれば、この日歐陽詢は王羲之の嚴格な正統ではなく、王羲之の七色の孫である隋の智永に學んだ唐世南こそ王羲之の嫡傳である、といふのである。

諸遂良の書の完成は、いはば二つの典型の動搖であった。ゆゑか出たあと、その新しい書風を宗するエビゴーンが隆盛をみせ、一時天下を風靡した。そのエビゴーンの首領をならぬのが、すなわち薛稷である。

薛稷の書は、わが道因法師碑、龍朔三年庚申生墓誌、詢露元年のたがひである。最後に中国の書道史は、二つの典型としての兩派の消長起伏によつて形成せられ、かくこととは、この書道史にみいこすいは罷り及んべいである。この事情を知るのた、この時代の書は一つの大きな關鍵を提示してゐる。

この書は、當時の貴族を基とする社会體制がだいたに崩れに瀕して、たがひ、ここに書道ばかりでなく文字や芸術のあらゆる方面によつて革新の風が吹き初められたことに併せて留意すべきであらう。

担当 三年尾崎二年白糸一年岩井、初句

### 三蹟

三蹟時代の背景 天下泰平の平安時代、遺唐使は廃止され、輸入した中国文化は消化・同化されて、ここに日本特有の文化が起つたのである。書道界では、前代の奈良時代に王羲之を崇拜し、その模倣を主としていたのが、一般士人の書は、母のよ流れである。たが、風俗習慣、思想感情と異にする者は、やがてまに止まることのできず、互かから異なる傾向へつらつ、まゝ、日本的意識を突いて、たがひである。

### 【小野道風】

和様の元祖であり書家であり知られる小野道風は、八

九四年、小野道風の子としてこの世に生を受けた。

二十歳の時、能書の進によつて、醍醐・朱雀・村上の三朝を歴任し、官は内蔵頭までのぼった。彼の書として確かなものは、屏風土台の「知証大師諡号初書」の王泉帖のなごがある。

屏風土台の「屏風の色彩物の下書きで、行と草の書体をうまく混ぜていて、律詩八首と絶句三首とを言っている。字形は端正で筆運びが非常に滑らかである。「柳・倫・折」などの品後、画を長くして、変化を作っている。点画は優れていて、十二分に筆力と内に潜めているため、優しくて穏かであり、落着き入念に書いている。このように端正で、上品の書と、和様という。

和様は中国の書（王羲之）を模倣してゐるが、日本的趣意が言かである。屏風土台の詩は大江朝綱の作であるが言いたのは道風である。このことを見れば、朝綱の書の道風に劣れること、なほ道風の才の朝綱に劣れるが如いといわれたやうである。このころ、當時、道風といふ人書、達人であり、たがひ、何となく、次に「知証大師諡号初書」であるが、これは美しくなるやうな感じと書いてある。たがひ、うすかに沈着して堂々たる態度を現わしている。

五泉帖は最初、飛ん来えられてゐるが、次第に洒落のやうになり、ついに、永縛さかと思ふまゝになつて終つてゐる。この自由自在な筆をふる、たがひ、王羲之をまじへた学習の果地が現われつつあるため、中国的傾向が著しく見るのであるが、このころに「これをもちて褒貶（ほめりなす）をすべからず、例体にみらざるのみ」と示している。この常の態度ではないと顧慮してゐるところに、道風のまじへたのが純日本的傾向であることが明らかにせらるる。

平安中期の日本において、まさに書の聖人ともいえる人物が歴史の舞台に登場したことによつて、以後、日本の書道界はますます繁栄の一途をたどつていくのである。

名ある家は、道風の書を持たぬのを恥としたりまでいわれており、その道風の肖像画は皆、現在左に置いて執筆しているのであるが、ここにも何か和様を生み出す精神があるのではないだろうか。

書を以て、その生涯を専らした道風だが、晩年は目を悪くし、九十六年、七十一歳で没した。

書家としてもいれられたが、カエルのガカリと柳の枝に似た、ころころしているのを見れば驚き、能書家になつたといふ話も有る。

### 『藤原佐理』

彼は三蹟の内では年代的に中間に位置する。つまり道風の晩年に佐理は若輩であり、佐理の晩年に行成は青年であり、たゞになる。このように三蹟の年代的な関係から、佐理は若くして道風の盛名を知り、晩年は行成がすでに一家を成すうしていた時機にあたり、道風・行成の二人を世中に肌で感ずることができた。

佐理の真跡は道風や行成に較べて、極めて少ない。万人が認めているのは詩懐紙と離洛帖の二点に過ぎない。量的にも野蹟・権蹟の大部分が卷子装として文字数が多いのに対し、この二点は掛幅装で保存されているように行成も多い。

また、懐紙と書状とはその性格上、書体や書風、内容なども異なり、書いた年代も約二十余年の距たりがある。そこで、この二点によつて佐理の年齢的な変動も推察もつた。また取りすまうた行書の懐紙と逸筆で書いた草書の書状とは、別人の筆跡のような相違がある。

この二点は自分の書の型を作ろうとしていた時機のものであり、後年の書状に見るような逸筆ではないにしても、詩懐紙を仔細に見ると、必ずしも逸筆は暢達してはいない。

道風は和様という新しいものを目標としたが、佐理はむしろ、前述のように、前代の筆法の中から自らをまかやうとしたのではなからうか。和様の筆線の中に唐様に似た抑揚を持つ線が見えて、和様に終始した野蹟や権蹟とは違つた外面的な強さを見出すことが出来る。

佐理は三蹟の中で、野蹟と権蹟の間に多くの相違点を見出すにも拘らず、個々には一別趣の書風のように見えることに目を気づく。懐紙は当時の書風として和様であることは、勿論であるが独特のりずみ、抑揚の線急がある。それは三蹟の一人橋逸勢筆と伝ふる伊都内親王願文に似た來回気を持つ、という。

つまり、三蹟時代の古い懸念がある。詩懐紙は二十六歳の書で、改め、変化のある書風のわりには逸筆がみえないように見える。

また、野蹟に似た威鋒と権蹟に見られるような鋭い露鋒の文字とが交錯して、考えながら書いた文字を感ずる。

大嘗会(天皇即位の儀行(宮中行事)の際、用いられた扇風の色紙形に佐理は光宗に浴した。これは当時一流と認められたことを意味し、能書(文字を書くわざがうまい)として地位をゆるがさないものとしたのである。

これは他の追隨を許さぬ安定した一家の書風を築いていくこととなつた。

『藤原行成』 右少將義孝の子、摂政太政大臣伊尹謙徳公の孫として、九七二年に誕生した。父義孝が若くして没したことから祖父に養育された。十歳の時、外祖保光の桃園にみいで元服した後は次々と昇格し、四十八歳で權大納言となる。

行成が記した日記の「権記」(「日權大納言行成卿記」)と呼ばれるのはそのためである。

齊信・公任・俊賢とともに四納言と呼ばれ、その才能はよく知られていったが、こゝに行成は能書として傳へ、ほとんど讀書の功によつて昇進した。しかし世尊寺流の開祖としても特別に尊重され、それ故、書風が行成風であるものはすべてま行成の書跡であるとしたが、行成・真跡といふれるものは、現在に至つては僅かに「句白祭天詩巻」の「後送嶽本白楽天詩巻」の「白氏文集切」の「本能手切」の「陣定文章」の「詩稿」の「消息」の七点を残すのみである。

その書は道風と相述していたらしく、夢で道風の靈に逢つて、筆法を授けられたと日記にあるところから、その熱心のほどが察せられる。一世を風靡した彼の書風は、端正で少しも崩れては、点画は隠れて、しかも筆力を内蔵し、より優麗典雅である。

道風にさらに新鮮味を加え、艶にして暖かい魅力をもつているのは、時代の風潮に合っているのであり、また昔之以米沃練せしめて名名(名)の美の定成に力があつたのである。

空澄は我國の書の「大相」とあるが、行成もまた同じ様に「大相」と呼ばれていたのは、彼が我國独特の和様の「大相」として筆は

れていたのである。すなわち、その輝かしい書歴が、道風、佐理と共に三蹟と敬えられ、その流を世尊手流とし、永く継承されたのである。

室町時代になり世尊手流は絶え、持明院流に代ったが、これは世尊流の延長である。故に行成は傍々まで、大祖とし、いふがめめらしたのである。

### 担当三匠瓜生・一年児島・後藤

#### 版名

版名を研究する上において、平安中期以降の古今集、和漢朗詠集を中視して、その初歩的整理の方について、以下述べてゆく。

#### 古今集

「古今集」は、初の勅撰和歌集である。その成立期についてはいろいろの説があり、一定しないが、飯名所より延喜五年（九〇五）四月十八日に「万葉せられし」たまたまつらゝめた」と、たゞには「台。これを以て、比較的早い時期に諸歌の家集や、古来の旧歌が載せられ「万葉集」として、重んじられたと認められ、即ちその成立にまつらるゝ「古今和歌集」といふ。その成立は延喜十三年（九一三）ごろとなる。

そのころの文化の状態は、漢字を採集するは行末のまま使用する、いわゆる「男子」万葉が「万葉」とも呼ばれるものには使用し山であり、むしろ使わなくなった漢字の使用を「草書」といふ。延喜十三年（九一三）の成立は、その後の文化の発展を暗示する。

現存する下等を通覧すると、確かに紀書之、藤原行成の筆跡と言へるものは一「もつ」といふ。そのほか「古今和歌集」の清見本や十世紀ごろの写本は、ほとんど「草書」の筆跡を示している。

現存する下等の中、比較的古いものには「草書」の筆跡を示すものがある。そのほか「古今和歌集」の「万葉集」にある歌を「草書」に見ると、その筆跡が「草書」であると見られ、その筆跡の色彩の異なりを認める。また「古東洋書」で見られる。

続いて「万葉集」が上げられる。筆者は紀書之とすかしているが、三人の寄在とみり三種に分けられる。料紙は二重の麻紙を用いた表に細かい生母砂子を入れ、歌一首を一行書かしている。

第一種は巻一、九、二〇の三巻は、身分も高く、前にも述べた能書家か書いたと思われる。字形は端二種に変化に富み、文字が「たひ」たりと「たひ」の連筆で、筆圧の強弱がかなり強く、筆跡も巧みでその潤滑が美しく、優麗典雅に「たひ」の筆跡がみえる。

第二種は巻二、三、五、八の四巻で、重厚さを見せ、大変個性的で字形は石上に傾斜し、筆勢も筆力、精利である。かなの韻合は右から左へ流れる連綿の線が目立つ。

第三種は巻十八、十九の二巻で、「高野中」の中を隔ちる。筆勢も字の变化に乏しいが、明るく軽快で、たわやが美しく、この軽やかさが風情を十一世紀中、後期を代表する筆跡で、この手にする筆跡もかなり多い。

「高野中」と書写された時代が同じであるとは思われるものの、やや様式が異なる。古今集の功も、この「高野中」と古今和歌集との代表ど、文字の形は実に端整で筆線も充実に「たひ」の連綿の線が長く筆圧の強弱、墨色土の変化なども優れている。又、回転の多い感や、よく似た墨色を示す「花木中」や、筆跡の強弱の反転の感じが表われる。すなわち「本所中」である。

一方、「高野中」同様に料紙にやわらかな流麗な筆跡を駆使した「花木中」のような作品もある。

総じて十一世紀中頃の筆跡は優雅、典雅を「たひ」をみくらわに感ずるという事がなく、上品で端整で、いかに平安前期を代表するかの作品といえる。そのほか、その筆跡は明らかでない。

以上述べた作品は、ほぼ同じ時代から、傾向が異なるものとして、瓜生、藤原行成、古今集が、前述の多くのまじりまじり、異なる強弱の強弱が大きくなる傾向を示す。その後、十二世紀初頭に約七〇程にも及び、巧妙な「たひ」の筆跡に、非連続、及び「万葉」の漢字も、かなの調和を見事に表現した。元永本古今和歌集の、その書風は、たわやが、高きであるが、整った字形や流麗な筆跡を、その書風は、その味も

用す、最も技巧の進んだものに注目すべきものといえる。其  
を存すか、仮名序と本文は一行の欠脱も無く「古今和  
歌集」の完本として現存する最古のものである。そこで、十二世  
紀後半には重厚な粘り強いま風が表現してはいる。伝播推定書  
今成中しむいである。

丁、古今和歌集の古筆を複製した。千載時成に属しては、  
約40年の作品が今日に残り、そのも筆筆である。従って古今和歌集  
の古筆の歴史を述べる事は、その歴史を述べることになる。それは、  
古今和歌集のいつの時代に、中心となる作品であり複製され  
経けたか、その物語、というこゝにはなるだろう。

### 和漢朗詠集

感情の高まりを前に出さず、歌い上げるというこゝが、歌  
の本末であつて、文字を借りて眼に訴ふるようになつた。その後、  
それを朗吟詠するやうな事は自然の成り行きであらう。歌を朗詠す  
るこゝが、音弦や舞と同様に一つの大切な要素であつた。平安中期に和  
漢の詩や歌を各人の好むこゝろによつて選出され、テキストとして  
行つていたであろう。それを寺符印人により一般の便利上、編集する  
のが致した。ミラーによつてまとめられた朗吟用のテキストが、第一に和漢朗  
詠集二巻であつた。

和漢朗詠集は藤原公任（1077-1147）の選に成り上るに、季節に關係  
あるものを集め、下巻は雅の部というこゝで収録してある。

この和漢朗詠集がもたらした原因として第一に朗詠そのもの  
の盛行に、第二に極めて好評のテキストがあつたこと、第三に、文字  
と仮名の両方を具備してあり、音字のキホとしてまとめた道徳だったこ  
ういふことである。

平安から鎌倉初期にかけて書写された鑑賞にも十分適するものとい  
つても可い。上下宛本として遺るものには、伝行成筆本  
安本二巻、伝行成筆本二巻、伝公任筆本二巻等、完本では  
ないが、巻々を遺るものとして、伝行成筆本二巻、伝行成筆本  
近衛本二巻等、断簡したもの、遺るものには、伝行成筆本大字朗詠集切、  
伝行成筆本切、伝行成筆本珍奇切などがある。これらの中から、  
くつくりと上り説明を加えて行く。先ず、複製本和漢朗詠集は、

材料は数色の具引紙に白・黄・紫の墨を多用し、表紙も金銀  
の切箔、砂子の装束のもの、裏紙は端正で美しい偏箱紙に、  
現代人に好まれ、又、真面目な形や縁が明るく、教育界の平本とい  
ても尊重され、巧妙にして香電典雅、気品があり、手守りな  
の中にも傑出してゐる。宝瓶本は関戸本と全く同筆であり、根柢万葉  
集や高野切二種は、いしも似てゐる。字形は端正で変化に富み、  
一見素直で粗雑なようであるが、かゝる筆体を多く用いた歌  
書で、実に堂々として、力量、風格共に優れてゐる。又、縦画  
の紋をこゝろに長引いてあるのも藤原氏の根柢を、ヤがて、後  
時代の武家社会の剛健な時代に好まれるべき特徴と考  
えられる。玄輪切は、かゝる大字で、羅漢の飛まつてゐる  
淡墨の染紙判紙に書かされてゐるが、極めて調度性の高いもので、他  
類を見ない、其風は、高野切筆本に近く、料紙の天地が高低、  
さまざま、明り、かりし、明るく、びやびやと、縁が、  
丸味があつた品位が高い。

ひびきは、実際遠くを書まふにつれて、同じく見解もあり、  
すば、少し詳しく述べたいと思つて、執筆法について、  
の大字の筆の時に通する双鉤法（筆の軸の前方に指を二本かける）  
のこゝろの時に通する單鉤法（筆の軸の前方に指を一本かける）  
があり、前者は筆力がかかるが、軸の軸が少しく固くなり、後者は筆は軽  
軟かつ、筆力もやや軽くなる特徴を持てゐる。腕の横之方にも、  
指ありの小指を机につけて置く（指を安定させる）④手首を  
（手本をよく見よ）⑤腕を机の端につける（筆が腕の間に動き、  
伸びやがたが出来る）⑥腕をおろす（小字の創作に、伸び、伸び  
した線や節がある）⑦この場合も、手首を引締めることにより  
手首の筆先の動きが、おろすようになり、すば、それは、  
んて、体ぶ、  
自分に合つた執筆法、腕の横之方が、合つかれば、筆体の種類から均  
ぬす。最初は大まか、くりまきり、ズムをつかれり、  
筆の

料紙は数色の具引紙に白・黄・紫の墨を多用し、表紙も金銀  
の切箔、砂子の装束のもの、裏紙は端正で美しい偏箱紙に、  
現代人に好まれ、又、真面目な形や縁が明るく、教育界の平本とい  
ても尊重され、巧妙にして香電典雅、気品があり、手守りな  
の中にも傑出してゐる。宝瓶本は関戸本と全く同筆であり、根柢万葉  
集や高野切二種は、いしも似てゐる。字形は端正で変化に富み、  
一見素直で粗雑なようであるが、かゝる筆体を多く用いた歌  
書で、実に堂々として、力量、風格共に優れてゐる。又、縦画  
の紋をこゝろに長引いてあるのも藤原氏の根柢を、ヤがて、後  
時代の武家社会の剛健な時代に好まれるべき特徴と考  
えられる。玄輪切は、かゝる大字で、羅漢の飛まつてゐる  
淡墨の染紙判紙に書かされてゐるが、極めて調度性の高いもので、他  
類を見ない、其風は、高野切筆本に近く、料紙の天地が高低、  
さまざま、明り、かりし、明るく、びやびやと、縁が、  
丸味があつた品位が高い。

領をつかむ事です。次は連綿です。これは何卒の統てこそ意味のあることばけなり。それが連綿美という日本の特有の優雅を感得させたのせいで。連綿のみの愛。連綿こそが命と云うのです。一寸一寸の筆体よりも、連綿の呼吸をとり、こそ気が持ちは大切なのです。

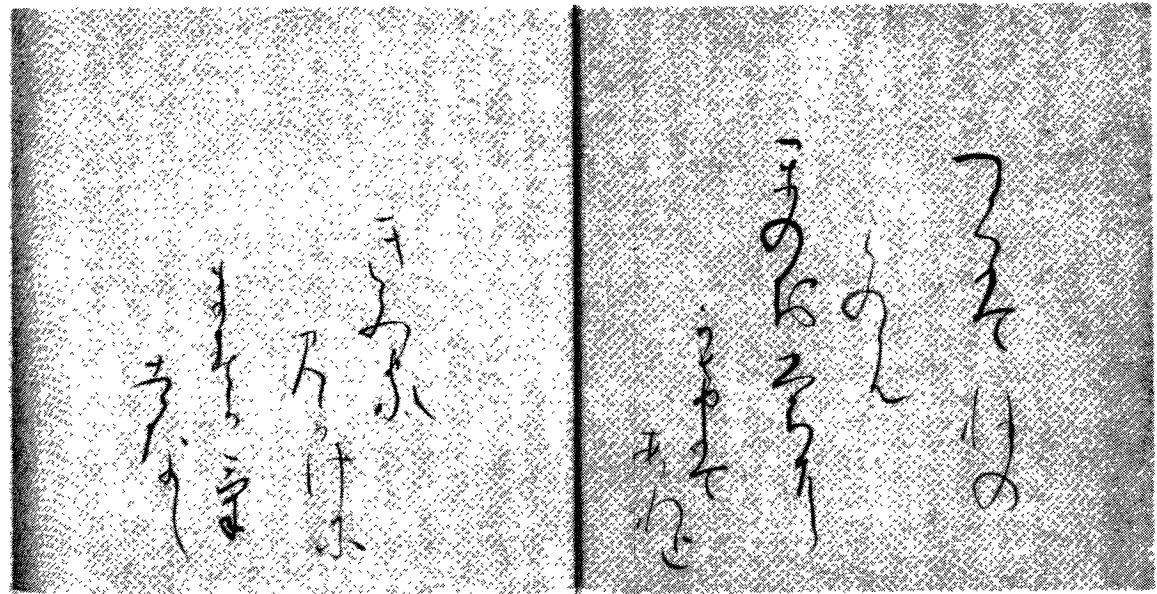
③ 初は穂は毛笔の筆力、開閉に精神を集中して軽快で、た穂を出す。

最後にあります。まはせやけり、形、線、墨の成り立つもの。よう。まに際には、墨の調子、線の動き、形の構成を感得、値中、またらこの書素を一夜に見取りながら、まにまに、く様にすることもよいでしょう。

担当四年藤代三年平日二年石川正平一年西平



寸松庵色紙



継色紙

山本 順一  
中川 純  
大谷 兼

印は、古くは原始的な精霊信仰の中から出たもので、その使命の裏づけがあるところに、文字の美、墨印の美があり、また、一かき、その原初の精神を意識の底に押こめ、運剣の「美」を素に引き出したものが篆刻です。

篆刻には、「字法(篆法)」、「筆法(布置、構成)」、「刀法(筆法)」の三つの段階に分かれています。

・字法：篆刻には、主に篆書体を用いるので、正確な篆書体を習得する必要があります。また、時代の異なるものを選ばなければなりません。書下(文)は、詩文を選び、それを、楷、行、草書などの書体で書くか決めることに相当します。

・筆法：字を印面に入れる場合の構成のことです。疎密の関係をよく考へることです。書下という作品構成と同一であると考えられます。

・刀法：実際に印を刻す段階であり、原則として、刀を手前に引いて切らばよい。書下(文)は、筆下(書)と(運筆)に相当します。また、印の種類にも刻り方によるものと、使用用途によるものと、二通りがあります。

・刻り方によるもの

1. 朱文印(陽文)：文字を凸状に刻した印のこと。文字を彫り

マ刻、フイります。押したたき、文字は朱くかかります。

2. 白文印(陰文)：文字を凹状に刻した印のこと。印を押すと、文字は白くうつります。

3. 朱白文相間印：一つの印の中に、白文、朱文がまじり、フイ



朱文印 (陽文)

朱白文相間印



朱白文相間印

・使用用途によるもの

1. 姓名印：姓名を刻した印。白文を用います。

2. 齋号印：書や絵などの書ま出に押す印。ぶつう白文を使います。

3. 雅号印：実名の他に、別名をつけたものを刻した印。朱文が

多く用いられる。

この他に、遊印、収蔵鑑賞印など、多く、バラエティーに富んだ印があります。

アは、篆刻のやり方を間違に挙げたものです。まず、五體字類など自分の名前を引き、その篆書体を探します。例えば「春山」の篆書体は「壽山」となります。また、調へた篆書体をそのまゝ印材に刻すわけではなく、その前に印稿を作らなければなりません。印稿とは印材に希望する前に作る草書であり、普通、厚紙に墨をぬり、印面と同様の輪廓を作り朱で書き入れ、白文の場合には朱をぬり、印面に墨をぬり朱で書き入れます。「春山」を例に取ると図1のように作り、次に墨で書き入れます。また、この日、大雑把に図示したわけですが、実際は、肉太い部分を削り、たり、逆に極端に細くしたり、あるいはわくを



と、たりマ下の図2のように作ります。



次に、この印稿の通りに印材に削るわけですが、印材によつて、印面が平らにならないうい場合もある。下紙やスリなどを置いて印面をけすり平にする必要があります。次にこの印稿をまともに印材に希望するわけですが、朱文印の右を例に取ると、印面に墨をぬり、その上に朱で印稿の通りに書き入れます。この時、印底を用いた印材を固定しておけばよい。下紙、字入れが終った印材に印材に刻入りますが、この時も印底を用います。印材にもいろいろある物があります。その下に石の印材の場合、説明します。右の印材には、中鋒平頭刀の印刀が最も適している。下印刀はこれを使回すとよい。下紙、印底に印材を固定した上、印刀で墨の部分を彫りある程度彫り、たゞ印泥をついて印を押して再び印稿の通りに彫り

いるのかどうか確かめようとする。印材によ、てはま  
り方を入り過ぎるとひびが入り、割れたりする場合もあるの  
で、つ、時間をかけて丁寧に彫ることか重要だす。  
次に、篆刻を始めると、ア参考として、見ようという印の  
列をあげておきます。書道もよく下すが、篆刻も良い作を見よう  
から勉強すること、大切か勉強法の一つだす。

高美彦作



佳善之印



流光歎人勿疑詫



武谷成章約簡

稲毛屋山作



驛客



流光



無志

最後に、篆刻の材料についてですが、現在では、書道用具専門店  
に何であらう、ついるのが気軽に手に入ります。必要な材料といえ  
ば、印材、印刀、印色、印箋があり、補助材料として、篆刻文書  
印紙、印床、筆、墨、朱墨、硯、布、紙ヤスリ、刷子などが挙げら  
れます。篆刻という通念から、最近はなんとい、つ、腕石類下し  
う、刻一も線の味わい、つ、用刀が極めつ自由であり、硬土、軟  
土、適当な脆土、ねはり等を備えついるわけだす。印刀につい  
は、篆刻刀又は、鍛冶とも呼ばれついます。こ山には、双鋒と片鋒  
があり、さらに平刀と斜刀とがあります。篆刻に  
は、双鋒が良く、斜刀より平刀がよいと一般的に  
は、言われついます。鋒の幅も大小いろいろあり  
ますが、一センチ前後が最も使い易い下しう。  
又、印物は、印泥とも呼ばれついます。こ  
山も粗悪なものは色も悪く、油がにじんで使えつれないの、注意し  
つ下さい。中国の印泥が現れ、輸入されついます。なるべく良質

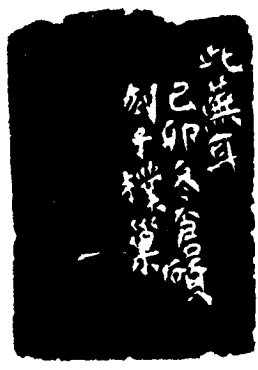
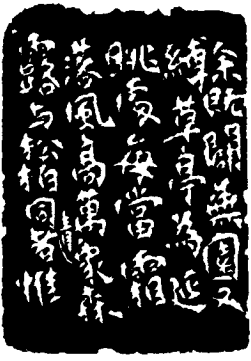
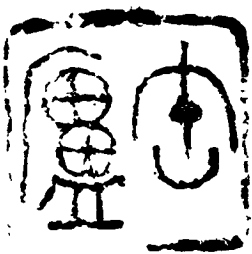


双鋒



片鋒

のものを選んで買つよう下しつ下さい。印箋は、印を押し保存する  
まの下、中国製の白紙上質の白標紙がよい下しう。次いで宣紙五  
版羅紋紙等下す。また近時、中国製誘紙も多く用いらつています。  
以上、篆刻について簡単に説明を述べつました。皆さんも、  
篆刻を始めつては、は、自分書の世界に広  
ります。



吳昌碩の印



コーヒーハウス

# 北 欧

福大バス停前 TEL 871-6232

おふくろの味 お持ち帰り寿し・弁当・丼物

# 花 す し 弁 当

コーセストア隣 TEL 864-5348

味自慢 卸かまぼこ 造って売る店

# 上 田 蒲 鉾 店

福岡市中央区六本松 電話(741)7109

額・表装一式

# 菊池晚香堂

〒810 福岡市中央区六本松3丁目12-24

TEL (092) 741-0897

- 公安委員会指定
- 学生割引有
- 託児施設完備
- ローン可

# 福岡県自動車学校

☎871-0826

福岡市城南区田島6丁目(茶山公務員住宅横)  
福大正門前から毎時スクールバス有

書道用具専門店

## 雲 峰 堂

〒812 福岡市博多区下川端町6-113  
電話 (代表) 281-1550

## ヘアサロン まつもと

城南区東油山1-1-14 TEL 864-6047

食事の店

## ひかり

朝 6:30~夜 10:00 朝食 300円

七隈7丁目31-14 サンチェーン横 TEL 861-2150

年中無休

24時間営業

*Any Time Will Do!*

**KURODAYA 梅林店**

TEL 801-7885

就職指導, 国家資格指導機関

**九州学生相談センター**

相談室 〒812 福岡市博多区東2-17-5  
(モリメンビル4F)

TEL (092) 473-8943 (代表)

コンビニエンスストア



**ローソン 梅林店**

城南区梅林2丁目27-17

TEL 871-1894

LIQUOR  
MUSIC  
PERFORMANCE



**NEWYORK**

七隈四ツ角

PHONE 864-6351

合宿用寝具類の専門店



貸ふとん

つるや

TEL 521-6565

福岡市中央区薬院3丁目10-10

アパート・間貸・下宿

高田住宅

〒814-01 福岡市城南区片江5丁目1番31号（東七隈信号角）

合宿にクラブ活動に電話一本で

寝装リースのレンタル 丸屋

福岡本店 092-566-1911

北九州営業所 093-661-5541

東営業所 092-622-2190

飲んで・歌って

焼鳥 あかし

原・尾崎の店

城南区田島四丁目17-18（田島派出所斜前）

TEL (844) 3325

コンパ<sup>パ</sup>歓迎

大小宴会場  
割 烹 **大 仙**

天神店 中央区天神2丁目  
TEL 721-0086

はかた店 博多区博多駅東2丁目4  
TEL 411-7600

掛軸、額縁、屏風表装一式  
**萬 年 堂**

〒814 福岡市城南区鳥飼4丁目1-39  
TEL (092) 821-7767

和漢文房舗 **硯 山**

〒810 福岡市中央区天神3丁目5番23号  
電話 (092) 721-1644 (代表)

福大生の  
いこいの広場

ボウリング  
ゴルフセンター  
バッティングセンター  
卓球センター  
ビリヤード  
ゲームコーナー  
レストラン風月(七隈店)  
音楽喫茶(もみの木)  
雪印スノーピア  
フォトブティックジョー(七隈店)  
コピーコーナー  
多種文化サークル

**七隈ファミリープラザ**

〒814-01 福岡市城南区七隈8丁目4番8号 ☎092(861)5555

お食事処

# 大吉

(福岡大学バス停前)

※クラブ・各種弁当予約承ります

TEL 864-0134

事務器 オフィススチール家具  
 事務機械 オフィスコンピューター  
 パーソナルコンピューター  
 ファクシミリ・複写機  
 ワードプロセッサー  
 通信機器 業務用ボタン電話工事  
 (電子電話)

## 株式会社 九和

〒810 福岡市中央区高砂2丁目2番1号  
 TEL (092)522-9008 (代表)  
 FAX (092)531-7501

☑特別会員の結婚式、披露宴、  
 同窓会などご計画の折は、お  
 得な特典が使えるガーデンパ  
 レスでどうぞ。



私立学校教職員共済組合九州会館

福岡市中央区天神4-8-15・日本銀行ウラ  
 (駐車場30台収容)



わたし、私立学校を卒業しました。

福岡県内の大学・短大・高校の校章です。

●お申込みお問合せは…福岡・天神

# ☎(713)1112

ブライダルコーナー直通 ☎(752)0562



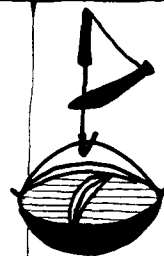
# 焼鳥 ぼけ八

友泉第一バス停江島屋ウラ 《福大OB経営》

城南区友丘2丁目2-2 TEL 801-7763

## 居酒屋

# 庄三郎



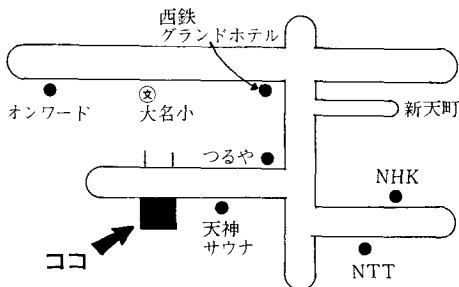
城南区七隈四ツ角 TEL 861-3884

# 祝 福岡大学書道部創立25周年

とにかく1度立ち寄ってみませんか!?

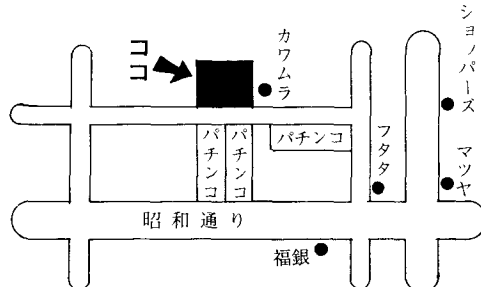
## 今、噂の焼とり・居酒屋!!

〔権兵衛館大名〕714-2296



70人様収容

〔権兵衛館てんじん〕761-2684



150人様収容

# 筆・墨・硯・紙・書籍

中国書道用品・展覧会の搬出、搬入

■ 駐車場有り

## 株式会社 平助筆復古堂

福岡市中央区春吉3丁目3街区9号

TEL(761)5122・(761)0884

